第16回大会
せたがや福祉区民学会



学びあい 広げよう せたがや福祉の輪

「多様な人々をつなぐ 運動・スポーツの可能性」

報告集

日時　令和6年11月9日(土)

12時～17時30分
(開場11時30分)

会場　日本女子体育大学
本館・東館

目　　次

◆ **せたがや福祉区民学会第１６回大会プログラム**..... 2
◆ **日本女子体育大学 キャンパスマップ**..... 3
◆ **全体会Ⅰ**..... 7
開会..... 8
せたがや福祉区民学会会長挨拶..... 9
世田谷区長挨拶..... 10
せたがや福祉区民学会第１６回大会開催校挨拶..... 11
基調講演..... 12
◆ **実践研究発表**..... 23
ポスター発表一覧..... 24
口頭発表一覧..... 25
ポスター発表　第１会場..... 30
ポスター発表　第２会場..... 38
口頭発表　第１分科会..... 46
第２分科会..... 54
第３分科会..... 64
第４分科会..... 74
第５分科会..... 84
第６分科会..... 94
第７分科会..... 104
第８分科会..... 114
◆ **ワークショップ**..... 123
◆ **全体会Ⅱ**..... 131
大会総括..... 132
◆ **第１６回大会実績**..... 138
◆ **大会プラス**..... 139
◆ **学会名簿**..... 141
せたがや福祉区民学会役員名簿..... 142
第１６回大会実行委員名簿..... 143
会員名簿..... 144
◆ **協賛企業等広告**..... 147
◆ **資料**..... 159
「せたがや福祉区民学会」規約..... 160
せたがや福祉区民学会設立趣旨..... 162

せたがや福祉区民学会第１６回大会プログラム

１　全体会Ⅰ　（１２：００～１３：００）　本館１階　１０２教室

○開会挨拶　諏訪　徹　せたがや福祉区民学会会長

○区長挨拶　保坂　展人　世田谷区長

○開催校挨拶　佐伯　徹郎　日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授

○基調講演　「運動・スポーツでつながる 地域の輪っはっは！」

雨宮　由紀枝　日本女子体育大学体育学部名誉教授

２　分科会　（１３：００～１６：２５）

○ポスター発表　（１３：００～１６：２５）　東館３階　３０８・３０９教室

【コアタイム】　（１５：１０～１５：４５）

※発表者が説明および質疑に対応します。

※ポスター会場は１３：００から１６：２５まで自由にご覧いただけます。

○口頭発表　（１３：３０～１６：２５）　各教室

第１分科会　東館３階　３０６教室　　第５分科会　本館３階　３０３教室

第２分科会　東館３階　３０７教室　　第６分科会　本館１階　１０１教室

第３分科会　本館３階　３０１教室　　第７分科会　本館３階　３０４教室

第４分科会　本館３階　３０２教室　　第８分科会　本館３階　３０５教室

○ワークショップ（１４：００～１５：００）　本館１階　１０２教室

３　大会プラス

４　全体会Ⅱ　（１６：４５～１７：３０）　本館１階　１０２教室

○大会総括

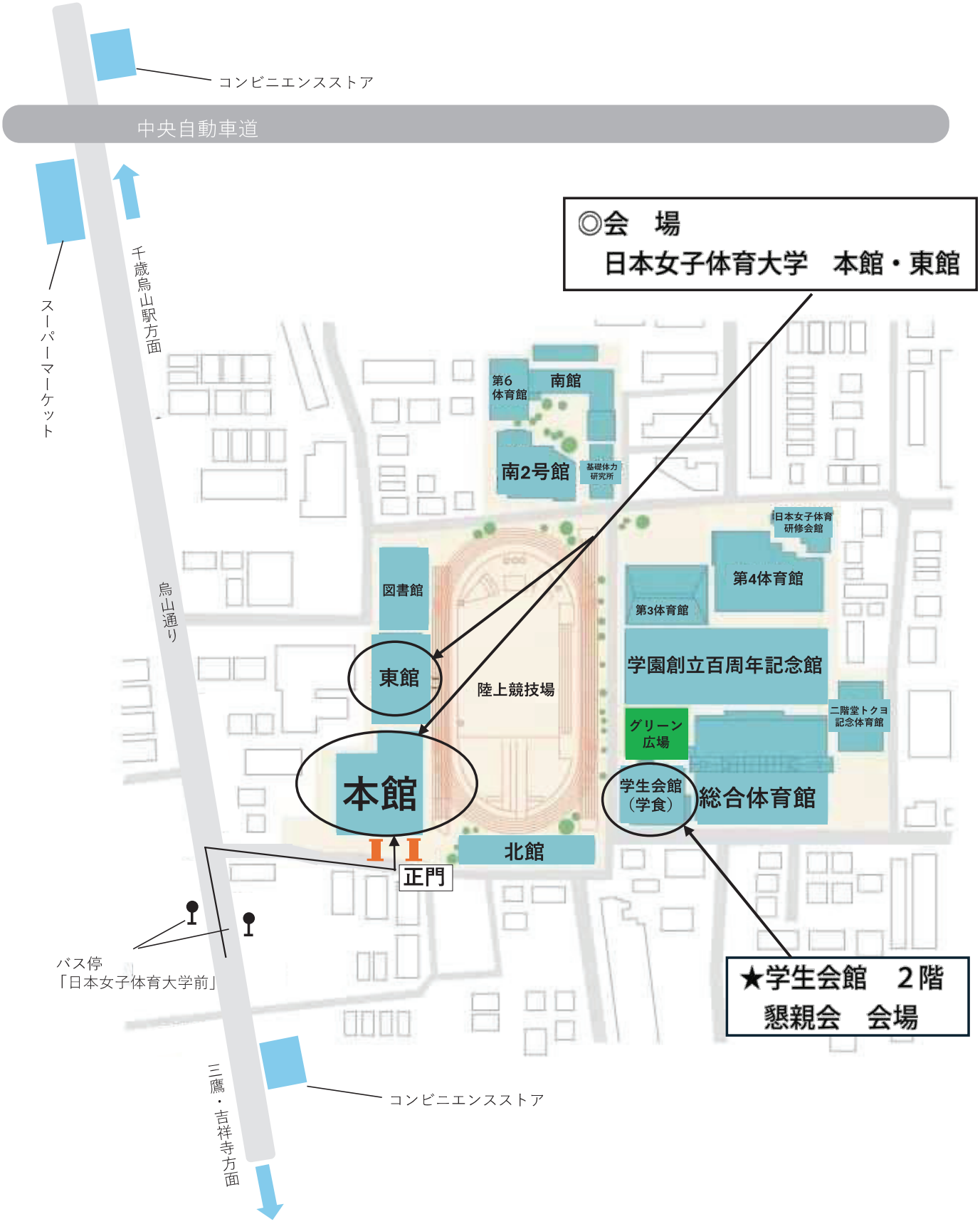
○次回開催校挨拶　園田　巌　東京都市大学人間科学部児童学科准教授

○閉会

※全体会では、手話記録・パソコン文字通訳を行います。
※分科会で手話通訳をご希望の方は総合受付にお申し出ください。

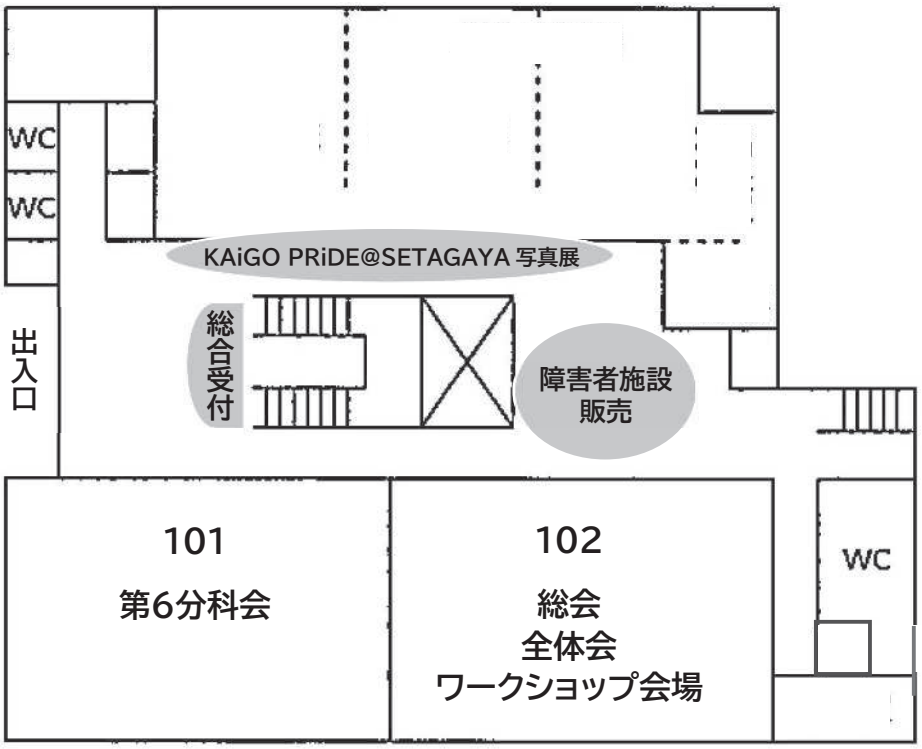
※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学の学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

日本女子体育大学 キャンパスマップ

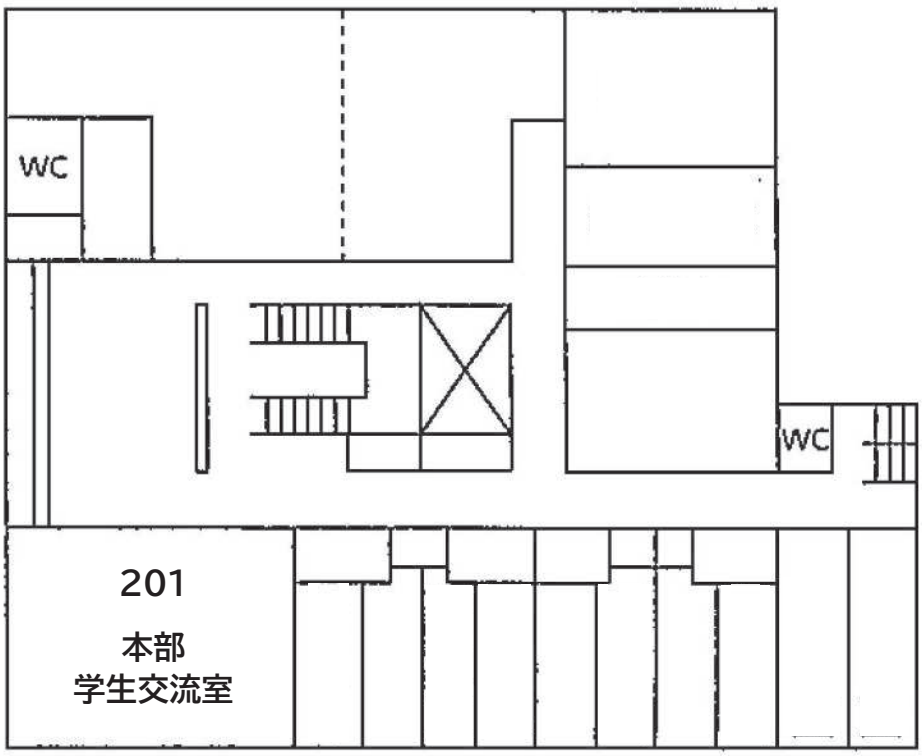


本館１階・２階　フロア図

〔本館１階〕

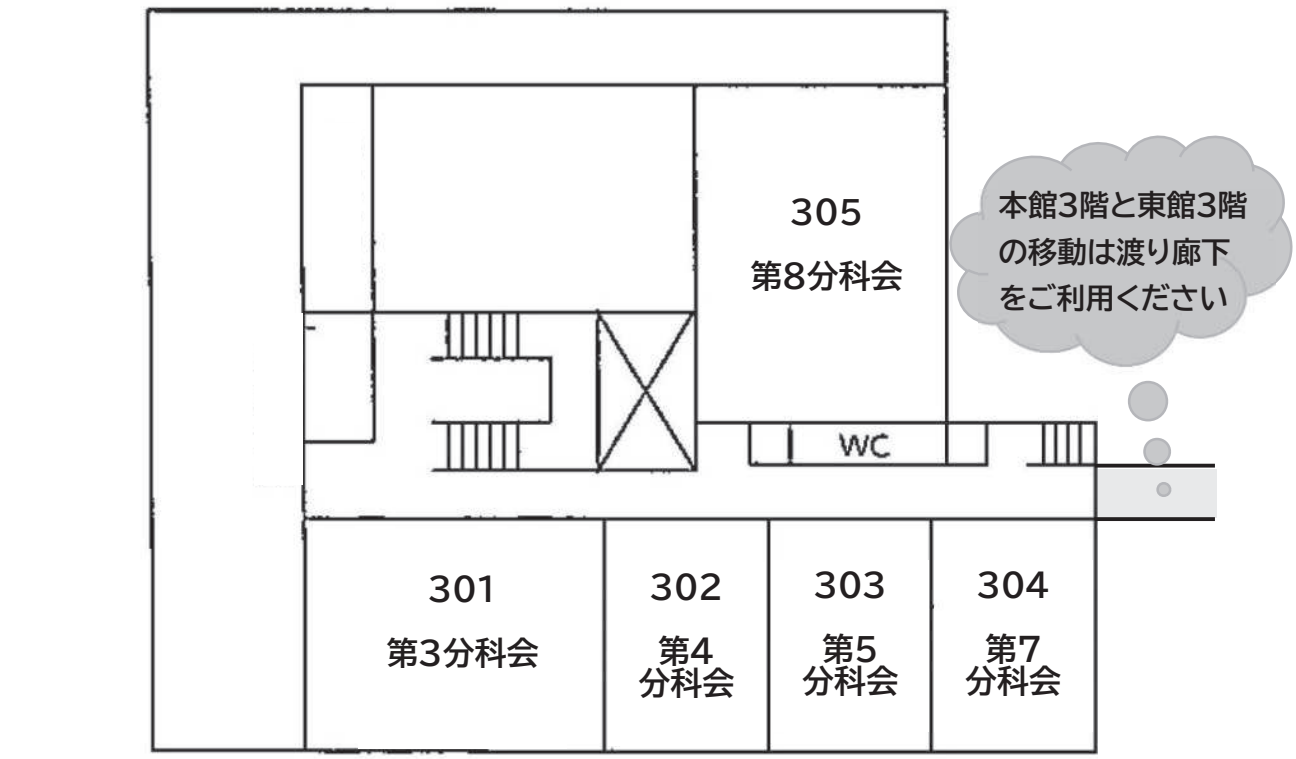


〔本館２階〕

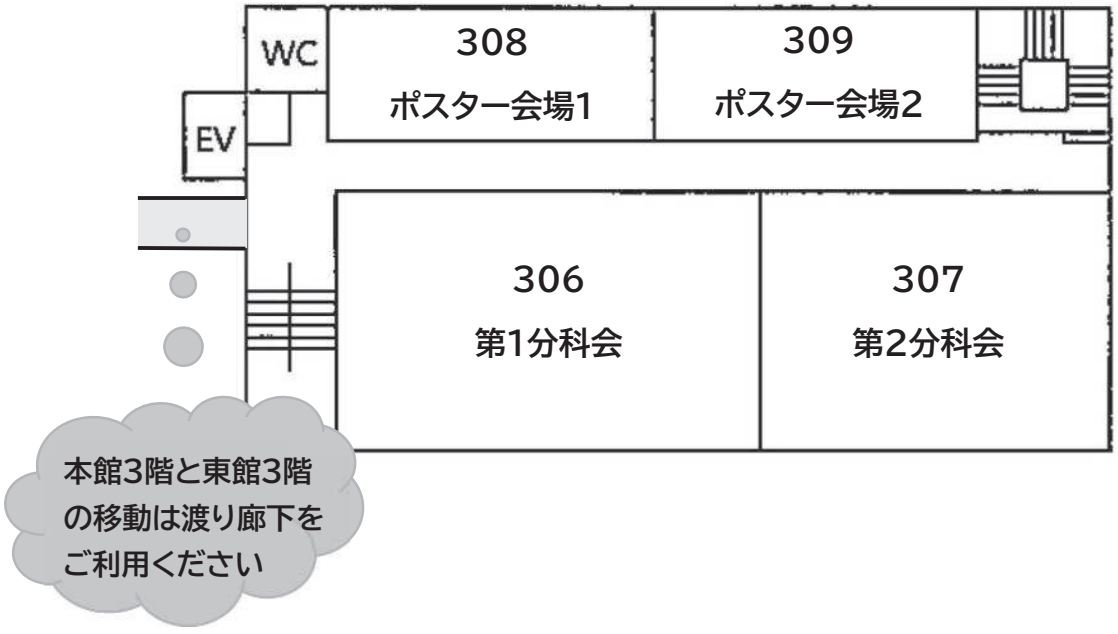


本館３階・東館３階　フロア図

〔本館３階〕



〔東館３階〕






せたがや福祉区民学会
第16回大会
会場 本館・東館
時間 12時～17時30分
せたがや福祉区民学会
学びあい 広げよう
せたがや福祉の輪



全体会Ⅰ



開　会

進行　日本女子体育大学　佐伯　徹郎



皆様、こんにちは。
ただいまから、「せたがや福祉区民学会 第 16 回大会」を開催いたします。
本日は、ご参加いただき、ありがとうございます。
私は日本女子体育大学 健康スポーツ学科長の佐伯 徹郎と申します。実行委員長を務めております。全体会の司会も務めさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

開会に先立ち、この会場におきまして「せたがや福祉区民学会 令和 6 年度総会」が開催されましたことを報告いたします。

さて、本日は、お手元の大会要旨集の 4 ページ「せたがや福祉区民学会 第 16 回大会プログラム」に沿って、進めさせていただきます。それでは、早速、全体会 I を始めさせていただきます。
なお、せたがや福祉区民学会では、記録及び当会の広報のため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、差し障りのある場合は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけておりますスタッフまでお申し出ください。

はじめに、せたがや福祉区民学会 諏訪 徹会長から、一言ご挨拶申し上げます。



せたがや福祉区民学会 令和 6 年度総会



せたがや福祉区民学会会長　挨拶

日本大学文理学部　諏訪　徹



皆様、こんにちは。日本大学の諏訪と申します。この学会の会長を務めさせていただいています。

本日は、第 16 回の福祉区民学会にご参加くださり、誠にありがとうございます。１週間ぐらい前の天気予報では、ちょっと週末、天気は悪い予報でしたが、大変、快晴になってホッとしております。事務局の皆様によれば、本日は口頭発表が 56、ポスター発表が 11、全部で 67 の発表で、発表会場も 8 会場となり、史上最多規模となっているということです。徐々に拡大しておりまして、たくさんの実践者、地域の皆様に、ご参加いただいています。

大規模な大会になりまして、本日の会場校をお引き受けいただいた、日本女子体育大学の皆様、そして事務局の研修センターの皆様、今日まで様々なご準備をいただき、本当にありがとうございます。本日は各大学から 60 名を越える学生さんが、実行委員、ボランティアとして、運営に協力をしてくださっています。本日一日、皆様、よろしくお願いいたします。

本日の大会は、多様な人々をつなぐ運動･スポーツの可能性をテーマとして、新しく加入された日本女子体育大学を会場校に行われます。この学会は設立当初は、社会福祉士を養成する福祉系の 4 大学が会員校となり、会場校として大会を行っていました。近年、徐々に福祉系以外の大学が会員校として、ご参加いただくようになりました。

私は社会福祉の人間ですが、福祉の仲間が広がったとうれしく思い、誠に歓迎したいと思って、この輪がさらに広がるといいなと思っています。私の専門の地域福祉の福祉教育の分野では、福祉のことをひらがなで「ふくし」ということが最近、広がっています。これは、福祉が普段の暮らしの幸せをつくるものとして、普段の「ふ」、暮らしの「く」、幸せの「し」としています。運動やスポーツは健康の源です。普段の暮らしの幸せの基礎として、欠かせないものだと考えています。スポーツは国境や文化の違いや、年齢や障がいの有無を越えて、様々な人々がともに楽しむことができ、また互いを称え合える。そういう力を持っていて、人と人とをつなぎ、幸せのまちづくりを進める大きな力を持っていると思います。

一方で、誰もが運動やスポーツに参加できる条件があるかを考えると、まだまだ、多くの課題があると思います。障がいがあって、元々スポーツとは縁遠い立場に置かれている人たち、子どもたちがいること、また、経済的理由からスポーツに参加したい、楽しみたいと思っても、それができない人たちや子どもたちがいます。そして要介護や認知症になって、スポーツが大好きだったけど、だんだんできなくなっている、そういう人たちもいることがあります。でも、こうした人たちも、ちょっとした配慮があり、参加の機会を地域でつくることができれば、一緒に運動やスポーツを楽しむことが、本当はできるはずだと思います。誰もが普段の暮らしの中で、幸せに皆と一緒に運動やスポーツができる世田谷のあり方を、みんなで考えていくことは、世田谷の福祉を皆でつくることに絶対につながると思っています。

本日の大会が皆様方にとって、気づきと出会いの機会になることを祈念しまして、ご挨拶とさせていただきます。皆様、ご参加ありがとうございます。有意義な一日にしてまいりましょう。

世田谷区長　挨拶

世田谷区長　保阪　展人

皆さん、こんにちは。
世田谷区長の保阪 展人です。
せたがや福祉区民学会 第16回大会、日本女子体育大学で開催されますこと誠におめでとうございます。一言だけご挨拶申し上げます。



世田谷区では、2015年から、地域包括ケアの地区展開を進め、来年で10年を迎えます。世田谷型の福祉を推進するため、区内に28あるまちづくりセンターに「福祉の相談窓口」を設けました。

これまで積み上げてきた地域力、福祉力はこの10年で、地域全体で取り組むことができてきたと思います。それに加えて昨今、難しい事例も多く、介護を拒否される方、そんな支援はいらないと言いつつ、症状が重くなってしまうという事態が生じる場合もありました。これらの問題を解決するチームを来年はつくっていきたいと考えています。

認知症についての基本法も世田谷区で作った「認知症とともに生きる希望条例」を踏襲して、今までの認知症観を変えるなど、国の政策にもなってきたのかなと思います。
これもすべて、このせたがや福祉区民学会に、事業者や学生さんが大勢参加されていますが、皆様のお陰と感謝しております。それぞれの団体が実践発表、問題提起を活発にやっていただいていることが、世田谷の福祉の土台を支えていると思っております。

本日は、せたがや福祉区民学会 第16回大会の開催、誠におめでとうございます。
ご盛会を喜びたいと思います。以上、簡単ですがご挨拶とさせていただきます。

開催校　挨拶

日本女子体育大学　佐伯　徹郎



日本女子体育大学の佐伯 徹郎です。
この度は皆様ご参加、ありがとうございます。
開催校から一言ご挨拶申し上げます。

諏訪会長からありましたように、体育大学でこの学会の大会を開催する意義は、諏訪会長のお話から、皆さんに伝わったかと思います。
私としては、会場校として100年以上の女子体育の歴史、女子スポーツの研究教育に努めてきた、本学の雰囲気や学生との交流を通じて、今は女性、男性と区別しないという話もありますが、やはり女性ならではの特質、良さもあると思います。優しさ、思いやり、スポーツをバリバリやっている、元気な明るい雰囲気の会場校として、学会発表が充実されることを願っています。
簡単ですが、開催校の挨拶とさせていただきます。
本日は、よろしくお願いいたします。

この後、基調講演で雨宮先生のお話をいただきます。
基調講演の後、各教室で午後1時半から4時25分まで分科会を行います。102教室では午後2時から3時まで、学生主体で行うワークショップを行います。
ポスター展示は、隣の建物、東館、渡り廊下を渡って、1階からエレベーターで移動し3階でポスター発表があります。展示は1時半からですが、発表のコアタイムは、午後3時10分から3時40分まで、30分間、ポスター発表の方々にご説明いただく時間が設けられています。

ロビーでは、区内障害者施設の手作り品展示販売コーナーやKAiGO PRiDE@SETAGAYA写真展の展示を行います。ぜひ、お立ち寄りいただければと思います。
基調講演後、この教室では介護の魅力PR事業の6分ほどの動画上映を繰返し行います。合間にぜひご覧いただけると幸いです。
本日は限られたお時間ですが、皆様、交流をはかっていただくよう、よろしくお願い申し上げます。

基調講演



「運動･スポーツでつながる 地域の輪っはっは！」

日本女子体育大学名誉教授　雨宮　由紀枝

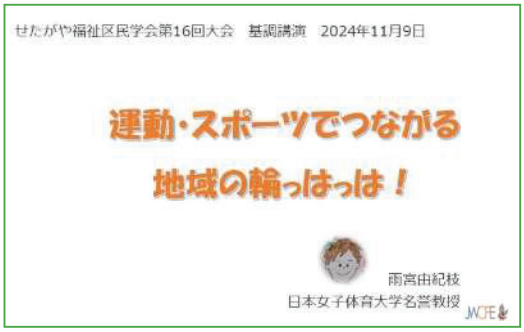
雨宮 由紀枝と申します。日本女子体育大学をこの３月に卒業した教員です。

今日は、このような貴重な機会を設けていただき、ありがとうございます。「運動･スポーツでつながる 地域の輪っはっは！」ということでお話しさせていただきます。

本日の内容です。

簡単に自己紹介した後、学生の皆さんの地域活動の紹介をします。20 年間の実践です。それから、地域とWin-Win の関係を築く。最後は運動･スポーツで地域とつながる。

こんな話題で話を進めていきます。



1. 自己紹介

私は神奈川県鎌倉市で生まれ、湘南で育った神奈川県の子どもでした。大学にて電気工学を専攻し、最初は企業エンジニアとして働き、20 代半ばで出産退職して、子育てをしていました。そこで地域で暮らす間に、障がいのあるお子さんとたくさん出会うことになりました。ママたちも苦労しているし、応援団になりたいと思い、30 代の半ばに大学院に入りました。社会福祉学を専攻して、学位を取り、40 代半ばにここの教員になりました。それからもう 20 年経ったのだと、すごく時の経つのは早いと思いますが、この３月に卒業しました。

現在、何をやっているか。東京科学大学、これは東京工業大学と東京医科歯科大学が７月に合併した大学ですが、そこの大岡山キャンパスで、学生支援センター、障がいのある学生さんを支援する、特任専門員として、フルタイムで月曜日から金曜日まで働いています。大学院生でもあります。医療福祉ジャーナリズムを学んでおります。なんとこのせたがや福祉区民学会の理事の大熊 由紀子さんは私の師匠でございます。今、学んでいる学生でもあります。

私にとっての運動やスポーツはどういうことだったのか。ものすごくスポーツ、運動が大好きな少女でした。中高大とバレーボール部に所属して、時々、陸上部と書いてありますが、何か大会があると、ちょっと来てと、リレーの選手になったり、高飛びの選手になりました。そういった仲間は本音でコミュニケーションができて、先輩･後輩の関係なく、素の自分でいられる場所でした。あの頃、先輩･後輩の関係がないというのは、体育大生ですと違いますよね。事情があると思います。

大学は工学部で電気工学を学びました。他の学部とすごくサイクルが違います。キャンパスも違うし、夜も実験で８時、９時まで残らないといけない学部生活でしたので、他の学生さんたちと交流する

ことができず、なんと自分のところで新しいバレーボール部を立ち上げました。

私は途中参加で、もともと情熱をもって立ち上げた人たちがいるのですが、それもそろそろ 50 年で、40 周年で後輩たちが会を開いてくれて、学食がいっぱいになるぐらいで、部を作ってよかったと思いました。

運動をやっていると、日々、すったもんだありますね。合宿とかでは深夜にわたって話をしたり。でも「同じ釜の飯を食う」と言いますが、今でもとっても仲のいい友だちで、誰かが「飲みに行くぞ」と言うと、行ってしまいます。スポーツっていうのは、素晴らしいと思っています。

2. インクルーシブ教育の担い手を育てたい

これは、大学のホームページに出ている情報です。自分の研究を皆さんにお伝えするというページです。インクルーシブ教育の担い手を育てたい。つまりインクルーシブというのは、「誰一人取り残さない」、あるいは「誰も排除しない」という意味があります。

インクルーシブな環境作りをして、その教育の担い手を育てたいのが願いで、研究だったり、教育だったり、実践だったり、毎日学生の皆さんと一緒にやってきたように思います。特に、近隣の障がいのあるお子さんたちのスポーツ支援は、たくさんのチャンスがあったと思います。あれこれ通算して数えてみると 500 回ぐらい、１つのスポーツの支援の時間が２時間ぐらいなのですが、その２時間を 500 回ぐらいやったと思います。学生さんたちのおかげで、たくさんのお子さんたちと接することができて感謝しています。



3. 学生の皆さんの地域活動の紹介 ～20 年間の実践から

さっそく 20 年間の取り組みをご紹介したいと思います。

① 産学官連携「夏休み親子自然体験」
② 障がいのある子どもの運動･スポーツ
③ 視覚障害ランナーの伴走･バリアフリーマップ
④ 老人ホームでの体操レクリエーション
⑤ 福祉作業所の仲間たちとスイミング
⑥ 観て楽しむダンス･スポーツ

6 つぐらいのジャンルに分けて、簡単に説明します。



ここにいる学生さんたちが、何か活動のヒントになることを見つけてくれたらと思っています。この近隣のマップですが、世田谷区の本当に端っこにあるんです。ここの大学はね。正門を出ると、すぐ前の通りを渡ると、すぐに三鷹市です。本当に端っこです。活動の地域も三鷹市も半分ぐらい。

それから、杉並区、あとは世田谷区はもちろんですね。いろいろなところで活動をしてきました。

赤い枠に囲ったところのマップをGoogleマップに落としてみました。

上のほうにチャリのイラストがあります。チャリでかっ飛ばすので、カッチャリと言っています。

この範囲をほぼ自転車で動き回ったと思います。今まで1度も事故がなかったのは奇跡だなと、作りながら思いました。学生さんたちは元気に活動してくれました。それぞれの場所における活動については、次から説明していきます。



①産学官連携「夏休み親子自然体験」

これは、多摩地域全体のお子さんと親御さんと、檜原村で1日のデイキャンプをする試みです。ほとんど、というかほぼ全て、学生さんが企画しました。



普段、キャンプリーダーをやってきて、いろいろなところでお子さんの指導をしてきた学生さん、経験豊富な人が10人ぐらい集まって、この企画ができました。

多摩信用金庫さんの強力なバックアップもあって、なんと数えてみたら、学生ボランティアで700人以上、親子は5000人以上です。夏休みで、大きなイベントとなりました。檜原村や奥多摩など、東京都にこんな素晴らしい自然があるのかと、初めて知りました。

こちらは、このプロセスです。タイムテーブルも全部学生さんが考えて、1日の流れを考えて、事前に檜原村に行って、泊まり込みで、どこのルートがいいとか、どこで遊べるとか、どこが危険だとかをしっかりと調べました。そしてこの企画をして。

デイキャンプの当日スタッフは学生の方をたくさん集めなければならない。それを集めて、右側の写真は、運営スタッフが、後輩学生さんに説明をしている風景です。写真を付けておきました。左上のスタッフが、初代のスタッフです。

ピンク色のスタッフTシャツも自分たちで作りました。1枚800円がいいか、900円まで上げられるかなど、一番安くできることを考えました。真ん中は次の年ですね。スタッフTシャツの色で年代が分かります。東京都にもすごく素晴らしい自然があり、親子の方々をキャンプに招待できて、うれしいと思います。本当に感謝しております。

それから、2つ目。一番力を入れたところかと思います。

②障がいのある子どもの運動・スポーツ

パターンは3つあります。

すでに開催されているスポーツ教室に学生がボランティアで参加するタイプ。世田谷区スポーツ振興財団さんだったり、あるいはNPO法人アダプティブワールドに大変お世話になり、学生さんを派遣して、そこで支援するタイプです。



真ん中の2つは、学生さん自身がプログラムを作り、

療育機関や学校で実施させていただく。これをやらせていただいたのはありがたいと思います。

どういうプログラムを組んだら、障がいのあるお子さんがすごく活動できて、笑顔がたくさんになるか。こういうプログラムはダメだったなと試させてくれる。学生さんたちの力にもなり、私も勉強させていただきました。三鷹市子ども発達支援センター、北野ハピネスセンターさんにはお世話になりました。今はちょっと活動しにくくなりましたけど。三鷹市の第三中学校、コロナで中断したのは残念でした。特別支援学級に行って、自立活動という授業ですが、中身は体育です。何回もいろいろなプログラムをやりました。

その時々に参加している学生さんの得意なバスケット、バレー、空手、チアダンスなど、いろいろなプログラムを作ってくれました。

・本学の体育館で実施 ～お子さんの笑顔がバロメーター

最後の２つは、本学の体育館で実施したものです。

イベント的にやりました。

東京都立光明学園、日本で一番、肢体不自由の方の学校としては古く、しかも大きい特別支援学校です。現在は光明学園と改名しています。そこの校外学習として、１学年の方に来ていただき、学生の皆さんと交流しました。

・Merry　Christmas

NPO 法人にじのこさんとは、3、４年、コロナに入る前まで、クリスマス会をさせていただきました。未就学のお子さんたちが、日本女子体育大学の体育館に来てくださり、楽しいクリスマス会をしました。

雰囲気が分かるように写真を貼っておきました。右上は体育館でみんなで運動しているところ。それから、左は、療育センターで、巧技台を組み合わせて、未就学のお子さんたちとスポーツをしている。下のほうは、研究もしていまして、エンジニアの仲間と一緒に、画像処理、人工知能を利用した運動支援システムの研究をしました。



お子さんたちが笑顔でいるかどうかです。それが私たちの成績表で、お子さんたちが笑顔なら OK。

つまらなそうだなというのは、ちょっと違うのかなと。お子さんたちの笑顔をバロメーターとして、プログラムを作っていました。ほとんど、学生さんが作ってくれました。

これはクリスマスの写真です。

左上はトーンチャイムでクリスマスソング。音楽の得意な学生さんがいらっしゃるのでね。音楽の先生も指導に参加してくださり、これも皆さんに協力していただいて、ありがたかったです。

右は、サンタさんをやっているのは、地域のお兄さんです。いつもママのお友達の形で参加してくださり、その方も結婚されてお子さんができて、ファミリーで一緒に参加してくださったり。地域の方々も一緒に参加できるようなものになっています。

右下は、作戦会議。

私の研究室ですが、手作りでいろんなものを作って、左下のほうにクリスマスツリーを作り、お子さんたちがペタペタ貼っていくオーナメントも手作りで安上がり、これがポイントです。高価でなくても、手作りで心が伝わるので、学生さんたちが一生懸命やってくれています。

・ドイツ　ケルン大学



これは私がケルン大学で、障がいのある子のスポーツをどう指導するかを取り上げたとき。教室で何かをするのではなく、体育館で。いろいろと教わってきました。

みんなが楽しめる、障がいのある子もない子も一緒に楽しめるプログラムを教えてもらいました。

カラフルなグッズが体育館にたくさん置いてあり、私も研究室で１つ１つそろえていって。やはり色があって、お子さんたちがウキウキするような環境づくりがとても大事です。

グッズも大事だし。体育館に上からつるしたブランコがあるのがよかったのですが。お子さんたちはすごく喜んでやりますね。笑顔がたくさん出てきます。

これは車いすの指導をしていただいているんですが。この先生は、とても有名な先生です。車いす競技のランキングづけをして、パラスポーツのときに、重度の人はポイントを重ねて、ポイントによって、どうやってみんなで平等にスポーツをするかを研究して、パラリンピックに採用されているような、有名な先生です。その先生の指導を受けました。



これは、パラシュートです。

幼稚園や保育園でよく使っていますね。パラシュートはすごく大きい技ができて、みんなで楽しめるんですね。パラシュートの中に入るんですね。青いから、こんなふうになります。

私もパラシュートを買って、この中に入ると「きのこのお家に入るよ」と言うとみんな集まってくれるんですね。みんなで遊ぶ、いろんな技、道具を使うことも教わりました。小学校、中学校、幼稚園、保育園の体育で使っていると思います。

③視覚障害ランナーの伴走・バリアフリーマップ

３つ目、ブラインドマラソンです。

ブラインドマラソンの伴走。次のスライドでお見せします。



近隣に日本代表になるぐらい、すごくマラソンを得意とするランナーで、視覚障害の方がいました。日本女子体育大学に電話をかけてくれ、誰か朝の練習に付き合ってくれる人はいませんかと。私のところに情報が来て、陸上部の学生に声をかけたら、「やります」と。ゼミ生だったのですが、朝練を一緒にやったというボランティアです。

三鷹周辺の約７キロを走りました。彼女にとっては「朝練のついでなので大丈夫です」と言ってくれたのですが。私には絶対できない。特技を持った人はすごいなと思いました。

その後、バリアフリーマップ作りもしてくれました。走りながらだと、いろいろなことに気づいたと、それを卒論にまとめてくれました。こんな感じです。これは日本のブラインドマラソン協会のホームページから取らせていただきました。

伴走ロープってけっこう短いから一緒に腕を合わせないと、できないんですよ。それを調子を合わせて、一緒に腕を振って、伴走する。全く見えない方は必ず伴走者が必要だし、視力のある方は単独で走ることもできるそうです。

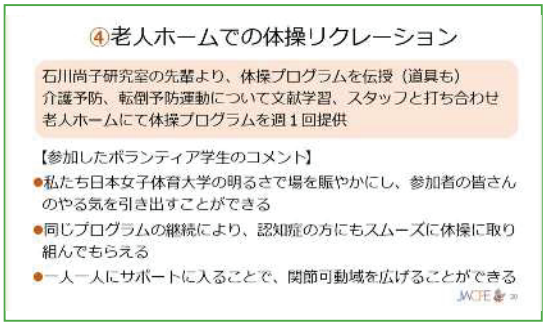
国際パラリンピック委員会のルールも、このページに載っていたので、詳しく知りたい方はどうぞご覧ください。ブラインドマラソン日記について読ませていただきます。

・ブラインドマラソン日記

「今日が初めてのブラインドマラソンの伴走だった。視覚障害者の方と接したことがなかったので、緊張した。選手と伴走者(以下、ガイド)を繋ぐ白の紐は思っていたよりも短かった。紐を持っていても腕振りは通常通り振る。腕が合うと歩幅も合い、自然にペースやリズムがあってくる。初めて視覚障害者の方（以下、Ｆさん）と走って、普段何気なく走っていることに気がついた。車道と歩道との小さな段差や後ろから来る自転車がすごく気になった。Ｆさんにもどこまで、どのように伝えたら良いのかわからず終わってしまった。ガイドは選手の目になるため、安全には十分注意が必要である。」

これが１日目の日記、日記というか卒論で書いてくれたことです。この後、車いす。この大学には、あちこち車いすが置いてありますが、その車いすを使って、お友達と周辺に出て、ここが危ないとか、段差がこんなにあるとか、そんなバリアフリーマップを作成してくれました。

④老人ホームでの体操リクレーション



老人ホームでの体操リクレーションです。

これは私の先輩の石川 尚子先生がずっと継続してやっていて、それを引き継いだという経緯があります。体操プログラムも道具もそろっていたので、すぐにスタートできました。

介護予防、転倒予防運動について、学生さんも行く前にいろいろ文献で調べて行きました。

あとはスタッフの方と、いろいろコミュニケーションして、この方はこういうふうに注意してください、とか。

介助をこちらからしてください、というような具体的な情報もスタッフと打ち合わせて、老人ホームで体操プログラムを週に１回やりました。

ボランティアさんのコメントで、とても多かったコメントを３つ、並べました。

まずは日本女子体育大学の学生さんの明るさが、参加者の皆さんにやる気を引き起こしたのではと感じた。

それから、同じプログラムを継続するので、認知症の方もすごくスムーズに取り組んでくれた。変えるよりはいつも同じで、単調だけれども、その方がいい、という人もいらっしゃるということですね。あとは一人ひとりのサポートも大切だと。



可動域、関節の可動域もいきなりやるとケガをするので、徐々にやるとか。スタッフからのいろいろなアドバイスを受けて、やってきました。

これは学生さんの参考になるようにと思い、卒論から貼ったものです。

姿勢作りから肘伸ばし、前方の腕をひねったり、広げたり。こんなようなイメージです。

座りながら可動域をちょっとずつ伸ばしていく、そんなことをお手伝いしたという、ボランティアです。いろいろ注意点が書いてあります。

こういうときは身体を倒せない人には、手をつないで誘導してあげたほうがいいとか。肘が伸びない人は、後ろから肘を支えて前に持ち上げるといいとか。いろいろな技が入っています。そこは参考になると思います。私は運動には特に専門性を持っていないのですが、いろいろな方のご協力を得て、学生さんが活動してきました。



プログラムです。これも卒論からです。

カラースカーフ、チューブとか、色があると、その場の雰囲気がときめいてきます。

チューブの使い方は、足でギュッと引っ張るみたいな。それだけでも、毎日やると、高齢の方にはとてもいいようですよ。

左のほうは、布で手作りした夏の納涼祭の飾りですね。全部手作りして、イベントのときに貼るオーナメントを作ったり、クリスマスも全部、折り紙で作ってあるんですね。手作り品なども、とっても喜んでいただけたと思います。

学生の皆さんが頑張ってやったことが、地域の方に伝わっているといいなと思います。

⑤福祉作業所の仲間たちとスイミング

5つ目は、福祉作業所の仲間たちとスイミング。

ここから近い作業所があります。昼間に障がいのある方が通ってくるところです。

烏山中学校に区民の方が使えるプールがあって、そこで水泳部のメンバーが協力して、3年ぐらいつないでくださいました。同じように水泳指導について文献で学習して、スタッフと打ち合わせして、作業所からプールに行って、プールでお着替えして、そこで活動して、また帰ってくるところまでを一緒に参加したというものです。

最初は利用者さんとどう関わっていいか分からなくて、ドキドキしましたと。職員の方がサポートしてくれて動けました。

慣れてくると今度は、利用者さんの特徴や表情がだんだん分かるようになってきて、今何を伝えてくださったか、分かってくると。

コミュニケーションは fifty-fifty なので、つながらないときに障がいのある人のせいにしがちです。互いにコミュニケーションできないときは、相手の責任も半分だけど、自分の責任も半分あるので、できないではなくて、なんとか頑張ってみる。すると、いつの間にか分かるようになってくる。学生さんには、とてもよかったと思います。

最後です。そういうことをやっているうちに、自分が成長していることに気づきましたと。好きな水泳が皆が楽しいという場所になっている。それがとってもうれしかったと。何人か、複数の学生さんが語ってくださいました。皆さんに同じような感想があったように思います。

活動の記録です。何月何日、何時から何時、どんなメニューで。水泳部の朝練のメニューのような感じです。そういうことが参考になるかなと思って載せてあります。利用者さんの様子、これも、とある日です。

・利用者さんの様子

「AB さんは右半身の麻痺により、日常生活では制限されることが多いので、この水泳活動では、のびのびと活動してもらえるように心がけた。普段あまり使えない脚を、ビート板を使ったキックを行うことで、少しだが動くようになる。筋肉が固まって動かなくなるのを防止するために、この活動が良いものになっていると感じた。水の中で全身の筋肉をほぐすことができた。これを続けて、普段の生活が過ごしやすくなってほしい。

脳性麻痺の方かと想像します。脳血管障害の方も同じような感じで、ベッドに寝ていて、体が動かなくなってしまう。楽しく動ける機会があるのは大事なことで、そんなことをお手伝いできるのはこんなことかもしれません。

CD さん。とても泳ぐことが好きで、クロールはこの時間だけでも 300 メートルを黙々と泳いでいた。泳ぐことに必死になりすぎて、人にぶつかってしまっていたので、前で先にゆっくり泳いで泳ぐ幅を作ったり、隣で一緒に泳いだりして、泳ぎやすい環境を作った。結構、呼吸を止めてしまうところがあるので、呼吸をするタイミングを促していきたい。」

たぶん、自閉症の方かと思います。すごく同じことを黙々と続けるのが得意な方がいらして。水泳とかマラソンに、ものすごく力を発揮したりします。

その人の得意なところを、どうやって見つけるか。そんなことも大切です。

⑥観て楽しむダンス・スポーツ



最後は、観て楽しむダンス・スポーツ。

左側は、ソングリーディング部 GRINS。海外でも優勝したりする。ポンポンを持って登場するだけで喜びます。

右側のチアリーディング部も、光明学園が校外学習に来てくれたとき、10 分くらいの登場でしたが、うわーっとなりました。

あとから先生に、いつも、こくりこくりしがちな子がいましたが、登場した途端に目がキラッとなりました。スポーツは観て楽しむ、ワクワクさせる力があるんだなと思います。

チアリーディング部 TOMBOYS です。

・Special　Memories

最後は、スペシャルメモリーズ。

今、烏山中学校の 3 年生。世田谷区でこういった人工呼吸器ユーザーで、普通の幼稚園から小学校、中学校と。世田谷区では初めてだったと思います。

とにかくいろんな苦労があっただろうと思います。



そのあとに、きっとたくさんの子が続いていると思います。最初の開拓者は大変です。

それを続けているサホさんとお母さんのエリさんです。サホさんが 2 歳のときにお手紙をくれたんです。かわいらしい写真と一緒に。人工呼吸器が付いています。女子大のお姉さんたちとお友達になりたい、という内容の手紙でした。

さっそく学生の皆さんと引き合わせて、何年も付き合いが続いています。

その中からいくつか写真をいただいてきました。

人工呼吸器を付けていても、スケートもプールもできます。もちろんクリスマス会も楽しめます。環境さえ整えば必ずできるので、スポーツは全ての人にとって楽しめる、大切なことなんです。

4. 地域と Win-Win の関係を築く

今までどんなことを大事にして活動してきたか話しましたが、まとめてみたいと思います。

最初は、アクションリサーチ。

地域に出て実態を知ることが大事です。



こうやったらいいのかじゃなくて、必ず地域に出て、求められていることを探すのが大切です。

もし見つかったら、誰かから頼まれたら、どう対応しようかなと、自分の得意分野を中心に考えるといいと思います。それを生かして、どうやって活動するか。これが成功ポイントだと思います。自分も楽しいですからね。

自分ができないなら、誰かに知らせて、仲間を作る、場合によっては社会資源につなげる。サポーターを作ることもする。

当事者をエンパワメントとあります。まずは当事者に聞かなければなりません。本人に聞いてください。

私も母を晩年、車いすを押して外出に付き合いました。みんな、私に聞いてくる。母がお買い物をしているときも母には聞いてくれない、それは違うなと思います。やっぱり本人に聞いて。

本人も、晩年の母はレスポンスが遅かったけど、でも必ずその人は、話したい気持ちがあるのだから、ちゃんと待って聞いてくださいね、その人のやりたいことを一緒に応援していく。

最後、社会変革。

自分も一緒に成長しながら社会を変えていく。

自分の成長にもなることが、必ずそれは今までの経験から自信を持って言えます。苦労したことは自分のためになるから、最初は大変かもしれないけど、一歩一歩進んでください。

地域の中で役割を果たす。皆さんの力に期待しています。

5. 世田谷区認知症とともに生きる希望条例

これは、世田谷区が誇る、認知症とともに生きる希望条例を紹介したいと思います。認知症の方も自分で何もできない人ではないんです。



自分のことは自分で考えるし。

記憶力はどんどん飛ぶことはあっても、自分のことは自分で決められて、何もできない人ではなくて、すごく力を持った人です。認知症とともに生きる、私たち本人も参加して作りましたと。

細かい内容はホームページに出ています。

これはエッセンスです。

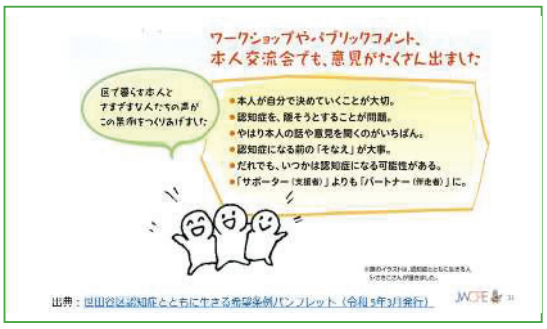
本人が自分で決めることが大事。

認知症を隠そうとするのが問題。やはり本人の話や意見を聞くのが一番です。認知症になる前の備えも大事。誰でも、いつかは認知症になる可能性があります。私も、そろそろなる予定なので、よろ

しくお願いします。サポーターよりもパートナーになること。

誰かにサポートされるというのは、うれしいんですが、実はうれしくないこともあって。それは私が高校生のとき。父がすごく大きな交通事故に遭って、身体障害をもつようになった。

そのときに高校生の私と年子の兄と、海外で事故に遭ったので、母は１か月ぐらい行ってしまい、高校生の２人が残された。周りの人がいっぱいサポートしてくれて、ありがたかったです。親戚もご近所も、隣のタカハシのおばちゃんとかすごく覚えていますが、ご飯を持ってきてくれたり、いろいろとしてくれる。



助けてくれてうれしいんだけれど、助けてもらわないと生きられない自分も、ちょっと情けない感じがありました。だから、助けるときは、相手は心の負担があるかもしれないと思いながら、やってください、というメッセージ。

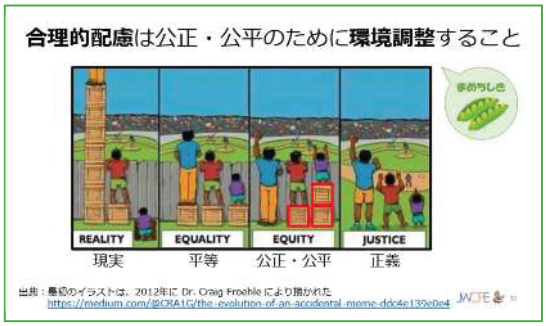
あと、助けてもらうよりは、活躍できたほうが人ってうれしい。

例えば、老人ホームとか行っても、やってあげるという気持ちではなく、むしろこの方に活躍してもらうにはどうしたらいいかという発想が大事。

パートナーとして、同等の目線で一緒に歩いて行く。そういうのが、もっとも大切だと思います。

あとは、これは豆知識として。

サポートというのは、チビちゃんと、中くらいの子と、背高の子がいる。フェンスがあると背高のっぽ君は何もしなくて見える。中くらいの子は、ちょっと台を上げれば見える。チビちゃんは見えない。それを平等に同じ台にしたら、背高のっぽ君はいらないし、チビちゃんは、小さい台だと見えない。



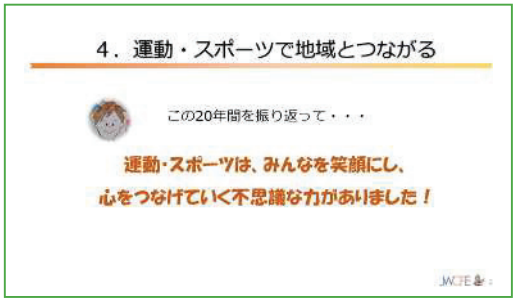
公平は、チビちゃんにたくさんのサポートをあげる。サポートが必要な人は、たくさんサポートをもらう権利がある。それを伝える有名な絵です。合理的配慮と言います。

私も今の仕事は、障がいのある学生さんが他の学生さんと同じように、何不自由なく勉強できるために合理的配慮をどうしたらいいかと。

その人だけにたくさんのサポートを出すのですが、それは不公平なことではなくて、公正なことだと。この合理的配慮の意味を、皆さん知っているかもしれませんが。

支援がたくさん必要な人にはたくさんあげてよくて、その支援をもらうのは、その人の権利だと。ちょっとした豆知識でした。

6. 運動・スポーツで地域とつながる



最後は、運動･スポーツで地域とつながる。

この 20 年を振り返ってみて、運動･スポーツはすごいものだと思いました。

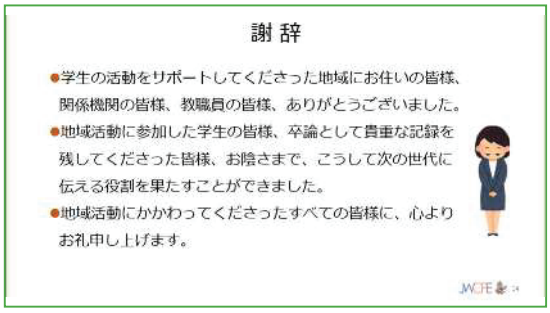
みんなを笑顔にします。心をつなげていく、不思議な力があったと思います。運動･スポーツをコアに、地域でつながることの一例としてご紹介しました。

最後は謝辞です。

学生の活動をサポートしてくださった地域にお住いの皆様、関係機関の皆様、教職員の皆様、本当にありがとうございました。

地域活動に参加した学生の皆様、卒論として貴重な記録を残してくださった皆様、お陰さまで、こうして次の世代に伝える役割を果たすことができました。

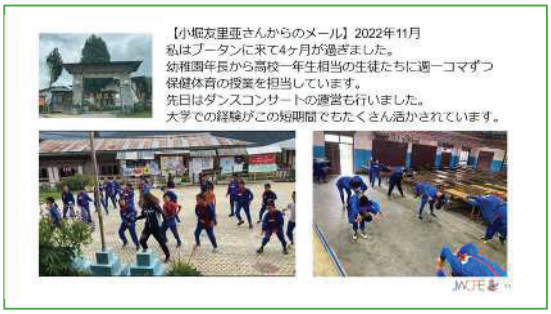
地域活動に関わってくださった全ての皆様に、心よりお礼申し上げます。



7. 運動・スポーツでつながる　世界の輪っはっは！

最後は、2 年前に卒業生の小堀 友里亜さんからいただいたメールを紹介して、終わりたいと思います。ブータンで体育の先生をしています。

「私はブータンに来て 4 ヶ月が過ぎました。幼稚園年長から高校 1 年生相当の生徒たちに、週一コマずつ保健体育の授業を担当しています。先日はダンスコンサートの運営も行いました。



大学での経験が、この短期間でもたくさん活かされています。」

小堀さんはライフセービングをしていて、学校にいる間から、あまり学校には行っていなくて、でもそんなのいいよ、ゼミに出なくていいから、いってらっしゃいと言ってしまった教員です。今、こうやってブータンでやっています。

ちょっと最近連絡を取ってたら、これを出していいと聞いたら、今、別のところに行って、コーディネーターとマネジメントするような、海外で、JICA で働いているということでした。

最後は、「運動･スポーツでつながる 世界の輪っはっは！」ということで、多くの方々が地域でつながって、それを世界の皆につなげる活動につながっていけたらうれしいと思います。

以上です。

どうもありがとうございました。



実践研究発表



ポスター発表一覧

第1会場 ***【東館3階 308教室】***

【コアタイム】15:10～15:45

助言者　山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

	発表者	所属	タイトル
1	篠﨑　広一	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	高齢者のデジタルデバイド問題について －よりよい暮らしのために－
2	石井　貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	地域にどっぷり！ －深沢らしい地域ネットワーク再構築をめざして－
3	市村 和行　秋森 かつ枝 浅倉 信次　伊藤 潤一 石川 令子　鬼塚 正徳	世田谷区福祉移動支援センター （おでかけサポーターズ）	市民が運行する「玉川おでかけバス」の活動報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を目指す市民活動－
4	熊谷　勇太	株式会社HABING	福祉の選択肢と可能性を拡げる －日本初の取り組み－
5	松下　昌平 腰塚　寛	社会福祉法人大三島育徳会 居宅介護支援事業所博水の郷	ケアマネジャーの課題の解決方法についての模索
6	宮本　真理子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	一般デイでできること －何のために一般デイに行くのか？－

第2会場 ***【東館3階 309教室】***

【コアタイム】15:10～15:40

助言者　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル
1	吉原　浩一 山田　瀬美 野辺　頼晴	世田谷区福祉移動支援センター 「そとでる」	地域連携で守る「みんなの自由なおでかけ」 －誰もが自由に外出し、移動できる世田谷にするために－
2	長見　亮太	社会福祉法人せたがや樫の木会 わくわく祖師谷	「ニコリホット報告」を通して、プラス面に着目した支援に向けての取り組み
3	山根　圭以子	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	人と人をつなぐ仕事 －介護職の魅力を発信しよう－
4	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	豊かな心と豊かな暮らしを目指して －新たな出会いから－
5	佐藤　忍	社会福祉法人奉優会 優っくりデイサービス喜多見	楽しく通って欲しい －職員が今できること－

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。
　ポスター会場は、13時00分～16時25分まで自由にご覧いただけます。

口頭発表一覧

第1分科会　【東館3階 306教室】

1　子ども・若者が輝くまち　世田谷

進行役・助言者　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里　（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	小林　薫奈 篠塚　彩菜 髙瀬　美咲 花木　由布子	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	スマートフォンが及ぼす大学生の視力低下と改善について －用途別からの一考察－	13:30
2	倉田　遼佑　冨永　樹生 林　龍之介　岡　亮太朗 宮内　佑　葉　思遠 雷　霆　増田　猛 三橋　隼人	日本大学文理学部 社会福祉学科 2年 （福祉社会フィールドワーク）	子ども・若者が輝ける秘訣 －大学と地域の連携から－	13:55
3	白井　るり　相川　鈴菜 白鳥　結　坂井　円香 阿部　音和	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	子どもの発達支援に関する一考察 －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－	14:20
4	川崎　結衣　佐藤 沙知 澤井　壱成　塩野 春奈 平井　心結	日本大学文理学部 社会福祉学科	地域とつながる －学生の活動から－	14:50
5	田中　光里 長井　虹美 中河　俊翼 野澤　陽花	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	幼少期の好き嫌いと大人の援助方法 －食を営む力の育成－	15:15
6	甲斐　翠 北川　夏子 石川　美紀	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	1人1人の育ち（学び）を大切にする保育	15:40
7	岡田 真和　西城 里咲 鈴木 彩那　竹端 ゆい 光畑 佳穂	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	子どもの主体的な活動を高めるには －習いごとを始めるきっかけからの一考察－	16:05

第2分科会　【東館3階 307教室】

2　地域をつなぐネットワーク

進行役・助言者　荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	市川 翔　石崎 翔 久保井 萌音 小林 明日香 水貝 菜々羽 宮屋敷 有翔 廣方 瑞希　本橋 智征 山岡 昇太	日本大学文理学部 社会福祉学科 2年 （福祉社会フィールドワーク）	子どもとのつながりと学習支援 －川崎市での学習支援企画を通して学んだこと－	13:30
2	古沢　ひかる 関谷　美鈴	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム池尻	優っくり村スマイリング －地域と共に－	13:55
3	小林　開人 藤原　和子	社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会 烏山地域社会福祉協議会事務所 烏山地区事務局 地域住民	「顔見知り」から「顔なじみ」へ －まちと人をつなぐ「さつまいもほり」－	14:20
4	坂口 陽奈　小林 彩音 福岡 詩乃　今泉 優希 小城 悠亜貴　小林 広奈 齋藤 萌伽　福田 宇 古澤 明莉　宮林 姫	日本女子体育大学 体育学部健康スポーツ学科 助友研究室	農園でつなぐ地域のウォーキングマップづくり	14:50
5	堀見　洋継 谷口　裕太 矢野　弘枝 吉田　凌太	砧地域ご近所フォーラム2025実行委員会	砧地域ご近所フォーラム2024「砧は私たちの誇り」 －地域でわかりあえる仲間を作ろう－	15:15
6	萩原　光雄 谷山　二朗 市村　秀雄 土屋　明之	アクションメンバー（地域住民） 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター	太子堂アクションチームの取組みと地域の方々の想い －つながろう！支え合おう！太子堂アクションチーム－	15:40
7	石塚 那奈　井上 真琴 中野 環　西川 真央 村尾 ほのか	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1年	世田谷区における世代間交流について －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－	16:05

第3分科会　　【本館3階 301教室】

1　子ども・若者が輝くまち　世田谷　　**3　多様性を認めあう共生社会づくり**

進行役・助言者　　奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	奥貫 妃文 小野 蘭奈　風見 玲奈 岡田 萌子　周藤 真帆 竹内 心亜　塚田 美玖 東島 榛華	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 奥貫ゼミ 3年	世田谷で“借りる”福祉を探る －若年女性に焦点をあてて－	13:30
2	三浦　和子 小山　美紀	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	奥沢の縁側 －奥沢で考える多世代のつながりの形－	13:55
3	上山　愛梨 菊池　紅音 富田　愛菜 星野　竜馬	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 教育人間学研究室	大学生のよこの人間関係から見た自己の多様性	14:20
4	斉藤　由子	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	知的障害のある方との関わりから －日々のエピソードを通して－	14:50
5	磯ヶ谷　莉華 関　愛乃 三條　いぶき 小林　蒼空	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年 教育人間学研究室	大学生のたての人間関係から見た自己の多様性	15:15
6	吉川　麻美 渡邊　圭子	NPO法人せたがや子育てネット ぶんぶくテラマチ	居場所の可能性 －仲間のチカラ－	15:40
7	桑江　通友 水足　優一 鬼島　勇太	株式会社イーエス文理EN　unity 社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホームフォーライフ桃郷	対応力が鍵を握る！ －外国人労働者との共働における支援の重要性－	16:05

第4分科会　　【本館3階 302教室】

4　ケアにおける協働・連携

進行役・助言者　　石井　りな　（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	小林　真介 磯﨑　寿之	世田谷区介護サービスネットワーク 北沢地域部会・世田谷地域部会	地域活動でつながる、専門性の輪 －介護事業者団体の地域活動の在り方－	13:30
2	佐賀　勝之 星　友梨 落合　美夏 濱邊　祐一 寺尾　洋介 藤原　ふさ子	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	特養入居者へのチームによるスタンダードケア継続に 関する実践報告	13:55
3	石田　和大 和泉　拓 鍵谷　太郎 落合　美夏	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	働きやすい職場づくりへの取り組み －抱え上げない介護と職員の心身を守る取り組み－	14:20
4	村上　桂樺	医療法人プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町	当看護小規模多機能型居宅介護の利用終了の分析 －この1年を振り返る－	14:50
5	石野　郁花	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	楽しい生活を！！ －自立支援のためのモンテッソーリケア－	15:15
6	渡邊　博子	社会福祉法人南東北福祉事業団 東京リハビリテーションセンター世田谷 相談支援事業所相談室こうめ	親子を支える関係機関間ネットワーク －発達障がいの子どもを持つ精神疾患のある母親への 相談対応事例－	15:40
7	竹内　洋子 渡辺　三恵子 和仁　智子 白石　哲也	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	最期まで口から食べるために！専門職による 「もぐもぐチーム」の活動報告	16:05

第5分科会　　【本館3階 303教室】

4　ケアにおける協働・連携

進行役・助言者　　諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	樋口　和樹 中尾　真美	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	介護コンシェルジュ －楽しみを叶えるために－	13:30
2	塚越　典子	世田谷区介護サービスネットワーク せたがや訪問介護連絡会	福祉の現場で働くみんなが元気になる！現場の声を形に！ －悪天候の訪問に負けない、訪問介護ヘルパーが考えた自転車アイテム－	13:55
3	岩永　真祐 番本　鷹也 佐藤　由佳	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	職員定着、離職率ゼロへ向けての取り組みについて －新人職員の立場になって働きやすさを考える－	14:20
4	佐藤　大介 岡野谷　智子 中村　快	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	コロナ禍での余暇支援の取り組み －コロナ禍でも入所者の楽しみは奪わない－	14:50
5	長谷川　裕和	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	小規模多機能ホーム三宿の職員が語る「介護職の魅力」	15:15
6	小澤　保菜美 天野　伊織 笹沼　祐希 若林　美空	日本大学文理学部 社会福祉学科	せたがやゼミナール（日大文理）でのプレイ学習及び多世代交流における取り組み	15:40
7	西尾　匠史 酒井　翔太 齋藤　翔太 小澤　悠花 小澤　保菜美	日本大学文理学部 社会福祉学科 （日大パレット）	日大パレットの魅力とは？！ －地域の皆さまの童心引き出します！！－	16:05

第6分科会　　【本館1階 101教室】

6　一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	竹林　深雪 本明　伸	社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所	ちくちくことば と ふわふわことば －SSTのロールプレイングを通して－	13:30
2	金　恩珠 藏本　克昭 落合　里美	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	「お手伝いを役割に・・・仕事のできる喜び」	13:55
3	髙橋　福太郎 後藤　秀男	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	ケアマネジャーが考える高齢者のアルコール依存問題	14:20
4	大図　奈津子 西岡　弘子	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	利用者の「個性」を大切にし、「今」の気持ちに寄り添う関わり －認知症対応型デイサービスの事例を通して－	14:50
5	内藤　麻里	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	法人後見受任への挑戦 －福祉ニーズに対応した法人後見事業の実現－	15:15
6	石丸　拓也	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	苦手な状況に向き合うための支援と取り組み	15:40
7	土田　直哉 寺田　祐太 渡邊　優香里	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	当たり前の生活を続けるためのユニットケア －ユニットケア実践事例－	16:05

第7分科会　【本館3階 304教室】

6　一人ひとりに向きあった実践

進行役・助言者　森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	岡崎　一也 鈴木　也真人 生駒　直紀	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	BPSDケアプログラムを用いた利用者への実践	13:30
2	尾平　明聡	社会福祉法人はる ガーデンカフェ「ときそら」	利用者アンケートからわかるニーズと「ときそら」のこれから	13:55
3	天井　利香 澤　雅樹 森口　祐子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原	ー生おいしく、楽しく、安全な食生活を支える通所介護 ー歯科衛生士を中心とした口腔機能向上の取り組みー	14:20
4	鈴木　夏美	社会福祉法人福音寮 小さなおうち保育園	子どもの“声”が聴こえる ー異年齢保育の実践を通じて私たちができることー	14:50
5	吉島　大輔 竹田　美規子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	「眉間のしわを消したくて」 ーBPSDの理解と個別ケアの課題ー	15:15
6	清水　菜摘	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	個への理解 ー個別療育と集団療育を通して学んだことー	15:40
7	瓜生　律子 笹部　昭博 大中　吉宏	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 （アクションプラン10 プロジェクトチーム）	ヤングケアラー支援策の提言 ー誰もが住み慣れた地域で　安心して暮らし続けるためにー	16:05

第8分科会　【本館3階 305教室】

1　子ども・若者が輝くまち　世田谷
4　ケアにおける協働・連携
6　一人ひとりに向きあった実践
7　運動・スポーツが多様性につなげる可能性

進行役・助言者　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

	発表者	所属	タイトル	開始
1	大久保　結菜 岡村　美海 小谷　麻央 鈴木　愛果	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	大学生の結婚観と結婚願望の関係	13:30
2	白石　哲也 和仁　智子 竹内　洋子	リハトレスタジオ世田谷 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋 社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課	オンラインの可能性を模索する！パーキンソン病患者向けフレイル予防活動の取り組み ーオンライン包括的リハビリテーションプログラムの経過報告ー	13:55
3	上原　明子 竪山　順子 玉木　美和子	一般社団法人 つながりラボ世田谷	継続した実践は「きずな」を作る ー必要と思われる人たちへ必要な支援を届ける・・・地域の支援を受けながらー	14:20
4	木畑　実麻 手塚　由美 稲森　健太	一般社団法人　輝水会 社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会 世田谷地域社会福祉協議会事務所 池尻地区事務局	児童館の子どもも一緒にボッチャ交流体験会 ースポーツを通した多世代交流の居場所づくりに向けてー	14:50
5	寺嶋　拓哉 北村　果央 井上　絵里子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	新たな福祉の形 ー多職種で繋ぐ持続可能なRehabilitationー	15:15
6	木田　裕芳	経営相談室知恵の和	体験型スポーツイベント「松陰神社参道商店街フェス」の実施 ーLET’S DO SPORTS!ー	15:40
7	藤本　祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	在宅にある物品が治療道具になる ー新聞紙編ー	16:05


IDEAL


おでかけサポーターズ



ポスター発表　第１会場

【東館３階　３０８教室】

助言者

山戸　茂子　（世田谷区高齢福祉部長）

板谷　雅光　（世田谷区社会福祉事業団理事長）

	発表者	所属	タイトル
1	篠﨑　広一	社会福祉法人奉優会 代沢地域包括支援センター	高齢者のデジタルデバイド問題について －よりよい暮らしのために－
2	石井　貴志	社会福祉法人奉優会 深沢地域包括支援センター	地域にどっぷり！ －深沢らしい地域ネットワーク再構築を めざして－
3	市村　和行 秋森　かつ枝 浅倉　信次 伊藤　潤一 石川　令子 鬼塚　正徳	世田谷区福祉移動支援センター （おでかけサポーターズ）	市民が運行する「玉川おでかけバス」の活動報告 －だれもが自由にお出かけできる地域を 目指す市民活動－
4	熊谷　勇太	株式会社 HABING	福祉の選択肢と可能性を拡げる －日本初の取り組み－
5	松下　昌平 腰塚　寛	社会福祉法人大三島育徳会 居宅介護支援事業所博水の郷	ケアマネジャーの課題の解決方法についての模索
6	宮本　真理子	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢	一般デイでできること －何のために一般デイに行くのか？－

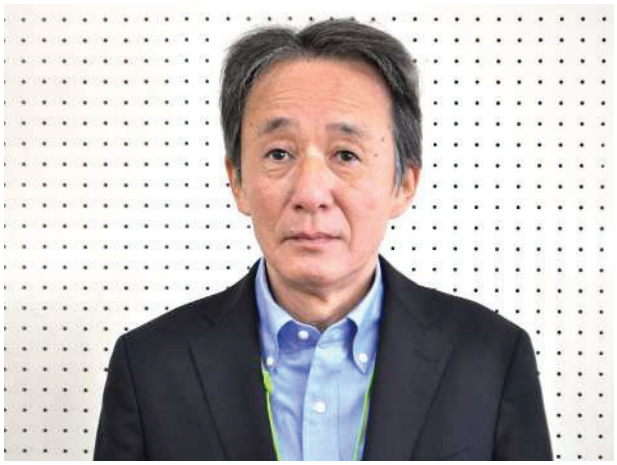
※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。

ポスター会場は、１３時００分～１６時２５分まで自由にご覧いただけます。

進行役・助言者



山戸　茂子
（世田谷区高齢福祉部長）



板谷　雅光
（世田谷区社会福祉事業団理事長）

高齢者のデジタルデバイド問題について

ーよりよい暮らしのためにー

社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター

篠﨑 広一

（IT　デジタル　自主グループ）

目的

デジタルデバイドとは、情報通信技術特にインターネットの恩恵を受けることのできる人とできない人の間に生じる情報格差のことをいう。代沢地区でも、情報の収集やスマートフォン操作が分からなくなり、困っている方が増えてきていることが分かった。

発表を終えて　　篠﨑　広一（社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター）

デジタルデバイドについて、まず世の中で高齢者が困っていることにスポットをあて、講座を開いたことで、新たな問題、課題、参加者の声を聴くことができました。今回はそのようなことを発表させていただきました。

発表を終えて色々な方に事例を見て、聴いていただき、この課題をさらに分析し代沢地区の方々に必要な情報、知りたい情報を提供したり、講座を開けるように、また、この取り組みを地域包括支援センターだけではなく、世田谷区、まちづくりセンター、社会福祉協議会とも連携を図りながら、チームで取り組めるように進めていきたいと考えています。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

様々な情報へのアクセスがホームページ等デジタル媒体となっていく中、パソコンやスマートフォンを利用できないと不便な昨今、高齢者が情報を得ることが難しくなっている。スマートフォンを持ってはいるものの使い方が分からずストレスを感じる高齢者も多い中、マンツーマンでスマホ講座を行う側も人員や時間を要することと、推察するが高齢者の利便性向上のために、朗らかに行っている姿に感銘を受けた。

引き続きよろしくお願いします。

地域にどっぷり！

ー深沢らしい地域ネットワーク再構築をめざしてー

社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター

石井 貴志

（繋がり　見直し　目標）

目的

地域の相談窓口としてアフターコロナを迎え、希薄になった周りとの関係をもう一度取り戻すためのアプローチ方法や実際の行動を通して、ネットワーク再構築に向けた取り組み方法などを検証することを目的とした。

発表を終えて　　石井　貴志（社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター）

昨年度は、地域住民への直接アプローチ（公園での体操事業等）を発表し、今年度は、地域住民がよく出向き間接的な見守り支援が期待できる商店街などへのアプローチを発表しました。

まだまだ、十分な体制が作れたとは言い難いが、継続することで今後の支援体制構築に繋がっていければと自分たちも期待している。

すぐに目で見える形で結果が出るものではないですが、今後もネットワーク再構築を目指して地域に出向き、小さなことからコツコツと関係性を高めていきたいと考えております。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

地域包括ケアは、多様な立場の方々が関わり支援することで成り立っていきます。コロナ禍においては、その関係の維持発展は難しく、多くの地域包括支援センターから苦悩はとても大きいと聞いています。

そうした中、地域資源としての商店街に着目し、集中的に訪問・参加の働きかけを行ったことは、とても効果的な取り組みです。人が暮らしていくためには衣食住が足りることが必要であり、引き続き深い関係を築いていくことを期待します。

市民が運行する「玉川おでかけバス」の活動報告

ーだれもが自由にお出かけできる地域を目指す市民活動ー

世田谷区福祉移動支援センター（おでかけサポーターズ）
市村 和行、秋森 かつ枝、浅倉 信次、伊藤 潤一、石川 令子、鬼塚 正徳

（市民活動　交通問題　おでかけ）

目的

おでかけサポーターズは世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）を事務所として、日頃、外出の機会が少ない方々のおでかけを支援するシニアのボランティアグループです。世田谷区内にも買い物などのおでかけに困難を抱える方々が多くいることから、その解決策の一つとして、市民の手で「おでかけバス」を走らせています。昨年度から「世田谷区地域の絆連携活性化補助金」の助成を受け、また世田谷区社会福祉協議会の協力を得て、玉川地域のおでかけバスの運行を継続しています。

昨年の発表以降の運行活動や地域との関わりを報告します。

発表を終えて

秋森　かつ枝、浅倉　信次、伊藤　潤一
（世田谷区福祉移動支援センター（おでかけサポーターズ））

地域でおでかけに不便を感じている方々を地域のボランティアでおでかけ支援をし、高齢者等の健康で自立的な暮らしを促進したいと頑張っています。ニーズの把握をしっかり行い、それにフィットさせたいのですが、まだまだ、十分でないと感じています。

玉川地域に住む方の参加（運転手等ボランティアとして）がもっと得られたら良いと思っています。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

自宅に閉じこもり、外部との交流が減ると、特に高齢者は認知機能の低下やフレイルを招き、要介護状態に近づく危険性が高いと言われている。また、昨今の人手不足によるバス路線の廃止や減少による交通不便も大きな課題となっている中、発表者の取り組みはイベントなども組み入れ、外に出る目的も創出している。活動されている方もシニアであり親しみがある様子が見られた。

得難い取り組みであり、当日の講評でも申し上げたが敬意を表します。

福祉の選択肢と可能性を拡げる

ー日本初の取り組みー

株式会社HABING

熊谷 勇太

（多様性　選択肢　シェアハウス）

目的

「親なき後も住み慣れた地域で自立して暮らし続けたい」というご利用者様やご家族の願いを形にすべく、2022 年 8 月に重症心身障害者、医療的ケア対応のシェアハウスを世田谷の地に立ち上げた。

多くの反響、2 棟目建設の要望を受け、2024 年 6 月に 2 棟目をオープン。内覧会には 200 名以上の来場者があり、その注目の高さを肌で感じた。想像を上回る入居申し込みをいただく中で自分達のシェアハウス運営で実現できること、重症心身障害者、医療的ケア対応という強みを再確認し、それに向けた人材のスキルアップ、体制作りに注力している。施設自体が地域に開かれたコミュニケーションの場となることで大きな意味でのダイバシティ―の実現を目指し、日々試行錯誤している。

発表を終えて　　熊谷　勇太（株式会社HABING）

2 回目となる今回の出展、より情報を分かりやすく臨場感をもってお伝えすべく、動画を上映会の様な装いで発表させていただきました。シェアハウス 1 棟目 OPEN から 2 年が経過し、また 2 棟目を今年 6 月に OPEN する中で、会社やその取り組みの認知が本当に少しずつですが浸透している感覚がありました。また取り組みへの理解、関心の高さは継続して強く感じ、盤石な運営基盤作りに注力している現状の中で、一日も早く更なる事業の拡大へ前進できるよう取り組んでいきたいと強く感じました。

また、今後はそのノウハウを同じような志を持った方々と共有、意見交換しながら更なる大きな力にして行きたいと思いました。

今後も福祉業界に限らず広くご協力ご支援を賜りながら成長、前進してゆきたいと思っております。

よろしくお願いいたします。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

医療の発展もあり重症心身障害者の方々の寿命も延びており、親亡き後対策は喫緊の課題です。一方で医療的ケアの確保、人材の確保といった点からその対応が遅れています。

そうした状況のもと、民設民営でシェアハウスを開設したことは非常に驚かされました。福祉業界や福祉行政に長らく携わると、知らぬうちに発想や行動が固定化されていたのでしょう。苦労を苦労と思わず楽しいと言われることには驚愕しました。そうでないと既成概念に風穴を開けられないと、改めて感じました。今後の活躍・発展を心から期待します。

ケアマネジャーの課題の解決方法についての模索

社会福祉法人大三島育徳会　居宅介護支援事業所博水の郷
松下 昌平、腰塚 寛

（普遍的な課題　スモールステップ）

目的

当居宅介護支援事業所のケアマネジャーは、事例検討会などにおいて、個別の事例における支援方法を検討する機会はあるものの、自らのケアマネジャーとしての一般的な課題・疑問点などを他のケアマネジャーと話し合ったり、相談する機会がほとんどなかった。

今回、そういったケアマネジャーの個々の課題・疑問点について、ケアマネジャー同士の話し合いの場で共有し、話し合いを行い、また継続的にモニタリングを行うことで、自らの課題の克服につなげ、個々のケアマネジャーの資質向上に役立てる。

発表を終えて

松下　昌平（社会福祉法人大三島育徳会
居宅介護支援事業所博水の郷）

ポスター発表ということで、ポスターを見に来ていただいた方から、ご質問を受けたり、意見交換をすることで、双方向の対話ができたということで、発表者自身も実りが多い体験ができた。特に、コアタイムの時にも発表をした「ケアマネジャーのシャドウワーク」のことや「スマートフォンの積極的な活用」に関して、助言者の方や、また来場者の方からも、ご自身の体験や、方法論などを聞かせていただいたことは、今後のケアマネジャーの業務にも役立つことだと思う。事業所の他のケアマネジャーにも、今回得たことを伝達していきたい。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

介護保険サービスを利用するにはケアマネジャーと利用者や利用者家族が、ニーズや周辺環境を共有することが欠かせない。その際、ケアマネジャーによって差異があったり、利用者等による過度な要求があったりすると、適正な介護保険サービス利用に繋がらない。また、ケアマネジャーのシャドウ業務（介護保険サービス以外の要求）も課題であり、そうしたことを事業所内で共有し改善していくことは大切なことである。スマートフォンの使い方ひとつで業務効率が上がる、という発表は目から鱗であった。

引き続き事業所内での情報共有を進め、質の高いケアマネジメントを期待しています。

一般デイでできること

－何のために一般デイに行くのか？－

社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
宮本 真理子

（役割支援　受け入れ困難事例）

目的

デイサービスと一言で言っても、サービス内容は多岐にわたる。機能訓練や趣味活動に特化したデイサービスは、目的も明確で統一感がある。一方、一日型の一般デイは入浴・他者との交流・ご家族のレスパイトなど目的は様々で、利用当初は「私はこんなところに来る必要がない」と仰る方が非常に多い。そんな利用者に役割支援や傾聴・イベント企画など提供することで、デイサービスが「楽しいところ」「行きたいところ」「安心できる場所」になることを目的とした。

発表を終えて　　宮本　真理子（社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢）

「行きたくなるデイサービス」にするため、ヘアカットやフラワーアレンジメントなどのイベントを紹介するとともに、デイサービスを続けるために歩行訓練を頑張り、また歩けるようになった利用者様の好事例を発表させていただきました。自分の歩行分析を可視化することができる「トルト」というアプリを利用し、目標設定やモチベーションも維持。ポスターを見学された方々からも「トルト」に対する質問を多く受けました。

これからも「楽しいところ」「行きたいところ」になれるよう、「トルト」の継続とともに新しい取り組みにも挑戦していきたいと考えております。



助言者コメント

山戸　茂子（世田谷区高齢福祉部長）
板谷　雅光（世田谷区社会福祉事業団理事長）

デイのご利用者の中には、歌等に参加せず退屈そうに座っている方も散見されます。ご家族の負担を考え、心から望むことなく参加されているのでしょうか。

最近、若者の承認欲求がよく話題になりますが、程度の差こそあれ人には承認欲求が存在します。役割を与え、そのひとのプライドを刺激しながら良い方向に導いていく・・うまい取り組みです。

また、スキンシップは年齢や性別に関係なく心地よき刺激です。これからも、お一人おひとりの個性を把握し、楽しく行きたくなるデイづくりをしてください。

ポスター発表　第２会場

【東館３階　３０９教室】

助言者

田中　耕太　（世田谷区保健福祉政策部長）

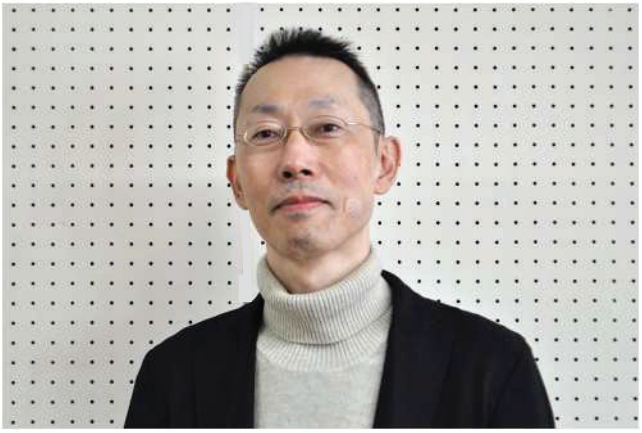
長岡　光春　（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

	発表者	所属	タイトル
1	吉原　浩一 山田　瀬美 野辺　頼晴	世田谷区福祉移動支援センター 「そとでる」	地域連携で守る「みんなの自由なおでかけ」 －誰もが自由に外出し、移動できる世田谷にするために－
2	長見　亮太	社会福祉法人せたがや樫の木会 わくわく祖師谷	「ニコリホット報告」を通して、プラス面に着目した支援に向けての取り組み
3	山根　圭以子	社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム	人と人をつなぐ仕事 －介護職の魅力を発信しよう－
4	田島　和美	社会福祉法人せたがや樫の木会 まもりやま工房	豊かな心と豊かな暮らしを目指して －新たな出会いから－
5	佐藤　忍	社会福祉法人奉優会 優っくりデイサービス喜多見	楽しく通って欲しい －職員が今できること－

※コアタイムは、発表者が説明および質疑に対応します。

ポスター会場は、１３時００分～１６時２５分まで自由にご覧いただけます。

進行役・助言者



田中　耕太
（世田谷区保健福祉政策部長）



長岡　光春
（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

地域連携で守る「みんなの自由なおでかけ」

ー誰もが自由に外出し、移動できる世田谷にするためにー

世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」

吉原 浩一、山田 瀬美、野辺 頼晴

（協働　連携）

課題整理

我々、世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」は、「誰もが自由に外出し、移動できる世田谷にするために」を基本ポリシーとし、移送 NPO や介護タクシーの配車業務、移動に関する相談業務、移動関連の人材育成業務を行っています。中でも配車業務に関しては、135 の介護タクシー、移送 NPO、介護保険適用事業者に加盟いただき、10，000 人余りの利用者に介護タクシー等を手配しています。しかし、介護タクシー等は、「Door to Door」が基本（「介助」を伴うケースもありますが）です。このためご自宅内、ご自宅を出られるまでのケア等（所謂「送り出し」）、目的地でのケア（所謂「受け入れ」）等を関連組織や団体と協働・連携されることにより、より利用者に「安心」「安全」「快適」な移動を提供できます。

発表を終えて　　吉原　浩一（世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」）

発表に際し、2 テーマを用意いたしました。「そとでる」を知って頂くための「そとでるって？」と、主題の「地域連携で守る、みんなの自由なおでかけ」ですが、残念ながら 3 分の時間配分が出来ておらず、主題の発表が尻切れトンボになったことが、極めて残念でなりません。また、1 番手の発表でしたので、聴者も少なくこれも残念でありました。ただし、いただいたご質問は、当方がお伝えしたかったポイントを的確に突いたご質問で、発表の不十分な部分を補っていただけました。次回、機会をいただけましたら、事前準備を抜かりなく行い、伝えたいポイントをきちんとお伝えできる発表をしたいと思います。



この度は有難うございました。

助言者コメント　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

世田谷区でもご多分に漏れず高齢者の人数は右肩上がりです。特に 85 歳を超えると要介護の方が急速に増えてきます（約 2 万 5 千人（約 65%）が要介護認定を受けています）。高齢による免許返納や、単身で頼る人もいない方など、移動に何らかの支援が必要となる方が多くなる条件が揃っており「そとでる」の役割は、ますます重要になっています。

「そとでる」は、「Door to Door」が基本であるため、自宅を出られるまでのケア、目的地でのケアを課題としてとらえ、地域の様々な関係者と連携され、具体的なアクションを起こすことで、区民の外出支援ニーズに応えています。あんすこへの周知やヒアリング、訪問介護事業所に介助技術講師を依頼し、登録事業者（移送事業者）向けに介助技術研修会を行うなど、区民の自由な移動を確保するための基盤づくりをされています。

新型コロナが 5 類になって以降は、ご自身では移動が困難である区民の移動ニーズも高まっているかと思います。今後も区民が自由に外出し自立した生活を送るための移動支援について、様々な関係者と協働・連携のもと実施していただくよう、引き続きよろしくお願いいたします。

「ニコリホット報告」を通して、プラス面に着目した支援に向けての取り組み

社会福祉法人せたがや樫の木会　わくわく祖師谷
長見 亮太

（肯定的視点の気付き　職員連携）

はじめに

当施設は、主に知的障害のある方の就労継続Ｂ型と生活介護の複合施設で、60 名程の利用者が通っており、個別支援計画をもとに一人ひとりが充実した生活を送れるよう支援を行っている。適切な支援を行うためには職員間で日々の支援を振り返り、共通認識を持って支援に当たることが大事だが、どうしても職員会議で挙がる議題が、課題的な行動への対処やヒヤリハット・事故報告の共有が主になり、本来支援において重要な、本人の強み＝ストレングスを活かした目標に向けた支援が、議題に挙がりにくい状況があった。日々の支援では肯定的な関わりも多く見られるだけに、課題面を報告するだけではなく、ストレングス視点の共有が、職員の意欲向上の面からも必要に思えた。そのため、利用者のプラス面に気付き、共有する取り組みとして、今年６月から会議で「ニコリホット報告」を取り入れた。

発表を終えて

長見　亮太（社会福祉法人せたがや樫の木会　わくわく祖師谷）

ポスター発表という形だったので、発表自体よりは資料作成自体が自身にとって学びの機会になりました。これまで継続して発表させていただいていますが、ここ数年、障害分野からの発表が大幅に減少しているように思います。区内には相当数の障害福祉施設があるにも関わらず、こんなにも発表の割合が少ないことは何か問題があるのではないかと思います。現場の職員が頑張り、活性化していかないといけない課題ではありますが、学会としても問題意識を持って取り組む必要があるのではと考えます。



助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

これまで、職員間で「ヒヤリハット・事故報告」を共有していたが、６月から「ニコリホット報告」を取り入れ、職員のかかわりによって変化する利用者の姿など、大切な視点に気付かされたとのことです。また、職員が利用者の良い点に着目することで、利用者が「自分のことを肯定的に受け止めてくれる」という関係性の中で、安心して自分の持っている力を発揮することができるというのは、大変素晴らしいことだと思います。

今後も、継続していただくとともに、報告集を作成し、活用していただければと思います。

人と人をつなぐ仕事

ー介護職の魅力を発信しようー

社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム

山根 圭以子

（採用　学生）

目的

介護職のイメージは「3K(汚い・きつい・危険)が揃っていて辛そう」、「職員の年代も幅広く人間関係が複雑」など、職場体験の中学生から「職場体験の介護職は人気がない」と話があったことをきっかけに、介護職のイメージアップを図るためにはどうしたら良いか考えた。

発表を終えて　　山根　圭以子（社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム）

このたび、ポスター発表「人と人をつなぐ仕事ー介護職の魅力を発信しようー」を多くの方にご覧いただけたことを、大変うれしく思います。発表を通じて、SNS フォロワーとの繋がりが採用活動に直結した具体的なエピソードや、職員の中からインフルエンサー的役割を担う人材を配置する取り組みに関する質問をいただき、有意義な意見交換ができました。



特に、若い世代への介護職の魅力発信が大きな反響を呼び、同じ課題を抱える施設の方々から、多くの関心をいただけたことに感謝しています。

今後も、SNS を活用した情報発信や新しいチャレンジを通じて、介護職の魅力をさらに広めていきたいと考えています。

助言者コメント　　田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

今でも不足している介護の仕事を担う職員は、2040 年には東京都全体で 7 万 5 千人くらい不足すると言われています。人口比でみると世田谷では 5 千人くらいの職員が足りないという計算になります。デイサービスも特養ホームも訪問介護もケアマネジャーも合算した数字で、イメージがわきにくいですが、2024 年と同じようなサービスが 2040 年には受けられないということです。

現場では、区民にできる限り良いサービスを提供したいと奮闘されているわけですが、その基本となる職員が集まらなくてはサービスの提供そのものも危うくなってきます。

「等々力の家デイホーム」では、職場体験の中学生の「介護職は人気がない」に現場レベルで危機意識を持ち、介護職のイメージアップを行ってきました。Instagram や TikTok での発信により、職場の楽しそうな雰囲気が伝わり、採用や新たなボランティアさんにつながるなど成果が表れています。また、利用者のご家族にもデイサービスの楽しそうな様子を伝えられる、職員のモチベーションとチーム力向上につながるなど副次的な効果もみられています。

今後とも SNS による発信で、介護職場の楽しさを広め、働くみなさまのモチベーションを上げていただけたらと思います。

豊かな心と豊かな暮らしを目指して

ー新たな出会いからー

社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房

田島 和美

（丁寧な関わり　言葉の持つ力　受容）

はじめに

昨年度は異動により利用者の方との新たな出会いを通して、受容的な関わりについて改めて考えをまとめ発表した。今年度は、支援経験年数の少ない職員との新たな出会いもあり、さらに支援における丁寧な関わり方を伝えること、自ら確認することが増えている。目に見えるお相手の言動の本当の気持ちはどうか、なぜその言動になるのか、という心情理解を継続して大事に支援をしている一方で、私たち支援員が発する言葉が利用者の方にとって大きな影響力を持っていることを自分自身も職員間でも折々に確認しながら支援を進めるようにしている。利用者の方がその方らしく豊かな暮らしになるよう丁寧な関わりをする上で、何気なく発してしまうこともある支援者の言葉が持つ力について、エピソードに触れながら考え、発表する。

発表を終えて

田島　和美（社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房）

初めてのポスター発表ということで、自分が感じていることや伝えたいことを短い時間の中でお話しできるよう、ポイントをまとめて臨んだつもりでしたが難しかったです。ですが、この発表をさせていただくことで、改めて大切な役割を担っていることを心に留めることができました。



講評でいただいたように、自分が感じていることを事業所全体で共有したり、意見交換をすることは大切なことであり、今後の課題に思います。まずは自分から、振り返りをきちんと行い、時に失敗から学ぶことも前向きに捉えて、丁寧な関わりにつなげていきたいと思います。

発表の機会をいただき、ありがとうございました。

助言者コメント

田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

利用者の方との丁寧な関わり方として、肯定的な解釈、安心できる関係の構築、さらには、目に見える言動だけで理解しようとせずに本当はどうなのかという視点を持つ、支援者の言葉が持つ力を心に留めて接するなど、心情理解を大切に支援しているという内容の発表で、大変興味深かったです。

具体的なエピソードについては、残念ながら、時間の関係でお聞きすることができませんでしたが、次回、ぜひ、ご報告いただければと思います。

今後も、このような丁寧な関わり方を継続していただくとともに、エピソードや職員さんが感じたことを報告集等として整理し、共有化していただければと思います。

楽しく通って欲しい

ー職員が今できることー

社会福祉法人奉優会　優っくりデイサービス喜多見

佐藤 忍

（役割支援　自分に出来る事　認知症ケア）

目的

優っくりデイサービス喜多見は、認知症・医療特化型デイサービスとなります。デイでの大きな役割として、その人らしさを大切に在宅生活を支え、住み慣れた自宅で最後まで過ごしていただきたくサポートをしています。デイの活動の中で、役割を持った活動を個々に合わせて行うことで「自分でも出来るんだ」と、実践を通して感じていただき、自信に繋げられ、楽しく通っていただけるように取り組んでいます。また、事業部、事業所内でも認知症への理解を深めるために研修を受けることで、知識とケアの向上を目的として取り組んでいます。

発表を終えて　　佐藤　忍（社会福祉法人奉優会　優っくりデイサービス喜多見）

今回初めての区民学会への参加となり、緊張もありましたが楽しく参加させて頂きました。

多くの事例や、ポスター発表で他事業所を知ることが出来たと同時に、自事業所を知っていただく機会をいただけて有意義な時間を過ごすことが出来ました。

どの事業所も、抱える問題や悩みがある中でも共通していることは「利用者様のため」だったと感じております。

利用者様の笑顔を作りだすには、職員が楽しんでいなくてはならないと思っております。

今回、活動の様子から優っくりデイサービス喜多見の職員と利用者様の笑顔が沢山感じていただけていたら幸いです。



助言者コメント

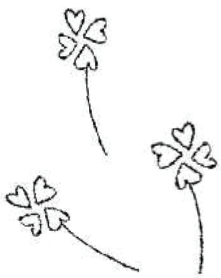
田中　耕太（世田谷区保健福祉政策部長）
長岡　光春（世田谷区社会福祉協議会常務理事）

世田谷区の認知症の高齢者の方は、約２万５千人いらっしゃいます。毎年千人ずつくらい増える見込みです。釈迦に説法ですが、区では認知症希望条例において「本人一人ひとりが自分らしく生きる希望を持ち、どの場所で暮らしていてもその意思と権利が尊重され、本人が自らの力を発揮しながら、安心して暮らし続けることができる地域を作る」ことを基本理念に掲げました。「優っくりデイサービス喜多見」の取り組みは、この基本理念に沿ったサービスを実践されていると感じました。デイサービスを「職場」と思っている方に対しては「仕事」の達成感を味わう環境づくりを心掛け、調理プログラムでは、主婦だったころの記憶に働きかけたことで、その方の表情が自信に満ち溢れていたものになるなど、利用されている方、個々に寄り添った支援をしておられます。

今後も、認知症ケアに関わる研修を参考に、知識とケアの向上に繋げていくとのことを伺いました。認知症になってからも誰もが自分らしく希望を持って暮らすことのできる地域共生社会を共につくっていければと思います。よろしくお願いします。









口頭発表　第１分科会

【東館３階　３０６教室】

進行役・助言者

園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）

後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

	発表者	所属	タイトル
1	小林　薫奈 篠塚　彩菜 髙瀬　美咲 花木　由布子	東京都市大学 人間科学部児童学科３年	スマートフォンが及ぼす大学生の視力低下と改善について －用途別からの一考察－
2	倉田　遼佑 冨永　樹生 林　龍之介 岡　亮太朗 宮内　佑 葉　思遠 雷　霆 増田　猛 三橋　隼人	日本大学文理学部 社会福祉学科 ２年 （福祉社会フィールドワーク）	子ども・若者が輝ける秘訣 －大学と地域の連携から－
3	白井　るり 相川　鈴菜 白鳥　結 坂井　円香 阿部　音和	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 １年	子どもの発達支援に関する一考察 －ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－
4	川崎　結衣 佐藤　沙知 澤井　壱成 塩野　春奈 平井　心結	日本大学文理学部 社会福祉学科	地域とつながる －学生の活動から－
5	田中　光里 長井　虹美 中河　俊翼 野澤　陽花	東京都市大学 人間科学部児童学科 ３年	幼少期の好き嫌いと大人の援助方法 －食を営む力の育成－
6	甲斐　翠 北川　夏子 石川　美紀	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園分園	１人１人の育ち（学び）を大切にする保育
7	岡田　真和 西城　里咲 鈴木　彩那 竹端　ゆい 光畑　佳穂	東京都市大学 人間科学部児童学科 ３年	子どもの主体的な活動を高めるには －習いごとを始めるきっかけからの一考察－

※第１分科会-4「日本大学文理学部社会福祉学科」は発表中止となりました。

進行役・助言者



園田　巌

（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）



後藤　悠里

（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

スマートフォンが及ぼす大学生の視力低下と改善について

－用途別からの一考察－

東京都市大学人間科学部児童学科　３年
小林 薫奈、篠塚 彩菜、髙瀬 美咲、花木 由布子

（スマホ　大学生　視力）

目的

近年、ペーパーレス化に伴いスマートフォンの使用率が高くなってきたとの印象がある。学生生活においても、紙媒体から電子媒体への変換がこれまで以上に進んでいる状況があり、その影響により目や視力への影響が強くなってきたことが想定される。本研究では、大学生を対象としたアンケート調査を実施し、スマートフォンの利用率増加と学習や仕事、趣味などの用途別割合等の視点からスマートフォンと視力低下との関係性を明らかにする。また、心身に悪影響を及ぼさないスマートフォンの使用法について提案し、今後の向き合い方を考察する。

発表を終えて

小林　薫奈、篠塚　彩菜、髙瀬　美咲、花木　由布子
（東京都市大学人間科学部児童学科　３年）

発表を終えて、これまでの大学生活を見直す貴重な機会となりました。身近な問題に向き合うことで、再評価したデバイスの使い方から健康的な習慣の必要性を強く感じました。

また、質疑応答を通じて、新しい視点で改善策を考察することができました。助言者からの意見は研究の理解を深めるとともに、今後の方向性についての新たなアイデアを得られました。特に、スマートフォンの使用時間を管理する具体的な方法など、実践的な改善策についての議論が印象強く残っています。



これらの経験から、スマートフォンの適切な使用方法について探究することができました。今後もこの研究に関心を持ち、より良い生活習慣を提案していきたいと思います。

助言者コメント

園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本発表の意義は、大学生を対象にしたアンケート調査を実施し、データを収集したことにより、若者と視力低下についての実態を明らかにした点にあります。また、ほかの公開データを使用して自分たちのデータの検討を深めたり、課題解決を個人の行動変容のみに求めるのではなく、学校現場に求めたりするなど、多角的な視点を持って報告が構成されていました。

質疑応答では、大学教員である助言者の質問に対して「夜中にスマホを使用することが目に悪いから、課題の提出締切時間を検討したらよいのでは」という実践的な提言もなされ、調査結果が活かされたもう一つの瞬間を感じることができました。

子ども・若者が輝ける秘訣

－大学と地域の連携から－

日本大学文理学部社会福祉学科　２年（福祉社会フィールドワーク）
倉田 遼佑、冨永 樹生、林 龍之介、岡 亮太朗
宮内 佑、葉 思遠、雷 霆、増田 猛、三橋 隼人
（地域連携　若者支援）

目的

「福祉社会フィールドワーク」の授業の中で、大学と地域のつながりについて考え、世田谷区が行っている若者支援に参加した。そして、世田谷区立希望丘青少年交流センターアップス、世田谷区若者の居場所「たからばこ」において、イベント企画を通して、地域の方々との関わりや大学での連携について、多くの方々と一緒に考える機会を持ち、大学生として何ができるのかを考え、実践することを目的とした。

発表を終えて

宮内　佑（日本大学文理学部社会福祉学科　２年（福祉社会フィールドワーク））

福祉区民学会を経験し、私たちにとってとても大きな力となったと考えています。私を含め、私のグループのメンバーたちは学会というものに出席することは初めての経験でした。他の大学の知らない方々が多くいる場で、自分たちの作ったものを発表するということは、とても緊張しましたが、発表を終えた後の爽快感や達成感はこういう場を通してでしか、得られないと感じました。



また、大学生として、地域の方々や障がいを持っている方々に、どのように接していくべきなのか、何ができるのかを考えさせられる良い機会になりました。

助言者コメント

園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

本発表は、社会福祉学科の学生が学部の枠をこえた学生同士のつながりと、地域における居場所づくりに取り組んだ実践報告です。共に生きる社会をつくりだすためには、さまざまな人たちからの協力が不可欠であり、この課題に大学生という立場を活かしながら挑戦した点に、本実践の意義があります。

印象的だったのは、共に活動する仲間として関係性を築いていく姿勢が示された点です。このような「共につくる」という実践的アプローチの中に、多様な人たちがつながりを育む際の重要なヒントが示されていると感じました。

子どもの発達支援に関する一考察

－ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年
白井 るり、相川 鈴菜、白鳥 結、坂井 円香、阿部 音和

（子ども　発達支援　関わり）

目的

私たちは、知的・発達に遅れや不安がある子どもの支援、その家族が抱える悩みや現状を知りたいと考えた。そこで、世田谷区の児童発達支援・放課後等デイサービス事業所でのボランティア活動を通し、障害児とその家族、地域のニーズについて考え、学びを深めていくことを目的とした。また、活動先で得た知識や現状を把握することで、多くの人に知ってもらう活動をし、地域社会にも貢献したい。

発表を終えて　　白井　るり（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年）

今回、私たちは障害児に対する支援についての研究を行いました。私たちは実践活動を通して、個々の子どもの特性や気持ちに寄り添った柔軟な関わり方と、家族を含めた包括的な支え合いの必要性を痛感しました。発表後に質問してくださった先生より、子ども一人ひとりに合わせた関わりが２次障害の予防に繋がっているということをご助言いただき、自己肯定感の向上やストレスの軽減となっていると考えを深めることができました。



今後の研究課題として、多くの人が共生の理解を深め、障害の有無にかかわらず支え合う社会を実現するためにはどのような取り組みが必要かを考え、継続的なボランティア活動を行うことで、私たちに何ができるのかをさらに考えていきたいです。

助言者コメント　　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

大学１年生の皆さんが実際に地域の社会資源に出向き、そこに内在する諸課題に触れられたことは大変意義深いことだと思います。特に、特別な支援や配慮が必要な子どもとの関わりを通してのソーシャルワーク実践は、その視点がミクロからメゾ領域にまで及びますから、地域福祉の知見を広めるためにはとても有意義な活動であると考えられます。そして、このことはインクルーシブ社会の実現を目指すことにもつながると考えられ、今後のより良い子育て支援や福祉を考えていくうえでの重要な活動と言えるでしょう。

また、発表の中で強調されていた「子どもの意思表示の手助け」は、子どもの意見表明権を保障する上で最も重要な行為であり、その意味でも子育て支援や福祉の核心に迫った良い発表であったと思います。

幼少期の好き嫌いと大人の援助方法

－食を営む力の育成－

東京都市大学人間科学部児童学科　３年
田中 光里、長井 虹美、中河 俊翼、野澤 陽花

（食育　食べ物の好き嫌い　アプローチ）

はじめに

乳幼児期におけるバランスのとれた食生活は、子どもの発達や心身の健康維持において極めて重要である。しかし、保育所実習において、多くの子どもたちが食べ物の好き嫌いや食べ残しをする様子が見られ、これが子どもの健康や成長に様々な影響を及ぼすのではないかと懸念された。そこで本研究では、大学生を対象に、幼少期と現在の食べ物の好き嫌いに関する調査を行い、子どもの好き嫌いに対する効果的なアプローチ方法を見出すことを目的とする。

発表を終えて

長井　虹美（東京都市大学人間科学部児童学科　３年）

発表のためのアンケート調査を通して、苦手な食べ物がある子どもへの関わり方を考えることができました。無理に食べさせるのではなく、子どもの「食べたい」という自主性を引き出すような援助方法が重要であると調査を通して学ぶことができました。

自分の興味のある事を調べ、まとめて発表することで、研究テーマに対する学びを深めることができました。



助言者コメント

園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

保育所や子育て家庭において、好き嫌いの場面に出会うことは珍しいことではありませんが、一方で、その対応に苦労することも多いと思います。研究では、子どもと保育者との関わりを注意深く観察して、そのやり取りの中から導き出される子どもの思いにも着目しています。そして、そのうえで好き嫌いの原因や嗜好の変化に関する調査を実施していますから、得られた結論に説得力が感じられました。

具体的には、子どもの意志や思いに着目しながら具体的なアプローチ方法に言及しており、教育・保育の原点を見据えた有意義な発表であったと思います。ことに、子どもへの肯定的な関わりや子どもの意欲を育むことを目指したアプローチ方法は、今日の保育者に求められる最も重要な視点であり、発表全体が子ども中心の視点であることに感心させられました。

１人１人の育ち（学び）を大切にする保育

社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園
甲斐 翠、北川 夏子、石川 美紀

（子ども主体　自発性）

目的

鎌田のびやか園分園の母体となる社会福祉法人嬉泉は、「受容的交流理論」に基づく社会福祉援助活動を行っている。「受容的交流理論」とは、自閉症という人間関係の発達に困難性を示す人の発達を支援する経験から生まれ、かつ親が行う子育ての基本となる理論である。

その中で、私たちは主体的に行動する子・たくましく自分の力が働く子・人を思いやる豊かな心を持つ子を目標に掲げ、子どもたちが子どもらしく、伸び伸びと過ごせるよう、子ども主体の生活、遊びを行っている。

発表を終えて　　甲斐　翠（社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園分園）

日々の保育をこのような形で発表することで、振り返る良い機会となった。

園庭がない等、環境面での難しさが課題としてあるものの、子ども達が主体性を持って過ごしていることが、子どもたちの笑顔から伝わってくるとの感想をいただき、子ども達の育ちに沿った保育が行えているのだという自信となった。



この発表の結果を園に持ち帰り、全職員と結果の共有を図ると共に、私たちが行う日々の保育を今一度振り返る機会を設け、より良い保育に繋げていきたいと感じた。

助言者コメント　　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

一人ひとりの育ちを大切にするためには、丁寧な子ども理解の実践を基盤としながら発達過程を意識した対応がいかに重要であるかということを再認識できる良い発表であったと思います。特に、子どもの満足感や自信が基盤となって育まれる興味や好奇心が、その後の自発性を育むことに強く関連していることを示唆した今回の発表は、教育や保育に携わる多くの人の参考になったのではないでしょうか。

また、適切な子ども理解を行うためには保育者間の意識共有や連携が必要であり、そのことが子どもの思いや願いに寄り添う保育を支えていることも理解できました。鎌田のびやか園分園で日常的に提供されている保育内容の充実度が伝わってくる良い実践事例であったと思います。

子どもの主体的な活動を高めるには

－習いごとを始めるきっかけからの一考察－

東京都市大学人間科学部児童学科　３年
岡田 真和、西城 里咲、鈴木 彩那、竹端 ゆい、光畑 佳穂

（主体性　習い事　きっかけ）

目的

本研究の目的は、子どもの主体的な活動を高める方法について、習いごとの視点から考察することである。今日、何らかの習いごとをしている子どもの存在は決して珍しいことではないが、実際に習いごとを始めたきっかけと満足度との関連性について疑問をもったのがこの研究の動機である。

本研究では、習いごとを始めるきっかけと満足度の関連性の調査を実施し、その結果を分析しながら子どもの主体的な活動を高めるための視点について考察を深めることとした。

発表を終えて　　岡田　真和（東京都市大学人間科学部児童学科　３年）

発表前は不安が残っていましたが、発表を終えて助言をいただいて安心しました。習い事に焦点を当てて子どもの主体性を高める方法について研究できて、とても良い経験になりました。さらに、子どもの体験格差について問題解決の可能性があるとの助言をいただき、新たな視点での課題も知ることができました。

これからテーマに対する理解をさらに深め、より広い視野で考える重要性を学んでいきたいと思います。

このような貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



助言者コメント　　園田　巌　（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）
後藤　悠里（成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授）

現代社会において、一つの課題に対して、複数の取り組みからアプローチをしていくことが、有益だと考えられます。本発表は、子どもの主体性を育む場として、学校や地域活動とは異なる「習いごと」に焦点を当ててアプローチしていく点がユニークです。アンケート調査からは、親の意向で開始した習いごとであっても、その過程で適切な声掛けをすることにより、調査対象者たちがそれを前向きに受け止めていくという、興味深い知見が得られていました。

本発表は、子どもの主体性を育むための新しいアプローチを、示したものと言えるのではないでしょうか。

口頭発表　第２分科会

【東館３階　３０７教室】

進行役・助言者

荒井　浩道　（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）

山本　学　　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

	発表者	所属	タイトル
1	市川　翔 石崎　翔 久保井　萌音 小林　明日香 水貝　菜々羽 宮屋敷　有翔 廣方　瑞希 本橋　智征 山岡　昇太	日本大学文理学部 社会福祉学科 2 年 （福祉社会フィールドワーク）	子どもとのつながりと学習支援 ー川崎市での学習支援企画を通して学んだことー
2	古沢　ひかる 関谷　美鈴	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム池尻	優っくり村スマイリング ー地域と共にー
3	小林　開人 藤原　和子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 烏山地域社会福祉協議会事務所 烏山地区事務局 地域住民	「顔見知り」から「顔なじみ」へ ーまちと人をつなぐ「さつまいもほり」ー
4	坂口　陽奈 小林　彩音 福岡　詩乃 今泉　優希 小城　悠亜貴 小林　広奈 齋藤　萌伽 福田　宇 古澤　明莉 宮林　姫	日本女子体育大学 体育学部健康スポーツ学科 助友研究室	農園でつなぐ地域のウォーキングマップづくり
5	堀見　洋継 谷口　裕太 矢野　弘枝 吉田　凌太	砧地域ご近所フォーラム 2025 実行委員会	砧地域ご近所フォーラム 2024「砧は私たちの誇り」 ー地域でわかりあえる仲間を作ろうー
6	萩原　光雄 谷山　二朗 市村　秀雄 土屋　明之	アクションメンバー（地域住民） 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター	太子堂アクションチームの取組みと地域の方々の想い ーつながろう！支え合おう！太子堂アクションチームー
7	石塚　那奈 井上　真琴 中野　環 西川　真央 村尾　ほのか	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 1 年	世田谷区における世代間交流について ーソーシャルワークプロジェクト活動を通してー

進行役・助言者



荒井　浩道

（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）



山本　学

（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

子どもとのつながりと学習支援

－川崎市での学習支援企画を通して学んだこと－

日本大学文理学部社会福祉学科　２年（福祉社会フィールドワーク）
市川 翔、石崎 翔、久保井 萌音、小林 明日香
水貝 菜々羽、宮屋敷 有翔、廣方 瑞希、本橋 智征、山岡 昇太
（子ども　学習支援）

目的

私たちは「福祉社会フィールドワーク」という授業の一環で、神奈川県川崎市幸区の方との合同企画として小学生の学習支援を行った。この企画における、大学生が小学生と一緒に学びを深めることから得たことや、地域福祉との関連について発表する。

発表を終えて

廣方　瑞希（日本大学文理学部社会福祉学科　２年
（福祉社会フィールドワーク））

今回、学会での発表を通して地域福祉に対する意識を高めることが出来ました。実際に川崎市で学習支援を行い、学会で成果報告をしたことで、子どもたちの勉強に対する意欲の高さや一緒に取り組むことの効果を改めて認識することが出来ました。

質疑応答では、私たちには無かった視点から質問をいただき、とても勉強になりました。そして、学会に参加する方も様々で、地域で活動している方や一般の方で見に来ている方など、多種多様な方がいるということを知り、とても興味が湧きました。また機会があればぜひ参加したいです。



助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

大変すばらしいプレゼンテーションをしていただき、内容も社会系や理科系の教科が盛り込まれた日本大学文理学部ならではの取り組みでした。

ストリートビューでは、子どもたちそれぞれが得意とする分野（サッカー、電車等）にも着目して、個々のストレングス（強み）を上手く引き出していました。

20 代の学生の皆さんと子どもたちの関係が、縦でも横でもない“斜め”の関係性を持ち、一緒に楽しみながら学ぶ大切さを報告いただきました。

優っくり村スマイリング

―地域と共に―

社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム池尻
古沢 ひかる、関谷 美鈴

（地域交流　活動）

目的

優っくりグループホーム池尻は開設から 13 年を迎えました。社会福祉法人奉優会が初めて開設したグループホームで、目の前には広々とした公園が広がり、入居者様が散歩を楽しむ中で地域との自然な交流が生まれています。この日常的なふれあいは、地域との結びつきを深め、介護への理解を広げるだけでなく、地域全体で支え合うコミュニティの強化に寄与しています。また「地域に開かれたホーム」として、介護の専門性を地域に還元する役割も果たしてきました。社会福祉の基盤である地域共生社会の実現に向けて、地域との交流は非常に重要な取り組みとなっています。

発表を終えて

古沢　ひかる（社会福祉法人奉優会
優っくりグループホーム池尻）

今回の発表を通じて、優っくりグループホーム池尻の 13 年間の歩みを振り返り、地域と共に成長してきた施設の魅力を改めて実感しました。「地域に開かれたホーム」として、入居者様の生活を支えるだけでなく、地域との自然な交流を通じて共生社会の実現に寄与している点を強調できたことに手応えを感じています。

また、施設の活動や地域との交流をインスタグラムで広報する取り組みについても紹介し、SNS を通じた地域住民や家族とのつながりの強化に対する関心を感じました。

今後も地域交流を深めるとともに、SNS を活用した情報発信を強化し、地域全体の福祉向上に貢献していきたいと思います。



助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

認知症にフォーカスしながら地域を軸として展開しており、素晴らしい取り組みでした。

地域福祉を推進する上で欠かせない連携や協働も、一般的には、多職種の連携で留まってしまうところを、地域連携、さらには地域住民とも連携するなどダイナミックに取り組まれています。これは、13 年という長年の積み重ねがあるからこその取り組みですし、横の拡がりを持たせるために、地域への情報発信も SNS を積極的に活用するなど、様々な工夫で繋がりがより強化されています。

「顔見知り」から「顔なじみ」へ

－まちと人をつなぐ「さつまいもほり」－

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　烏山地域社会福祉協議会事務所
烏山地区事務局
小林 開人
地域住民
藤原 和子

（つながり　顔なじみ　多世代交流）

目的

北烏山エリアは子育て支援機関が少なく、またコロナ禍で孤立しがちな親子が増えていることがあり、北烏山の農園を活用した子育て世代との交流を目的に事業を企画した。さつまいもほり体験を通して、地区内の親子と地域住民、支援団体や事業者との顔の見える関係づくりを目指す。交流を通して地区社会福祉協議会やファミリーサポートなど子育て支援団体を知ってもらい、子育て世代と地域とのつながりをつくることを目的とした。

発表を終えて

小林　開人（社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会
烏山地域社会福祉協議会事務所　烏山地区事務局）

発表を通して、事業に関わった団体の数や地域住民の動きを改めて整理することができ、現状のつながりをさらに発展させていくことや、新たなつながりづくりに向けて出来ることを考えることができた。発表後の質問で「今後に向けて」の話が出た際に具体的にどういう団体につなげていこうかなど新たな取り組みの種も生まれたように思う。きっかけは色々なところに転がっているので、様々機関との日々の関係づくりなど「点」がいずれ「線」になっていくように今後も取り組んでいき、事業をさらによりよいものにしていきたい。



助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

子育て支援機関が少なく、子育て世帯が増えている北烏山ならではの地域課題を踏まえながら、農園という地域の社会資源をうまく活用した、地域のことを考えた企画でした。

「芋掘り」だけではなく、事前事後においても多様な連携がなされていましたが、これは、日頃からの農園、農協との関係性やまちづくりセンター・あんしんすこやかセンター・社会福祉協議会・児童館の四者連携などの繋がりがあるからこそ、展開できた取り組みであると思います。

地域共生社会の実現や重層的支援体制整備事業などでも多世代での繋がりが求められている中、先駆的なモデルになるような取り組みで、農福連携の新しい形の可能性を感じました。

農園でつなぐ地域のウォーキングマップづくり

日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科　助友研究室
坂口 陽奈、小林 彩音、福岡 詩乃、今泉 優希、小城 悠亜貴
小林 広奈、齋藤 萌伽、福田 宇、古澤 明莉、宮林 姫

（農園　地域　ウォーキングマップ）

目的

スポーツ庁は、成人の週１回運動実施率を70%程度とすることを目標としている。しかし、実際は、52.3%と国民の運動実施率は低迷している。また、日本では高齢化・担い手不足などにより、農地が減少してきている。我々は、この２つの問題に目を向け、農地を巡るウォーキングマップを作成した。 本報告では、その活動プロセスについて報告することを目的とした。

発表を終えて

坂口　陽奈（日本女子体育大学
体育学部健康スポーツ学科　助友研究室）

今回の発表を終えて、質問者の方に珍しい農作物に興味を持ってもらうことができ、スポーツと農業を合わせた取り組みを行うことで、ご自身の運動習慣を見直し生活習慣病の予防にもなるのではないかと考えた参加者の方もおり、我々がウォーキングマップを作成する目的を参加者の方々に伝えることができたと思います。



発表までは、マップ作成に力を入れてきましたが、新たな課題として、今後どのようなところにどうウォーキングマップを周知していくのか、それを活用してどんなことができるのかをゼミに持ち帰り仲間と話し合っていきたいと思います。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

地域をしっかりとアセスメントされており、日本女子体育大学の強みを活かした取り組みでした。農園が近くにあるという地域の特性を活かしたウォーキングマップづくりは、健康づくり、介護予防、フレイル予防、認知症予防などにも繋がっていく、可能性を感じる取り組みでした。

それだけではなく、防災の視点も組み入れ、大都市東京の農園には防災の機能があることを住民に知っていただく機会を提供する取り組みにもなっており、とても社会性のある取り組みだと思いました。

砧地域ご近所フォーラム 2024「砧は私たちの誇り」

－地域でわかりあえる仲間を作ろう－

砧地域ご近所フォーラム 2025 実行委員会

堀見 洋継、谷口 裕太、矢野 弘枝、吉田 凌太

（顔の見える関係作り　地域　わかりあえる仲間）

はじめに

砧地域ご近所フォーラムは、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指し、顔の見える関係づくりを目的に 2010 年に始まった。医療関係者、高齢・障害・子育ての支援者、大学、行政他、砧地域で活動している多彩な人材で構成された実行委員会が、地域を支える各種団体や地域住民の協力を得て発信し続けている。コロナ禍のオンライン開催を経て、念願の対面形式となった 2023 年は、「認知症」「子ども・若者」「看取り」について夢をかなえるには、どんな“まち”であればいいか？当事者や活動団体の方々に語ってもらった。2024 年も同じテーマで更に内容を深め、展開した結果を報告する。

発表を終えて

矢野　弘枝（砧地域ご近所フォーラム 2025 実行委員会）

実行委員の代表として、発表はとても緊張しました。コロナ禍を経て、「砧は私たちの誇り」～地域でわかりあえる仲間を作ろう～をテーマに、「認知症：希望の木」、「子ども・若者：こどもまんなか」、「看取り：ともに生きる」の 2 年間の取り組み内容をお伝えすることができて良かったです。



2025 年の砧地域ご近所フォーラム 2025 では、防災について取り上げます。質問にもありましたが、良い取り組みを多くの方へ知っていただけるよう、取り組み内容の周知方法を検討していきたいと思います。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

地域福祉ならではの認知症、子ども・若者、看取り（ACP）など、分野横断的な取り組みでした。

上から目線のトップダウン式の地域づくりではなく、地域福祉を進めるうえで重要である住民・当事者の視点に立った地域づくりのプロセスがしっかりと行われている大変魅力的な取り組みでした。

ご近所フォーラムという多様性を包含したチーム力が砧にはあり、素晴らしいと思いました。

2025 年に向けては、「防災」を視野に入れた地域づくりを目指していただけるということで、大変楽しみにしております。

太子堂アクションチームの取組みと地域の方々の想い

－つながろう！支え合おう！太子堂アクションチーム－

アクションメンバー（地域住民）
萩原 光雄、谷山 二朗、市村 秀雄

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター
土屋 明之

（地域づくり　認知症　地域住民）

目的

2020 年 10 月　世田谷区は自治体独自に「認知症とともに生きる希望条例」を施行し、認知症の方が自分らしく希望を持って暮らし続けられるよう、各地区にアクションチームの創設をはじめた。太子堂では、コロナ禍に区民の発案からはじまった、まちの小さな居場所である「青空ラジオ体操」に集う有志に「太子堂アクションチーム」の創設を投げかけ活動がスタートした。

発表を終えて

土屋　明之（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
太子堂地域包括支援センター）

太子堂地域包括支援センターは、今までもせたがや福祉区民学会で取り組みを発表してきましたが、地域住民の方と共に壇上に立つのは今回が初めてでした。

共に発表してくださった方々は「地域住民」という一つの属性で表現できてしまいますが、当然のことながら日々考えていることや、想いは一人ひとり異なります。話を聞かなければそれを知ることはできません。発表に向けて登壇者や、インタビュー映像に応じて下さった方の想いを聞くことができ、その一端を知ることが出来たのではないかと考えています。



これからもお互いの想いを語り合いながら、認知症になっても安心して暮らせるまちの実現に向けて活動を続けていきます。

助言者コメント

荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

認知症支援の先駆的都市である世田谷区を象徴する取り組みだと思いました。

住民の方が登壇し、対話的な発表スタイルも、まさに顔が見える住民参画の取り組みだと思います。誰もが知っている参加しやすいラジオ体操が住民参加の入り口になって、地域アクションを起こし、数人から大勢に繋がりが広がっているのは、地域福祉活動のヒントをいただいたように思います。

住民の皆さんが、“やらなければならないからやる”ではなく、“楽しみながら活動を展開していること”が大変素晴らしいと思いました。

世田谷区における世代間交流について

－ソーシャルワークプロジェクト活動を通して－

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年

石塚 那奈、井上 真琴、中野 環、西川 真央、村尾 ほのか

（世代間交流　高齢者　子ども）

目的

私たちは、地域の高齢者や子どもと関わり、近年少なくなっている地域内での横のつながりを深める、地域活動を知るということを目的としている。活動先の T 施設は、「他人の孫も自分の孫も地域の孫」をコンセプトにしており、高齢者の力を子育てに役立て、子どもの力が高齢者の生きがいにつなげられる、集う場所になることを願って設立された。このような理念に共感し、私たちが取り組みたい世代間交流の内容が合致したため、T 施設を活動先とし選定した。私たちは活動を通して、世田谷区における世代間交流の現状を知りたい。また、実際の活動を通して学びを深めたい。

発表を終えて　　井上　真琴（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　１年）

発表後に「どうしたら若い世代の人に世代間交流を知ってもらえるか」というご質問をいただき、福祉に従事している方も関心があるということを実感した。



私たちは、まず、若い世代の人に世代間交流の場があることの認知を広めることが大切だと考えた。現在は、T 施設にて実施する予定のクリスマス会に向けて、活動先近隣の保育所などでポスターの掲示やチラシ配布を行って参加者募集の告知を行っている。

今回のご意見をもとに、SNS の活用も視野にいれて、インターネット上での宣伝にも力を入れていきたいと考えている。

助言者コメント　　荒井　浩道（駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授）
山本　学　（世田谷区社会福祉協議会連携推進課長）

世代間交流が大切というのは多くの皆さんが感じていると思いますが、交流を促進させていくことは難しく課題があるなかで、昭和女子大学のソーシャルワークプロジェクトとして取り組まれました。理論的な学びはもちろん、実践行動の中から知見を得ていくことは、大切な学びであると感じました。考察でも触れていますが、支援をするというよりは、一緒に活動や行動を共にすることに意味を見出しており、優れたソーシャルワーク的な取り組みだと思います。

今後の課題として子どもの参加を増やしていくことも、実践的に考えていくことが学びになると思います。







口頭発表　第３分科会

【本館３階　３０１教室】

進行役・助言者

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）

伊藤　美和子　（玉川総合支所保健福祉課長）

	発表者	所属	タイトル
1	奥貫　妃文 小野　蘭奈 風見　玲奈 岡田　萌子 周藤　真帆 竹内　心亜 塚田　美玖 東島　榛華	昭和女子大学 人間社会学部福祉社会学科 奥貫ゼミ ３年	世田谷で“借りる”福祉を探る －若年女性に焦点をあてて－
2	三浦　和子 小山　美紀	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	奥沢の縁側 －奥沢で考える多世代のつながりの形－
3	上山　愛梨 菊池　紅音 富田　愛菜 星野　竜馬	東京都市大学 人間科学部児童学科 ３年 教育人間学研究室	大学生のよこの人間関係から見た自己の多様性
4	斉藤　由子	社会福祉法人せたがや樫の木会 世田谷区立千歳台福祉園	知的障害のある方との関わりから －日々のエピソードを通して－
5	磯ヶ谷　莉華 関　愛乃 三條　いぶき 小林　蒼空	東京都市大学 人間科学部児童学科 ３年 教育人間学研究室	大学生のたての人間関係から見た自己の多様性
6	吉川　麻美 渡邊　圭子	NPO 法人せたがや子育てネット ぶんぶくテラマチ	居場所の可能性 －仲間のチカラ－
7	桑江　通友 水足　優一 鬼島　勇太	株式会社イーエス文理 EN unity 社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホーム フォーライフ桃郷	対応力が鍵を握る！ －外国人労働者との共働における支援の重要性－

進行役・助言者



奥貫　妃文

（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）



伊藤　美和子

（玉川総合支所保健福祉課長）

世田谷で“借りる”福祉を探る

ー若年女性に焦点をあててー

昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　奥貫ゼミ　３年
奥貫 妃文（教員）、小野 蘭奈、風見 玲奈、岡田 萌子
周藤 真帆、竹内 心亜、塚田 美玖、東島 榛華

（若年女性　社会的孤立　貧困）

目的

私たちは福祉社会学科に所属し、平素は法学を専門とする奥貫 妃文教授のゼミナールで、主に社会福祉制度における諸問題を、法学的な視点から考察している。今回、とりわけ社会福祉制度の対象となりにくい「若年女性」に焦点をあて、世田谷区において、若年女性が様々な困難に直面した時に、いかなる福祉的支援を「借りる」ことができるのか、多角的にリサーチを試みることとした。

発表を終えて

奥貫　妃文（教員）、小野　蘭奈、風見　玲奈、岡田　萌子
周藤　真帆、竹内　心亜、塚田　美玖、東島　榛華
（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科　奥貫ゼミ　３年）

大変、緊張しましたが、無事に発表を終えて安心するとともに、大きな達成感を感じました。私たちは社会福祉を法学的に考察するゼミに所属しており、当初は今年から施行された「女性支援新法」の制定の経緯や法の趣旨について学んだうえで、世田谷区でどのような事業が制度化されているのかをリサーチすることが研究の主な目的でした。研究を進める中で、私たちと同じ若年女性に向けた支援に関心の軸が移っていきました。世田谷区では、2015 年から若年女性を対象としたフリースペース「あいりす」が運営されていることを知り、その先端性と重要性を改めて確認することができました。



若年女性が物理的にも精神的にも気軽に「借りる」ことができる支援の在り方について、今後も研究を継続していきたいと思っています。

助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

本年４月にいわゆる「女性支援新法」が施行されたことを踏まえ、世田谷区における女性支援策等について、若年女性に焦点を当てて調査されたことは、タイムリーな取り組みであり、福祉的支援を「受ける」のではなく「借りる」とした点について、非常に興味深く発表を聞かせていただきました。

また、調査結果から、必要としている支援策が「居場所」等であること、さまざまな支援策の周知が不十分であることなど課題も見えてきていることから、引き続き、少しでも課題が解決されるよう、地域の方々や活動団体等とともに取り組んでいただくことを期待しています。

奥沢の縁側

－奥沢で考える多世代のつながりの形－

社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター

三浦 和子、小山 美紀

（多世代　憩いの場所　共生社会）

目的

奥沢地域は、戦後、海軍関係者が移り住んだ海軍村時代から続く地域のつながりが強く地域のことは地域で行う住民力が特色として挙げられる。時代の移り変わりとともに、“近所づきあい”の場が減り、「隣に越してきた新しい住民の顔もわからない」「子供の声がうるさい」など、特に世代間の距離を懸念する相談が続いた。まずは、緊密でないゆるやかな交流の創出が解決の一助になると考え、誰でも気軽に立ち寄れる居場所“縁側”をイメージした憩いの場としての講座を企画した。

発表を終えて

三浦　和子、小山　美紀（社会福祉法人奉優会
奥沢地域包括支援センター）

学生の皆様と同じ部会で発表できたことが、貴重な体験となりました。世代は違えど、ちょっと立ち寄り気軽に話のできる「居場所」の需要は共通であることを実感しました。

地域のつながりを作ることは、世代間の理解を深め、相互に好影響を与え、また、災害時の助け合いにも重要な役割を担うと考えます。

高齢者の相談窓口として、多世代とつながる“縁側”の実践を積み重ねてまいります。



助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

高齢者や障害者、子育て中の方々等から「居場所」がほしいという声をよく耳にしますが、「居場所」を「誰もが気軽に立ち寄れる憩いの場」とするためには、運営に工夫が必要です。

今回の発表は、「奥沢」という「地域のつながりが強い」地域で、はじめは法人が主体となってヒアリングを行い、学校や活動団体等、企画の賛同者を得て、「音楽」を共通媒体として多世代の方々が参加できる「オクサワ音楽交流会」を開催したこと、そして再演されるなど、大きな広がりとなったことが素晴らしいと感じました。

是非、今後も地域の方々と継続して活動を広げていただければと思います。

大学生のよこの人間関係から見た自己の多様性

東京都市大学人間科学部児童学科　３年　教育人間学研究室
上山 愛梨、菊池 紅音、富田 愛菜、星野 竜馬

（自分らしさ　自己　よこの人間関係）

はじめに

私たちは、様々な人と関わる中で無意識のうちに自己を使い分けているということに興味を持ち、研究発表をしようと思いました。インタビューを通して、大学生の友人関係、クラスの人、好意を寄せている人から、第一印象はどう思われているのか、それぞれの理由やエピソードを交えて調査しました。

このデータからそれぞれの自己の多様性について検討しました。

発表を終えて

星野　竜馬（東京都市大学人間科学部児童学科　３年
教育人間学研究室）

今回の研究発表は、自己の多様性について深く考える貴重な機会となりました。研究を始めるまでは、自分が状況や相手に応じて異なる自己を使い分けていることに無自覚でしたが、調査を重ねる中で、さまざまな自己の在り方が存在することを学びました。

さらに、自分自身の自己の使い分けにも関心を持つようになりました。また、今回の研究では大学生を対象にしましたが、子どもや高齢者といった異なる世代の自己の使い分けにも関心が広がり、今後はターゲットを広げた研究を行いたいと感じています。

この学びを活かし、多様な視点での調査に取り組んでいきたいです。



助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

「多様性」については、さまざまな領域で取り上げられていますが、「自己の多様性」「自己の使い分け」という視点で考えたことがなかったため、非常に興味深い内容でした。

福祉の現場においては、さまざまな困難を抱えている人を理解することが必要です。こうした新たな視点を持つことは、いろいろな方々の理解を深めていくことにも繋がるのではないかと考えさせられた発表でした。

今後の取り組みなど、また、発表いただけることを期待しています。

知的障害のある方との関わりから

－日々のエピソードを通して－

社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園

斉藤 由子

（障害理解　肯定的な捉え　関係発達）

はじめに

千歳台福祉園は、18 歳以上の主に重度の知的障害のある方が通う生活介護事業所で、作業やウォーキング、機能訓練、音楽や創作、調理やレクリエーション等、毎日様々な活動を通して、皆さんが自分らしく力を発揮し、充実した生活を送れることを目指している。同時に、障害のある方もない方も、様々な人が当たり前に共に暮らす社会の実現のため、事業所や利用者のことを知ってもらうことも、自分たちの役割と捉えている。発表者はこの４月、当事業所に異動となり、新たな利用者との出会いの機会を得た。新たな出会いの中には、障害のある方を知らない方にも、障害のある方を理解していくための多くの示唆があるように感じた。今回の出会いの中で感じたことを３つのエピソードにまとめ、考察する。

発表を終えて

斉藤　由子（社会福祉法人せたがや樫の木会
世田谷区立千歳台福祉園）

地域の中で、障害のある方への理解や肯定的な見方が浸透していくためには、まずは『知ってもらう』ことの大切さを感じ、知的障害のある方の支援に携わるものとして、様々な形で地域への発信を続けている。今回は、新たな出会いから感じた、障害のある方と接する際に大事にしたい視点を紹介させていただき、学生の方々にも聞いていただけ嬉しく感じた。



また、助言者の先生からの温かな感想や、筆者の意図を汲んでいただいての補足により、発表を分かりやすく、深みのあるものにしていただけて、本当にありがたく、大変、励まされる思いがした。障害のある方の魅力を発信していけるよう、日々研鑽を積みたいと思う。

助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

発表者が勤務する、重度知的障害のある方が通う生活介護事業所での日常のエピソード、そして、その中で感じた様々な思いが丁寧に語られ、思わず話に引き込まれました。3 人の利用者のエピソードが紹介されましたが、発表者が抱えていた戸惑いや迷い、思い込みなどが、利用者との関わりのなかで徐々に溶けていくプロセスも手に取るように分かりました。発表者は、普段あまり障害のある方と関わることのない他の人々にも広く事業所の中でのエピソードを話し、障害のある方の実像を知っていただくことで、少しでも偏見や誤解、不安の解消につながれば…と話しておられました。

今後もぜひ継続していただきたいと思います。

大学生のたての人間関係から見た自己の多様性

東京都市大学人間科学部児童学科　３年　教育人間学研究室
磯ヶ谷 莉華、関 愛乃、三條 いぶき、小林 蒼空

（自分らしさ　自己　たての人間関係）

はじめに

私たちは様々な人と関わる中で無意識のうちに自己を使い分けていることに興味を持ちました。「保護者、親」「兄弟、姉妹」「部活、サークルの先輩」「部活、サークルの後輩」「アルバイト先の人」から見た自分の印象について大学生を対象にインタビューをしました。インタビューで聞いた内容を分析し、縦の人間関係に基づいた自己の多様性について明らかにしました。

発表を終えて

磯ヶ谷　莉華（東京都市大学人間科学部児童学科　３年
教育人間学研究室）

今回は、この様な発表の機会をいただきありがとうございました。

助言者の方から平野啓一郎さんの書いた『私とは何か』という本の内容と私たちの発表した内容が同じだと教えていただき、とても驚き、興味を持ちました。



複数の自己のすべてを自分と捉える「分人主義」という考え方の大切さを改めて感じることができました。

今回は大学生のみを対象としましたが、親やきょうだいなど幅広い人を対象に研究を行ってみたいと思いました。

助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

着眼点がユニークで、かつ、大学生にとってきわめて身近でリアルなテーマを設定されたと感心しました。今回のテーマである「自己の中の多様性」については、小説家の平野啓一郎氏が追求されている「分人主義」に通じるものだと思いながら発表を聞いていました。今回は、学生へのインタビューのみでしたが、今度は、縦の関係を築いている相手へのインタビューを行い、「答え合わせ」をしてみてはいかがでしょうか。

ぜひとも継続的にこのテーマを深めていただければと願っています。

居場所の可能性

ー仲間のチカラー

NPO 法人せたがや子育てネット　ぶんぶくテラマチ
吉川 麻美、渡邊 圭子

（仲間との出会い　チャレンジ　誰かのために）

目的

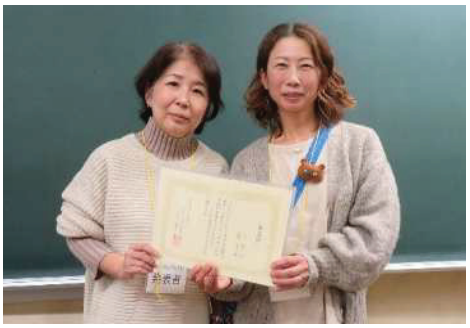
（背景）地域共生社会「居場所づくり」孤立孤独防止が求められている。
シニアの方々が外に出るきっかけをつくり、自分の力を発揮する場の提供。
地域住民を巻き込んだ多世代交流をめざす。

発表を終えて

吉川　麻美、渡邊　圭子
（NPO 法人せたがや子育てネット　ぶんぶくテラマチ）

今回は「居場所の可能性～仲間のチカラ～」というテーマで、ぶんぶくテラマチの１年半の実践を発表しました。

発表後に「新しい方が心地よく過ごせること、多様な方たちがゆるくつながることは、どの居場所でも課題となるところだと思う」と、ご意見をいただきました。いろいろな方たちに来てもらえるよう、「ぶんぶく」の看板の前でチラシを見ている方に引き続き声をかけたり、プログラムを工夫したり、皆さんが「ぶんぶく」で心地よく過ごせるような雰囲気を、来ている方と一緒につくっていけたらと思います。



助言者コメント

奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

本報告は 2023 年 6 月に北烏山の寺町通り区民集会所にオープンした「ぶんぶくテラマチ」の活動内容の紹介でした。「ぶんぶくテラマチ」とは、地域のシニアの方たちが気軽に訪れ、お茶が飲めたり、おしゃべりをしたりと、活動を敢えて限定せず、その人らしく好きなように過ごすことができる空間であることが、報告からよく伝わってきました。また、シニアの人たちのみならず、子育て世代や子どもなど多世代とのふれあいを大切にしているということも大きな特徴の一つであることも分かりました。

報告者がとても楽しそうに報告をされていたのが印象に残っています。その様子から「ぶんぶくテラマチ」はきっと素敵な場所なんだろうな、行ってみたいな、と想像がふくらみました。

対応力が鍵を握る！

ー外国人労働者との共働における支援の重要性ー

株式会社イーエス文理EN　unity
桑江 通友、水足 優一
社会福祉法人寿心会　特別養護老人ホームフォーライフ桃郷
鬼島 勇太

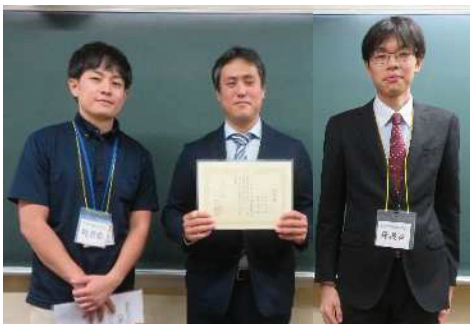
（特定技能外国人人材　登録支援機関　トラブル事例）

目的

介護業界では人手不足が続き、2025 年には約 32 万人が不足すると予測されている。日本人だけでは補えない現実から、外国人労働者の雇用が必要といわれている。しかし、世田谷区では 75%の法人や施設が外国人を雇用していない。この原因を探り、事例発表を通じて外国人雇用を促進し、人手不足を解消するための一つの答えを提示したい。

発表を終えて　　桑江　通友（株式会社イーエス文理 EN　unity）

世田谷区では、まだ多くの介護施設が外国人雇用をしていない状況にあります。日本人職員を雇用したいという気持ちもわかりますが、不足している人数を補えるほどの人数がいないのが現状です。



一歩を踏み出せていない介護施設に「外国人介護職もいいかもしれない」と今回の発表を聞いて思っていただけることを願っています。

我々支援機関は介護職の頭数を揃えるのではなく、日本で長く働ける介護のプロを一緒に育てていきたいと考えています。そんな思いが届いていたら幸いです。

まだまだ、外国人雇用に関する認知が十分ではないと感じています。機会をいただければ、また参加したいと思います。

助言者コメント　　奥貫　妃文　（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授）
伊藤　美和子（玉川総合支所保健福祉課長）

近年、特定技能外国人の採用が年々増加しており、特に慢性的な人手不足状態にある介護の現場における特定技能外国人は、いっそう求められている存在であることがよく伝わりました。しかし、言語や慣習の異なる外国人と共に働くということは、数々の困難や障壁があるということも理解できました。本発表では、介護現場で労使双方が安心して良好な環境で働くことができるために様々なアイディアを出し、果敢に取り組んでいる様子がクリアに述べられ、現在の介護の現場がどうなっているのか、イメージをつかむことができました。

今後、全国の介護現場で共通の課題になることが必至のテーマであるので、広く今回の発表の成果を共有していただければと思います。







口頭発表　第４分科会

【本館３階　３０２教室】

進行役・助言者

石井　りな　（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）

髙橋　裕子　（玉川総合支所健康づくり課長）

	発表者	所属	タイトル
1	小林　真介 磯﨑　寿之	世田谷区介護サービス ネットワーク 北沢地域部会・世田谷地域部会	地域活動でつながる、専門性の輪 －介護事業者団体の地域活動の在り方－
2	佐賀　勝之 星　友梨 落合　美夏 濱邊　祐一 寺尾　洋介 藤原　ふさ子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	特養入居者へのチームによる スタンダードケア継続に関する実践報告
3	石田　和大 和泉　拓 鍵谷　太郎 落合　美夏	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム	働きやすい職場づくりへの取り組み －抱え上げない介護と職員の心身を守る取り組み－
4	村上　桂樺	医療法人プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町	当看護小規模多機能型居宅介護の利用終了の分析 －この１年を振り返る－
5	石野　郁花	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム鎌田	楽しい生活を！！ －自立支援のためのモンテッソーリケア－
6	渡邊　博子	社会福祉法人南東北福祉事業団 東京リハビリテーション センター世田谷 相談支援事業所相談室こうめ	親子を支える関係機関間ネットワーク －発達障がいの子どもを持つ精神疾患のある母親への相談対応事例－
7	竹内　洋子 渡辺　三恵子 和仁　智子 白石　哲也	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	最期まで口から食べるために！専門職による「もぐもぐチーム」の活動報告

進行役・助言者



石井　りな
（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）



髙橋　裕子
（玉川総合支所健康づくり課長）

地域でつながる、専門性の輪

－介護事業者団体の地域活動の在り方－

世田谷区介護サービスネットワーク　北沢地域部会・世田谷地域部会
小林 真介、磯﨑 寿之

（社会福祉活動　介護事業者団体　共助体制作り）

目的

世田谷区介護サービスネットワークはコロナ禍で、これまでの地域活動に及ぶあらゆる団体活動が停止しました。しかし、令和５年、再開しだした中で、真っ先に地域連携を考え直し、各地域部会活動に注力しました。そして事業者としてどのように共助に携わるか。地域活動が何を生み出せるかを再考し、団体として、その輪につながるということを考えました。

エッセンシャルワーカーとは何かをお伝えしたい。地域協働を進めたいという想いです。

発表を終えて

小林　真介、磯﨑　寿之（世田谷区介護サービスネットワーク
北沢地域部会・世田谷地域部会）

事業者団体が地域活動をどう取り組み、協働していくのか。エッセンシャルワークの実践から、「誰もが何かのプロを！区民を含めた専門職の集まりとしての意識をもって行動する。」率先した役割が地域部会での実践に通じています。そもそも、各職種が混在して協働を図るというのが部会活動、地域との共助を進めることです。

実践に勝るものはないと、地域社会の中に出ていく事から始め、専門分野の力を活かした活動を共同作業の中で発揮した。

結果、エッセンシャルワークの専門性を理解し、団体としての在り様も共有する事となりました。

少しでも伝わったのなら幸いです。更に団体を通した地域社会との関係つくりに邁進すべきと感じる機会でした。

来年も是非、報告を続けられたらと思います。



助言者コメント

石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

行政の取り組みにおいても、コロナ禍を経て、地域のつながりや支援のネットワークをもう一度編み直すことが必要になっていますが、約４年のブランクの間に、元々あった活動を知らない若い世代の職員が増え、伝承や継承が課題となっています。

貴団体の発表では、地に足のついた地域連携に一つひとつ着実に取り組んでいる様子が理解できました。

活動の輪が改めて広がっていくことを期待しています。

特養入居者へのチームによるスタンダードケア継続に関する実践報告

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム上北沢ホーム
佐賀 勝之、星 友梨、落合 美夏、濱邊 祐一
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
寺尾 洋介
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　地域密着型特別養護老人ホーム寿満ホームかみきたざわ
藤原 ふさ子

（特養　スタンダードケア　苦痛緩和）

目的

世田谷区社会福祉事業団では、科学的介護の構築を目指し、日々実践に取り組んでいる。上北沢ホームでも、特養スタンダードというケア基準に沿ってケアを実践している。令和４年度にホームでコロナクラスターが発生したが、その中でも、利用者Ａ氏に対して、特養スタンダードに沿ったケアを提供し、苦痛を緩和できるように努めた。今回、Ａ氏へのスタンダードケアの実践を振り返り、今後のケア実践への示唆を得ることを目的として、本報告を行う。

発表を終えて

佐賀　勝之（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム上北沢ホーム）
寺尾　洋介（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム）

２年前に上北沢ホームで起きたコロナクラスターの時の実践を昨日のように思い出します。非常事態の中で、何とか利用者にスタンダードケアを届けようと、必死になって取り組んでいたように思います。

「非常事態の中でチームでの意思決定はどのようにしているのか」と質問を頂きました。改めて、非常事態時でもチームで通常ケアをどのように提供したらよいか、介護・看護等多職種で検討を続けながらケアを実践していきたいと思いました。



今後もコロナ感染症等、感染症下でのケアは続くと思いますが、引き続き、スタンダードケアを提供できるようチームでケアする力を高めていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

貴施設では、「生きる力 ７つの項目」を掲げ、共通の理念のもと、各項目に沿ったスタンダードケアを確立されています。今回、新型コロナウイルスに罹患したＡ様の状況を日々観察・記録し、「生きる力」という共通理念に沿って、離床の機会を設け、ご本人の苦痛を取り除くため、多職種で検討・話し合いを重ねながら 42 日間という長い期間取り組まれた結果、Ａ様は回復に向かわれたという素晴らしい事例でした。

今回の事例を、ぜひ他ご利用者のケアや職員間にも展開され、貴施設のスタンダードケアがより浸透し、チーム力がさらに向上されていくことを期待しています。

働きやすい職場づくりへの取り組み

－抱え上げない介護と職員の心身を守る取り組み－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム上北沢ホーム

石田 和大、和泉 拓、鍵谷 太郎、落合 美夏

（腰痛予防　ノーリフティングケア）

目的

良いサービスを提供するためには、働いている職員が「働きやすい職場」だと感じて仕事ができることが重要である。「働きやすい職場」を実現するために、「職員の腰痛予防」と「職員の心身を守る取り組み」を実践した。

発表を終えて

落合　美夏（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム上北沢ホーム）

発表を終えて、「職員の腰痛予防」と「利用者からのハラスメント対策」は介護現場において、重要な課題であると改めて感じました。

「腰痛予防」においては頂いた質問から、福祉用具の導入に課題がある施設もまだまだあると感じました。「ハラスメント」についても言えることですが、「労働安全衛生」の考え方が浸透し、実際に現場で働く職員の心身を守る取り組みが、業界全体に定着するよう、私たちのホームでもこれからも取り組んでいきたいと思います。



そして「より良い環境」で「より良いケアを提供する」ことにより、介護という仕事が、持続可能で魅力的な仕事となるよう、私たち現場職員も努めていきたいと思います。

助言者コメント

石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

ボディメカニクスに則った、身体介護の実践や介護職員の心身の安全を守ることは、単に介護職員を守るだけでなく、介護される側の安全や快適・満足にもつながり、働きやすさと暮らしやすさの環境づくりに資する取り組みといえます。

コロナ禍で、綿密な感染予防やベッドコントロールを必要とし、日々の業務が大変であった中、チーム全体で目的を共有し、組織的に取り組まれた点が素晴らしいと思います。

この取り組みで得られた財産を今後も継続していただくことを期待しています。

当看護小規模多機能型居宅介護の利用終了の分析

－この１年を振り返る－

医療法人プラタナス　ナースケア・リビング世田谷中町

村上 桂樺

（看護小規模多機能　在宅介護　家族支援）

目的

看護小規模多機能型居宅介護の直近１年間（2023 年９月～2024 年９月）の利用状況と利用終了の振り返りを行った。利用者がご自宅での生活が継続するために、当施設がどのような支援ができるか、利用の終了理由を分析し、検討することを目的とした。

発表を終えて　　村上　桂樺（医療法人プラタナス　ナースケア・リビング世田谷中町）

現状の制度では、終末期になり通所が困難になった時に、訪問入浴を利用したいといった場合に、看護小規模多機能型居宅介護（以下、看多機）は他の介護サービスを介護保険で併用できない。また、夜間時に吸引や医療行為が必要となった場合に、介護職だけでは十分なケアを提供できない。

結果的にこれまで利用されていた方の必要となるケアが、最期の生活において看多機だけでは提供できず、充足した医療行為が可能な施設又は居宅サービスに移行せざるをえないといった現状が発表後の質疑応答であった。一つの事業所だけでなく、多くのサービスと併用できるような制度になることが、より看多機が多くの方に使いやすいものになると考えられた。



助言者コメント　　石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

看多機は、介護保険制度の中では比較的新しいサービスで、今回の発表により、看多機についてより理解を深めることができ、現状まだまだ制度的な課題もあることを知ることができました。利用にあたっては、家族がいることが前提となるような仕組みとなっており、独居や老々介護の世帯では利用を継続することが難しいこと、病状の悪化等により、入院や他サービスにつなげた方が、再び在宅療養に戻ることはほとんどないという現状も知ることができました。医療的ケアが必要となっても住み慣れた自宅で過ごせるよう、今回のような学会発表や勉強会などを通じて、互いの事業や取り組みを学び、看多機を含む地域の様々なサービスとの連携がさらに図られていくことを期待しています。

楽しい生活を！！

－自立支援のためのモンテッソーリケアー

社会福祉法人奉優会　優っくりグループ鎌田

石野 郁花

（モンテッソーリ　自立支援　認知症）

目的

グループホームでの暮らしが、より豊かに充実するためのケアとしてモンテッソーリケアを取り入れ、今現在も日々継続している。誰もが自分の役割を持ち、利用者様主体の介護ができるようになっていくことを目標としている。

発表を終えて　　石野　郁花（社会福祉法人奉優会　優っくりグループ鎌田）

鎌田が続けてきたモンテッソーリケアについて、昨年は個別でアセスメントから実践までを行ったことを踏まえての反省を活かしての実践となりました。

まだまだ、長い目をみての継続が必要な取り組みのため、今後も職員を巻き込み一緒に実践をしていくこと、目的にあるように利用者様が主体となる環境に少しでも近づけていくこと、利用者様も長らくご自身で選択して行動することが、少なくなってきていることもあるため、利用者様にも説明をしていき、より利用者様一人ひとりがご自分らしく自由に生活していけること、当たり前の日常を目標にこれからも取り組んでいこうと思います。



助言者コメント　　石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

利用者主体のケアの実践は、どの介護事業所においても目指す必要がありますが、モンテッソーリケアのメソッドを取り入れて職員に研修し、事業所全体の方針として取り組んだ点は非常に興味深いものがありました。

認知症の本人の意思を尊重し、本人の望む生活や人生を送ることを周囲が支援することは、介護の世界だけでなく国全体の理念でもあります。

本人本意の質の高い認知症ケアの実現に向け、今後も事業所を挙げて取り組んでいただくよう期待します。

親子を支える関係機関間ネットワーク

－発達障がいの子どもを持つ精神疾患のある母親への相談対応事例－

社会福祉法人南東北福祉事業団　東京リハビリテーションセンター世田谷
相談支援事業所相談室こうめ
渡邊 博子

（関係機関間連携　発達障がい　母親支援）

目的

発達障がいを抱える子ども達、その子どもを育てる保護者からの相談が増えている。特に、子どもが『年長』の時期は、「就学先」や「放課後の過ごし方」について悩んでいる事例が多い。この事例においては、相談支援事業所の相談支援専門員と保護者とのやりとりは普段より密に行われる。また、近年、自身も精神疾患を抱えている母親が、発達障がいのある子どもを育てている事例も増えてきている。

今回、ある事例を通して、必要な支援を導入していった手法について発表することで、類似事例の解決の一助となりたい。

発表を終えて

渡邊　博子（社会福祉法人南東北福祉事業団
東京リハビリテーションセンター世田谷
相談支援事業所相談室こうめ）

今回のせたがや福祉区民学会での発表は、「相談支援事業所 相談室こうめ」として初めての学会発表でした。相談支援事業所がどのような支援をしているのか、親子の支援とはどういうものかを発表を通して伝える場を頂くことができ、とても感謝しております。



質疑の中では、福祉に関わる職種の方ではなく、一般企業の方からのご質問を頂き、人を支える支援方法は福祉だけではなく、社会の中でも活かしていけるものであることを感じ、私自身も勉強になりました。

今後もケースの支援を通じて、子ども本人、保護者を支えていく専門職として、「相談して良かった」と言っていただける支援を提供できるように学びを深めていきたいと思いました。

助言者コメント

石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

今回の親子の相談支援をするにあたっての目標の１つ「支援者側がバーンアウトしないように」は、とても大切なことです。疾患によるものとは言え、強い言葉や態度で拒否されるなど、支援者側が疲弊してしまう可能性があります。

今回の取り組みの１つとして、ジェノグラム・エコマップを使った分析を行っていました。親子を取り巻く環境を可視化することで、課題を整理することができ、支援の方向性と行動計画、スタッフの役割を明確にすることができたという大変、参考になる事例でした。

今後も子どもの成長につれ、新たな課題が出てくることが予想されます。長期的なサポートが行えるよう、さらに関係機関とのネットワークを築きながら、支援の輪が広がることを期待しています。

最期まで口から食べるために！専門職による「もぐもぐチーム」の活動報告

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護課
竹内 洋子
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
渡辺 三恵子
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
和仁 智子、白石 哲也
（多職種協働　オーラルフレイル　経口摂取）

目的



最後まで口から食べることは多くの人の願いであり、人間の最も自然な摂理であり尊厳である。世田谷区社会福祉事業団の訪問看護課では、「最期まで口から食べる」ことを事業計画に掲げ、多職種の勉強会「もぐもぐチーム」を結成し、課を超えて活動することにより、在宅と施設のシームレスな質の高いケアを目指している。

発表を終えて

和仁　智子（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

咀嚼チェックガムは、口腔フレイルの早期発見に期待ができ、誰でも簡単に測定できる事が利点の一つです。噛むことは、舌の動きも大きく関与していることも、発表で伝えることができたと思います。

また、完全側臥位法は、会場からのご質問も複数あり、関心の高さが窺えます。利点として、体力が消耗しやすい方でも、ターミナルの方で口渇感のある方にも、安全に経口摂取ができる方法です。より多くの方に実践して欲しいと思います。



私たちは、どのような経口摂取の方法がその方にとって一番安全であるかを常に考えながら、「最期まで口から食べる」ことを叶えるために、今後も努力を惜しまず研鑽して参ります。

助言者コメント

石井　りな（社会福祉法人奉優会特養営業推進室）
髙橋　裕子（玉川総合支所健康づくり課長）

オーラルフレイルはフレイルドミノの入口であり、介護予防や重度化予防の視点として非常に重要であるとともに、最期まで口から食べることの実現も長年の課題となっています。

多職種での勉強会やケアの検討・協働、企業との協業により、口から食べることを科学的に検証し、課題解決に取り組むプロセスは、これまでの貴団体の取り組みが、また、一歩前進していることが感じられました。

今後も多くの区民が、この取り組みの恩恵を受けられることを期待しています。


発表者





口頭発表　第５分科会

【本館３階　３０３教室】

進行役・助言者

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）

加賀　里実　（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

	発表者	所属	タイトル
1	樋口　和樹 中尾　真美	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家	介護コンシェルジュ －楽しみを叶えるために－
2	塚越　典子	世田谷区介護サービス ネットワーク せたがや訪問介護連絡会	福祉の現場で働くみんなが元気になる！ 現場の声を形に！ －悪天候の訪問に負けない、訪問介護 ヘルパーが考えた自転車アイテム－
3	岩永　真祐 番本　鷹也 佐藤　由佳	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	職員定着、離職率ゼロへ向けての取り組みについて －新人職員の立場になって働きやすさを考える－
4	佐藤　大介 岡野谷　智子 中村　快	社会福祉法人大三島育徳会 特別養護老人ホーム博水の郷	コロナ禍での余暇支援の取り組み －コロナ禍でも入所者の楽しみは奪わない－
5	長谷川　裕和	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿	小規模多機能ホーム三宿の職員が語る 「介護職の魅力」
6	小澤　保菜美 天野　伊織 笹沼　祐希 若林　美空	日本大学文理学部 社会福祉学科	せたがやゼミナール（日大文理）でのプレイ学習及び多世代交流における取り組み
7	西尾　匠史 酒井　翔太 齋藤　翔太 小澤　悠花 小澤　保菜美	日本大学文理学部 社会福祉学科 （日大パレット）	日大パレットの魅力とは？！ －地域の皆さまの童心引き出します！！－

進行役・助言者



諏訪　徹
（日本大学文理学部社会福祉学科教授）



加賀　里実
（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

介護コンシェルジュ

―楽しみを叶えるために―

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家

樋口 和樹、中尾 真美

（個別ケア　自己実現　意欲向上）

目的

従来型特別養護老人ホームの中でご利用者様との主な関わりは介助（食事介助・排泄介助・入浴介助）と言われており、簡単なレクリエーションや傾聴などのケアが行き届かないところがありました。ご利用者様の要望、希望に応えられる環境をつくり、生活に潤いをもっていただくことで、介護職員のレベルアップにつなげることを目的としました。

発表を終えて　　樋口　和樹（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家）

今回、発表をさせていただき、改めて自分達の活動を振り返ると、まだまだやれることはたくさんあると感じさせられました。

もっとより多くのご入居者様に潤いのある生活を送っていただけるように、環境整備や職員の育成に努めていきたいと感じました。

また、外部を見ること、知ることでできるサービスの幅を広げていきたいと感じました。



助言者コメント　　諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

介護コンシェルジュは、皆がフロア単位でのシフト業務に入る従来型特養ホームにおいて、個別のニーズ・願いを実現するための大変ユニークな取り組みであると感じました。コンシェルジュとして各係との連絡調整業務や検討を行う中で、大きく成長するとともに、これまで個別ニーズを聞きながらもなかなか実現することが難しいと感じていた、居室担当職員のやりがいにもつながると想像します。

コンシェルジュを定着・発展させ、利用者の方々の願いの実現、職員の力量アップを続けていただきたいと思います。

福祉の現場で働くみんなが元気になる！現場の声を形に！

－悪天候の訪問に負けない、訪問介護ヘルパーが考えた自転車アイテム－

世田谷区介護サービスネットワーク　せたがや訪問介護連絡会
塚越 典子

（訪問介護ヘルパー　悪天候の訪問　自転車アイテム）

目的

訪問介護ヘルパーの人材不足問題。訪問介護ヘルパーがいなくなったら、在宅で生活をする高齢者や障がい者の生活を守れなくなる。同じ介護職の中でも訪問介護ヘルパーのなり手は少ない。なぜ訪問介護ヘルパーが増えないのか？増やすためにはどうしたら良いのか？という思いから、訪問介護ヘルパーが働く環境のひとつとして、悪天候でも自転車に乗って訪問先を回るという過酷な仕事に着目し、現役ヘルパーの声を集約し、自転車・バイク用品を企画開発している「大久保製作所」の協力を得て、雨の日の訪問時に訪問介護ヘルパーが使いやすい雨の日グッズを企画し、少しでも仕事がしやすい環境の提案に取り組んだ。

発表を終えて

塚越　典子（世田谷区介護サービスネットワーク
せたがや訪問介護連絡会）

訪問介護特有の労働環境のひとつ、悪天候の中でも自転車で訪問するスタイル。訪問介護ヘルパーさんたちがたいへんだと思っていることを少しでも改善できたらと始めた、今回の自転車アイテムの企画～製品完成までのお話をさせていただきました。

伝えたいことがたくさんあって時間が足りなくなってしまい、最後はかけ足になってしまったのが残念でした。

現在の訪問介護の現場は、ヘルパー不足に加えて報酬の引き下げ等散々な状況ですが、訪問介護連絡会では、今後もヘルパーさんたちが仕事がしやすく、より質の高い介護ができるように、現場の声を聞きながら世田谷区らしい活動をしていきたいと思いました。



助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

坂道の多い世田谷区内をヘルパーさんが 24 時間・365 日、まさに「アメニモマケズ、カゼニモマケズ」自転車で走り回ることで、一人ひとりの在宅生活を支えているということが実感でき、深く心を動かされました。そのヘルパーさんたちの困りごとを受け止め、悪天候対策としてヘルパーさんや事業所がそれぞれ行ってきた創意工夫や知恵を拾い上げ、企業とコラボして製品開発につなげていった連絡会の活動もお見事です。

このヘルパーさんたちの頑張りを、多くの区民の方々にも知っていただきたいと思います。

職員定着、離職率ゼロへ向けての取り組みについて

－新人職員の立場になって働きやすさを考える－

社会福祉法人大三島育徳会　特別養護老人ホーム博水の郷

岩永 真祐、番本 鷹也、佐藤 由佳

（キャリアアップ　エルダー制度　人材確保）

目的

介護職員の不足は、大きな課題となっている。介護労働実態調査による離職の理由の上位には「ライフイベントや体調不良等の職員の個人的な事情のため」「同僚や上司との人間関係・雰囲気が良好でなかった」「キャリアアップの機会が乏しい」等の理由があった。また、入職してから３年未満の職員の離職が全体の３分の２を占める調査結果も出ている。特別養護老人ホーム博水の郷でも、新人職員が入職し、３年未満で退職してしまい、新たに職員を雇用し０から教育し直すといったケースが毎年のように生じていた。新人職員を定着させ、離職率の低下を目指すために、働きやすい職場環境の構築やキャリアアップのサポート体制強化に着目し取り組んだ。

発表を終えて

岩永　真祐（社会福祉法人大三島育徳会
特別養護老人ホーム博水の郷）

今回の発表を聞いていただいた参加者の方から、「エルダーという教育担当の職務についてこれだけ深堀りした発表は聞いたことがなかったので勉強になりました」という声をいただきました。色々と試行錯誤を繰り返してきて、結果的にこういった評価をいただいたことは私たちとしてもとても励みになりました。また、「新人職員を教育するエルダー職員自体の教育はしているのか」という質問がありました。専門的な技術の教育は明確には行っていなかったため、今後エルダー職員対象に研修を取り入れるなど検討していきたいと思います。

この度このような発表の機会をいただき、自分自身も大変勉強になりました。

この場を借りて御礼申し上げます。



助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

体系的な研修、資格取得支援策、職員定着支援の取り組みの蓄積を踏まえ、さらにこれに対する職員の評価をアンケート調査を通じて明らかにし、その強みをさらに意識的に強化することで離職率０を実現した、非常に優れた実践であると感じました。

とりわけコロナ対応で現場が疲弊しかねないこの３年間に離職率を低減させてきたことは驚異的であり、実践の大きな効果を立証しています。

これからも、エルダー制度を成熟させることで、様々な教育歴・就業動機を持つ新人職員の育成・定着だけでなく、エルダーとなったリーダー候補生の育成を続けていっていただくとともに、区内の他施設にも発信し、広げていただきたいと思います。

コロナ禍での余暇支援の取り組み

ーコロナ禍でも入所者の楽しみは奪わないー

社会福祉法人大三島育徳会　特別養護老人ホーム博水の郷

佐藤 大介、岡野谷 智子、中村 快

（生活の質　地域との共生）

目的

2019 年 12 月初旬より始まった新型コロナ感染症。当法人では、2020 年 4 月から本格的に感染対策を始めた。同年 11 月の社会的検査で 15 名の感染者が発生したが、拡大せず収束した。2021 年、対策を強化し、家族面会や行事を中止した結果、施設内感染者は 0 だった。しかし、利用者からは「何か楽しいことないの」「毎日同じでつまらない」との声が多くなった。「楽しみ」「社会生活」が制限されることにより、不満が増していった。利用者にとって感染対応と余暇支援はどちらも大切である。私たちは、コロナ禍でも生活の質の向上を確保し、余暇支援を持続・継続させ、充実させることを目的とした。

発表を終えて

佐藤　大介（社会福祉法人大三島育徳会
特別養護老人ホーム博水の郷）

今回の発表でいただいた質問の中に「コロナ禍で行事を開催することに不安はなかったのか」との意見がありました。確かに職員やご家族から不安の声は多く聞かれていました。しかし利用者の生活の質を守る観点から、話し合いや説明を重ね、また沢山のご協力の中で実施してきました。



今後、このような感染症が再度流行してしまった際に、どのように利用者の安全と楽しみを両立させていくのか。そのような視点で考えられるようになれたと感じています。

この度このような発表の機会をいただき、自分自身も大変勉強になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

入居者の方々の命を守るための感染対策のなかで制約されてしまった人と人との交流、日々の暮らしのなかの楽しみを、「楽しみは奪わない」という決意のもとで、職員が一丸となって、自分たちが今できることを模索し、創意工夫しながら余暇の充実を図った、すばらしい実践です。コロナ禍の期間に、コロナ前よりも行事の実施回数を増やしたことに、驚かされました。その懸命な取り組みが、入居者の方々にも伝わり、職員のチームとしての結束力を高めていき、大きな財産になったと考えます。

最も厳しい時期の経験・実績を新しい職員の方々にも語り継ぎ、職場の文化としてさらに発展させていただくことを期待します。

小規模多機能ホーム三宿の職員が語る「介護職の魅力」

社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
長谷川 裕和

（介護　魅力発信　やりがい）

目的

小規模多機能ホーム三宿は、2016 年に開設し、9 年目を迎えております。現在所属する介護職員は常勤・非常勤を含めて 16 名。介護職を目指す方、続ける方が減少傾向にある現在では、介護職員の募集をかけても、応募がほとんどありません。私たちは介護職員として「やりがい」「楽しさ」「喜び」を感じながら仕事をしている中で、世田谷区に暮らし、働く皆さんに、「介護職の魅力」をより多く発信し、今後のせたがやの未来に何か一つでも役立てたいと考えます。

発表を終えて

長谷川　裕和（社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿）

魅力を発信したいと決めてから、私たちのケアの現場を、わかりやすく伝えていきたいと思い、利用者様や、ご家族様の力を借りることによって、発表を聞いてくださった方に実際にその場に居るように感じてもらえたら良いなと思います。

なかなか、福祉の仕事は足を踏み入れにくいところもありますが、今回の発表を通して、ちょっとしたきっかけによって、これから共に働く人が増えたり、介護に一人で悩んでいる方が、相談してみようかなという架け橋になれたら嬉しいなと思います。



助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

介護は、できないことを支援するだけではなく、人として生きるために必要な人と人とのつながりの提供も担っており、人との関わりの中で得られる喜びや感動、自らの成長は、介護という職業の最大の魅力であると感じました。心を持った人が心を持った人へ行うぬくもりある介護の重要性を改めて感じ、介護という職に就いたものにしか分からない感動や学びがあるのだということを貴事業所の取り組みを通して知ることができました。

貴事業所の介護職員の皆さまが介護の魅力を十分に自覚して活き活きと働くことで、多くの人に感動や魅力を伝え広げていっていただけることを期待しております。

せたがやゼミナール（日大文理）でのプレイ学習及び多世代交流における取り組み

日本大学文理学部社会福祉学科
小澤 保菜美、天野 伊織、笹沼 祐希、若林 美空

（学習・生活支援　学生ボランティア　多世代交流）

目的

「せたがやゼミナール」は、世田谷区社会福祉協議会が主催の生活困窮家庭の児童・生徒に向けた学習・生活支援の取り組みである。私たちは学生ボランティアとして学習補助などに協力している。

参加する一部の子どもには、学習習慣の定着において、「学習開始までに時間がかかる」、「集中が続かない」、「学習に取り組めない」などの課題が見受けられた。そこで、学習の導入の仕方等を工夫し、少しでも学習に興味を持ってもらえるように「プレイ学習」を取り入れた。「プレイ学習」の特徴は、「遊ぶように学び、学びながら遊ぶ」である。

発表では、「プレイ学習」の実践と効果について報告する。

発表を終えて

小澤　保菜美、天野　伊織、笹沼　祐希、若林　美空
（日本大学文理学部社会福祉学科）

学習・生活支援の場で取り入れた「プレイ学習」の実践内容、その様子を中心に発表させていただきました。質疑応答・感想の時間に「自身の子どもの学習に取り入れることのできる実践内容はありますか？」との質問をいただきました。その際、万人受けするプレイ学習の教材を見つけることができておらず、上手くお答えできませんでした。「個別的」なプレイ学習を現在は行っていますが、いずれはどの子どもが取り組んでも興味・関心を持ってもらえるような内容を考えていけるようになりたいと思います。

そのために、一人ひとりと向きあうこと、興味・関心を子どもに持ってもらえる要素をより多く見つけ、活動に落とし込めるようにしたいと思います。



助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

学習習慣の定着に課題があるお子さんに対して、学びを楽しいものとして受け入れられるように「プレイ学習」を取り入れ、考察や分析、評価を個別に行い、更なる課題に対して取り組んでいる意欲と姿勢を感じた発表でした。この取り組みは、詰込み学習とは違い「学ぶ楽しさ」により、目の前の宿題や課題を解くだけではなく、“身につく学び”“学習への動機づけ”という学びに対する向き合い方の本質を教えていると思います。

ここで学んだ生徒さんが、学習だけでなくいろいろなことに興味を持って、自ら取り組むことが習慣化され、選択肢が広がる将来が期待できました。

この素晴らしい取り組みを継続しながら、広く伝えていって欲しいと心から思いました。

日大パレットの魅力とは？！

ー地域の皆さまの童心引き出します！！ー

日本大学文理学部社会福祉学科（日大パレット）
西尾 匠史、酒井 翔太、齋藤 翔太、小澤 悠花、小澤 保菜美

（地域福祉　学生ボランティア　地域活動）

目的

本サークルの魅力について考えたいと思ったことが発表のきっかけである。本サークルの活動内容は、新型コロナウイルスの影響を受け、大きく変化した。組織として、不安定な部分もあるが、強みについてもあるのではないかと考える。そこで、日大パレットの活動内容と、メンバーや地域の方からいただいた声を照らし合わせ、意義や魅力についてまとめたい。

また、学生ボランティアグループとして、本事例を発表することで、1つの組織のあり方を提示できれば良いと考えている。

発表を終えて

西尾　匠史、酒井　翔太、齋藤　翔太、小澤　悠花、小澤　保菜美
（日本大学文理学部社会福祉学科（日大パレット））

活動の変遷の様子と現在行っている活動、地域の方や所属メンバーの声を中心に発表させていただきました。質疑応答・感想の時間では、学生だからこそできる「突破力」に触れていただけ、私たちでは気づけなかった強みを見つけることができました。

現場や地域に登録をしている団体と比較をし、制約が少ないこと、まだまだ経験不足である「学生」だからこそ許されることがあるのではないかと思います。そのことを踏まえ、「思いついたら挑戦してみる！」を忘れず、今後も活動を継続させることができたら良いなと感じました。

貴重な機会をいただき、ありがとうございました。



助言者コメント

諏訪　徹　（日本大学文理学部社会福祉学科教授）
加賀　里実（世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会）

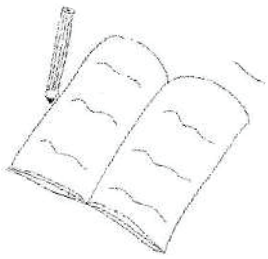
コロナ禍において学生生活も十分ではない中で、他者のことを思いやるボランティア活動を継続したモチベーションには純粋に頭が下がりました。高齢者施設でやっていた活動を地域に広げていくバイタリティや発想の転換や行動力は、学生ならではと思いながらも、根底に「相手に喜んでもらいたい」、「相手が喜んでいることが自らの喜びだ」と考えられる人間性はどのように育まれるのか知りたいとすら思いました。

いずれにせよ日大パレットの活動が多くの人の目に触れ、多くの高齢者の喜びに繋がっていくことを期待しております。









口頭発表　第６分科会

【本館１階　１０１教室】

進行役・助言者

大熊　由紀子　（国際医療福祉大学大学院教授）

徳永　宣行　　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

	発表者	所属	タイトル
1	竹林　深雪 本明　伸	社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所	ちくちくことば と ふわふわことば －SST のロールプレイングを通して－
2	金　恩珠 藏本　克昭 落合　里美	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻	「お手伝いを役割に・・・仕事のできる喜び」
3	髙橋　福太郎 後藤　秀男	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所	ケアマネジャーが考える高齢者のアルコール依存問題
4	大図　奈津子 西岡　弘子	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿	利用者の「個性」を大切にし、「今」の気持ちに寄り添う関わり －認知症対応型デイサービスの事例を通して－
5	内藤　麻里	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター	法人後見受任への挑戦 －福祉ニーズに対応した法人後見事業の実現－
6	石丸　拓也	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園	苦手な状況に向き合うための支援と取り組み
7	土田　直哉 寺田　祐太 渡邊　優香里	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム下馬の家	当たり前の生活を続けるためのユニットケア －ユニットケア実践事例－

進行役・助言者



大熊　由紀子
（国際医療福祉大学大学院教授）



徳永　宣行
（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

ちくちくことば と ふわふわことば

－SST のロールプレイングを通して－

社会福祉法人大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所

竹林 深雪、本明 伸

（一人ひとりに向きあった支援）

はじめに

普段はとても仲良しな A さん（男性・20 代）と B さん（男性・20 代）ですが、つい、A さんが B さんをからかったり、ちょっかいを出してしまうことがあります。

B さんが思うように相手をしてくれなかった時、自分を見てほしくて、A さんのちょっかいがエスカレートし、トラブルに発展してしまうことがありました。そこで、保護者や関係機関も同席して話し合いました。どうすればよかったのかを職員も一緒に考えて、SST のロールプレイングに取り組むことにしました。その取り組みについて発表します。(SST : ソーシャルスキルトレーニング・社会生活の訓練)

発表を終えて

竹林　深雪、本明　伸（社会福祉法人大三島育徳会
世田谷区立玉川福祉作業所）

初めての、せたがや福祉区民学会での口頭発表で、更に思っていた以上の多くの聴衆の方がいらっしゃり、緊張してあがってしまい、発表で伝えたい事が十分に伝わったか疑問でしたが、実際の SST の様子を動画で伝えた時の皆さんの反応が良かったので、言葉や写真だけで伝えるよりもやはり動画で伝える方が、より良く伝わるのだろうと実感しました。



助言者からのお言葉にあったように、「ちくちくことば」と「ふわふわことば」が自作業所に広まったのと同様に、他の施設にも広がって行けば嬉しく思います。また、他事業所、他職種の方の発表も大いに参考になり、業務に活かせるヒントを得ることができました。

今回、非常に有意義な時間を過ごせたことをお礼申し上げます。ありがとうございました。

助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

ご利用者間のコミュニケーションの問題が起こったときに、どのように対応していくか、悩むことはあると思います。

今回の事例では、ご本人同士のこれまでの関係性を把握したうえで、SST に取り組んだ興味深い内容でした。また、「ふわふわことば」「ちくちくことば」という絵本からのわかりやすい言葉の表現を使うことによって、直感的にイメージしやすくなっていると感じました。

今後は施設内だけでなく、さらに広がるといいと思います。

ご利用者制作のカレンダーや絵も素晴らしかったです。

「お手伝いを役割に・・・仕事のできる喜び」

社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻
金 恩珠、藏本 克昭、落合 里美

（自分らしさ　役割　仕事作り）

目的

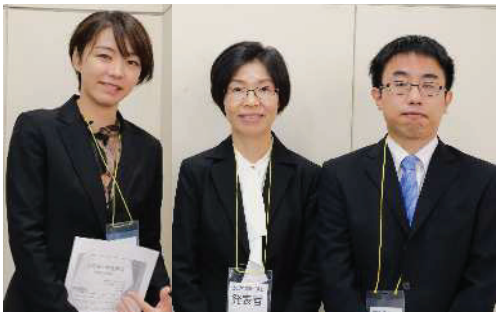
デイホーム利用者の通う目的は人それぞれ違う。入浴やリハビリ、プログラムへの参加、社会交流などがあるが、「介護＝お世話になる、お世話をされる」という認識が強い。これまでの生活歴、人生の中で、仕事をして、人の役に立ち、達成してきたことを現在は、披露することもなく過ごしている方も多くいる。まだまだ「やれる」「できる」「人の役に立ちたい」という気持ちを最大限尊重し、その人らしさ、役割の重要性を考え、支援することが今後のデイサービスに必要ではないかと考えた。

発表を終えて　　落合　里美（社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻）

今回の発表を終えて、今後の私たちの事業所の課題も浮き彫りになりました。

利用者にとって、「生きがいのある生活」、「活力のある高齢社会の創造」を生むことができるであろうという理想を掲げた今回の取り組みですが、昨今の介護士の不足や離職、定着率の低下等が懸念される中で、利用者一人ひとりのニーズに応えていく職員集団を形成する難しさも感じました。

今後の大きな課題として、利用者一人ひとりのニーズの発見やアセスメントと生きがい、仕事、役割などのテーマを大切に、支援者側の共有と理解、実践力の向上、また地域ボランティアの協力やその連携など、改めて大切なことに気づく機会となりました。次へ向けて、また利用者、地域と共に歩んでいける支援を目指したい、利用者の笑顔につなげたいと思います。



助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

認知症のご利用者の個別のニーズやこれまでの生活歴を把握することは、なかなか難しいことがあります。それでも今回の事例では、お一人おひとりに向き合って、その人らしさを引き出して支援に繋げる取り組みは、とてもよかったと思います。

「人の役に立つ」「感謝される」ということは人から必要とされている実感が生まれて、さらに意欲が生まれて喜びになると教えてもらえました。

声掛けのタイミングの工夫なども参考になりました。ご利用者の笑顔の写真が素敵でした。

ケアマネジャーが考える高齢者のアルコール依存問題

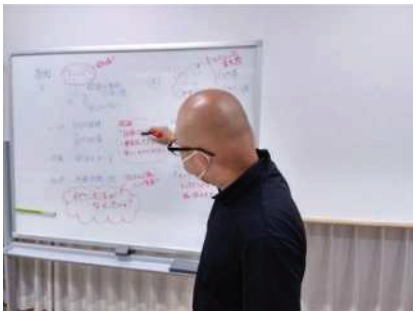
社会福祉法人奉優会　等々力の家居宅介護支援事業所
髙橋 福太郎、後藤 秀男

（高齢者　アルコール依存　ケアマネジャー）

目的

かつて「アルコール中毒」という呼称から近年「アルコール依存症」という名称に変わったが、少なくない方がアルコールの問題に苦しんでいる。当法人のケアマネジャーが担当している利用者様の中にも、アルコール依存と思われる方が増えてきた。

今回は、アルコール問題に苦しんでいた家庭の支援を通して考えたことを伝えたいという目的で発表したい。



発表を終えて

髙橋　福太郎（社会福祉法人奉優会
等々力の家居宅介護支援事業所）

今回の事例は、昨年法人内で発表した事例だったので、取り組みから少し時間が経過していたが、発表後たくさんのご質問をいただき、興味をもっていただけたので、大変嬉しく感じました。

特に内容が、うまくいったと感じた成功事例ではなかったので、今でもこれでよかったのかという葛藤を抱えています。アルコール依存の問題だけではなく、多くの困難事例はケアマネジャーが一人で考えて解決できることではないので、地域の関係機関との連携を強化しつつ、先生のご助言にもあったように、地域資源の発掘・開発にも力を入れていきたいと思います。



助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

アルコール依存症を病気としてとらえて、徐々に進行していくということを学ぶことができました。また、ご利用者の支援に繋げることの、大変さと重要性を知ることができた発表でした。印象的だったことは、心の穴を埋めるために飲酒が多くなってしまうこと、高齢者にとって飲酒が人生に大きく影響するということです。ご本人だけでなくご家族も苦しむことが多いとも分かりました。そして支援の難しさも事例を通して知ることができました。

今後もアルコール依存症の高齢者が増える可能性はあると思います。その時に、どのように支援することができるか、医療・介護その他、様々チームケアが必要不可欠だと感じました。

利用者の「個性」を大切にし、「今」の気持ちに寄り添う関わり

－認知症対応型デイサービスの事例を通して－

社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿

大図 奈津子、西岡 弘子

（その人らしさ　認知症ケア　在宅生活）

目的

高齢者人口の増加とともに、認知症高齢者の割合も増加している状況にある。デイホーム三宿の利用者（40 名）の平均介護度は 3.3 となり、認知症を主として、様々な疾患や心身の困難を抱え、支援や介護を必要とされている。その中でも生き生きと人生を過ごし、デイサービスを利用することでより自分らしさの追求、その取り組みや実践について事例を通して考える。

発表を終えて　　大図　奈津子（社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿）

自分の気持ちを上手く表現できない人たちの「今の気持ち」に寄り添う事が大切である事は理解していたが、アセスメントの取り方が、まだまだ足りない事や利用者の自宅での生活を支えていくには、まだまだ、やれることの工夫や支援の方法を考える必要があると痛感した。

デイサービスが、利用者さんの安心した居場所になり、生きがいをもって生活できるように、今後も支援を継続しながら、介護者も安心して過ごせるようにしていきたいと思いました。住み慣れた地域で高齢になっても、認知症を患っても「デイホーム三宿があるから安心」と言ってもらえるように、今後も支援を継続していきたいと思います。



助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

デイサービスを利用するご利用者の状況は、認知症状や疾病など様々であり、ニーズも多種多様になっていると思います。その中でも、ご本人の気持ちに寄り添うケアに、取り組んだ様子がよくわかる発表でした。

二つの事例発表でしたが、どちらにも共通していたのは「ご本人のことをよく知ろう」というスタッフの皆さんの姿勢です。それを感じることができました。ご利用者の個性に着目して、活き活きとした生活を支えるケアをチームで考えていることがよくわかりました。利用者の情報共有の工夫なども参考になりました。

法人後見受任への挑戦

－福祉ニーズに対応した法人後見事業の実現－

社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター

内藤 麻里

（法人後見　地域における公益的な取組）

目的

社会福祉法人奉優会は、当法人の活動の拠点となっている世田谷区で、社会福祉法人としての「地域における公益的な取り組み」そして、「法人後見の担い手の育成」この２つを目標として、法人後見事業をスタートしました。

本研究では、成年後見制度を取り巻く現状や法人後見事業の意義、当法人の受任に向けた取組経過のまとめを通して、法人が後見を受任することのメリットや社会的役割期待、今後の展望について考察します。

発表を終えて　　内藤　麻里（社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター）

今回の発表を通して、今まで取り組んできた経過のまとめや、改めて社会的な役割や意義の考察ができたこと、また、広く区内のみなさんに取り組みを知っていただけたことが良かったことと感じています。また、ご質問の中で、法人後見の事業にエールを送っていただけたことも嬉しく感じました。



今後、成年後見制度利用の必要な方がますます増えていく中で、社会貢献の一環として当事業を定着させていくとともに、この取り組みを通して、ソーシャルワーカーの育成にもつなげていきたいと考えています。

助言者コメント　　大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

少子高齢化などにより家族形態の変化が進んでいる中で、結果的に独居高齢者も多くなっていると感じます。判断の能力の低下があった場合に、ご本人の権利・尊厳を守る手段として成年後見制度は、非常に重要になっているのだと思いました。

今回の発表では、法人後見に取り組んだ経緯を分かりやすく説明してもらい、高齢者だけでなく障害を持った方々への支援など、さらに需要が多くなるだろうと思いました。同時に人材の育成についても期待しています。

苦手な状況に向き合うための支援と取り組み

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　おおらか学園
石丸 拓也

（生活基盤）

背景と目的

今回は、現在、おおらか学園に在籍しているＡさんへの取り組みについて発表します。

Ａさんは、特別な行事や健康診断など、慣れない出来事に参加する事に対して強い苦手意識を持っている方です。その中でも今回は、８月に行った健康診断での出来事を取り上げ、Ａさんが健康診断という苦手な状況に対し、向き合い参加出来ることを目標として支援を行いました。

発表を終えて

石丸　拓也（社会福祉法人嬉泉
子どもの生活研究所　おおらか学園）

今回、取り上げた事で、日々の中で流れてしまう事や、無意識に行っていることなどを改めて、言語化することで支援において大事な事や重点的に関わるべきポイントなど、整理する事ができました。

また、個々の利用者について配慮すべきことなど、定期的にアセスメントを行うことで利用者把握に努めるなど、今後の支援に取り組んでいきたいと感じました。



助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

様々な障害は、まだまだ社会的には理解されることが難しいと感じています。

今回の事例ではご本人の特性や気持ちを汲み取りながら、とても丁寧にご利用者に向き合っていることがよくわかる発表でした。

健康診断はご本人が苦手なことではあるけど、どうすれば少しでも前向きになれるか試行錯誤した経緯が目に浮かびました。マイナスイメージを払拭することができたのは、普段からの関わりの中で信頼関係ができていたからだと思いました。

当たり前の生活を続けるためのユニットケア

－ユニットケア実践事例－

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム下馬の家

土田 直哉、寺田 祐太、渡邊 優香里

（ユニットケア　暮らしの継続）

目的

介護におけるユニットケアでは更に『その人にとっての当たり前』が重視されるものだと考える。

人は性別も違えば、年齢も違う、生きてきた環境も違えば、好きなことも違う。『生活の中での当たり前』は十人十色になる。その人らしい、家で過ごしてきたとおりの当たり前の生活を継続すること、【暮らしの継続】を支えていくことを目的としている。

発表を終えて

渡邊　優香里（社会福祉法人奉優会
特別養護老人ホーム下馬の家）

すごく緊張しました。

当日まで一緒に発表する方と打ち合わせがなかなかできなかったため、発表している時にスライドを早く進めてしまったり、ハプニングは多々ありましたが、無事にやり終えることができて良かったと思います。

質疑応答では、うまく答えられなかったりしましたが、ユニットの取り組みについて「良かった」といっていただけたので、これからも励んでいきたいと感じました。

また、参加する機会があれば、今回の反省点を活かして発表できたらいいなと思います。



助言者コメント

大熊　由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）
徳永　宣行　（世田谷区介護サービスネットワーク代表）

誰しもが、当たり前の生活を送りたいと願っていると思います。施設に入所しても、その人らしい生活を目指して支援していることがよくわかる発表でした。施設ではユニットケアを中心として、多職種が連携して支援している様子が分かり、24 時間シートやスラックなどの、情報共有のツールをうまく活用していると感じました。

海外からの EPA 職員が増えている中で、どのようにご利用者に向き合うか、個別ケア、ユマニチュードなど様々な取り組みに、今後も期待をしたいと思います。


発表者





口頭発表　第７分科会

【本館３階　３０４教室】

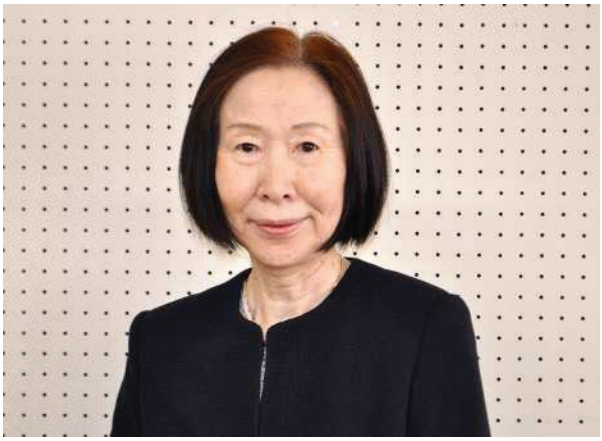
進行役・助言者

森田　規子　（教育相談課教育相談専門指導員）

橋本　睦子　（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

	発表者	所属	タイトル
1	岡崎　一也 鈴木　也真人 生駒　直紀	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム芦花ホーム	BPSD ケアプログラムを用いた利用者への実践
2	尾平　明聡	社会福祉法人はる ガーデンカフェ「ときそら」	利用者アンケートからわかるニーズと 「ときそら」のこれから
3	天井　利香 澤　雅樹 森口　祐子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原	一生おいしく、楽しく、安全な食生活を 支える通所介護 －歯科衛生士を中心とした口腔機能向上の 取り組み－
4	鈴木　夏美	社会福祉法人福音寮 小さなおうち保育園	子どもの“声”が聴こえる －異年齢保育の実践を通じて私たちができる こと－
5	吉島　大輔 竹田　美規子	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 地域密着型特別養護老人ホーム 寿満ホームかみきたざわ	「眉間のしわを消したくて」 －BPSD の理解と個別ケアの課題－
6	清水　菜摘	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 めばえ学園	個への理解 －個別療育と集団療育を通して学んだこと－
7	瓜生　律子 笹部　昭博 大中　吉宏	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 （アクションプラン 10 プロジェクトチーム）	ヤングケアラー支援策の提言 －誰もが住み慣れた地域で　安心して暮らし 続けるために－

進行役・助言者



森田　規子

（教育相談課教育相談専門指導員）



橋本　睦子

（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

BPSD ケアプログラムを用いた利用者への実践

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　特別養護老人ホーム芦花ホーム
岡崎 一也、鈴木 也真人、生駒 直紀

（特別養護老人ホーム　認知症ケア　BPSD ケアプログラム）

背景と目的

新型コロナウイルス流行以降、当施設では職員同士が集まって認知症の対応について話し合う機会が減り、介護職員間での認知症ケアの質の差が広がっている事が課題となっていた。

認知症ケアの質を向上させる取り組みの一つとして、認知症の行動・心理症状（以下 BPSD）の改善が期待できる「日本版 BPSD ケアプログラム（DEMBASE)」がある。このケアプログラムでは利用者の行動や心理症状をオンライン上で可視化する事ができ、根拠に基づいたケアを提供するだけではなく、ケアに関わる人の視点を共有化する事が可能になる。

今回、BPSD ケアプログラムを実際に使用し、利用者への統一したケアに取り組んだ事例を発表する。

発表を終えて

鈴木　也真人（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
特別養護老人ホーム芦花ホーム）

初めて区民学会に参加し、他の施設の発表を聞く機会があり、とても良い刺激になり、勉強になりました。今回、BPSD ケアプラグラムを活用し、発表を行いケアを振り返ることにより改めて取り組みを確認し、今後について向き合う良い機会となりました。

今後も本格的に取り組み始めた BPSD ケアプログラムを活用し、継続して取り組みを行い、発信していきたいと思います。

充実した時間をいただき、また貴重な発表の場を設けさせていただき、ありがとうございました。



助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

以前は BPSD について、認知症による問題行動という理解が一般的でした。現在では、「認知症の行動・心理症状」と定義され、認知症ケアプログラムにより、行動の数値化、可視化ができるようになり、そのプログラムを進める人材（アドミニストレーター）の育成も行われています。

そして令和６年４月より、認知症チームケア推進加算が算定できるようになりました。まだまだその取り組みは一般的ではありません。そこにチャレンジし認知症ケアの専門性向上のために取り組まれている姿勢に敬服いたします。

利用者アンケートからわかるニーズと「ときそら」のこれから

社会福祉法人はる　ガーデンカフェ「ときそら」
尾平 明聡

（アンケート　利用者支援　展望）

目的



ガーデンカフェ「ときそら」は、2020 年に開所した就労継続支援 B 型の事業所である。

多くの方々に利用いただく一方で、開所以来担い続けてきた「ときそら」のテーマである、「一人ひとりにあった柔軟な支援」が、利用者増加につれて、難しくなってきている現状がある。

細かいルール変更により、不満を感じる利用者も出てきている。今現在、皆が「ときそら」の事をどう思っているのか、「どういう事業所であってほしいか」を知り、全員で「ときそら」の今後を考えたい。

発表を終えて

尾平　明聡（社会福祉法人はる　ガーデンカフェ「ときそら」）

発表を終えて、「ときそら」の現状、今ある姿を報告できたと感じている。様々な職種の方々にご清聴いただけたことに感謝申し上げます。

発表後のご意見の中で、今後、福祉の資源のみならず、地域の資源になれるようにとのお言葉をいただいた。



私達が目指している、地域の中の「ときそら」を体現していくためにすべきことは多い。地域の方々とのつながりを大事にしつつ、仕事を通じて多くの方々と関われる環境を創出していきたいと考える。

そして何より、いつも見守って下さっている方々への感謝を忘れずに業務に取り組んでいきたい。

助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

利用者定員 20 名のところ 34 名の登録があるとのことでした。サービスニーズがあるにもかかわらず週 1～2 回の利用が、多いということで、利用者の特性から支援の難しさを感じます。ニーズの個別性も高く障害に対する職員の専門的理解も求められています。その理解のために今回、利用者アンケートを行い、15 分間の個別面談を定期的に取り組まれています。職員との面談が行われることで、まずは利用者の安心感が増したことと思われます。

素敵なカフェでこれからも引き続き利用者にとって居心地の良い場所を目指してください。

一生おいしく、楽しく、安全な食生活を支える通所介護

－歯科衛生士を中心とした口腔機能向上の取り組み－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原

天井 利香、澤 雅樹、森口 祐子

（多職種連携　根拠に基づいた介護　在宅生活の継続）

目的

世田谷区社会福祉事業団では、特別養護老人ホームと併設された通所介護（併設型）と併設のない通所介護（単独型）がある。単独型の通所介護４カ所では、歯科衛生士が巡回し、看護職・介護職が密に連携をとりながら、利用者の口腔機能の維持・向上に取り組んでいる。「一生おいしく、楽しく、安全な食生活を営む」ことを目的とした単独型通所介護事業所における口腔機能向上の取り組みをまとめ、その有効性を明確にするとともに、今後のあり方について考察する。

発表を終えて

澤　雅樹（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
デイ・ホーム松原）

発表を通じて、口腔ケアの取り組みをまとめることができ、今後必要な点などもしっかりと考察し、課題を明確にすることができました。

今回の発表にあたり、助言、資料提供を頂いた皆様に感謝いたします。

ご質問いただいた、「口腔ケアの取り組みは幼年期から必要か」には、歯磨きの習慣化の重要性をお話しさせていただきました。

継続することが大事であり、通所介護においても自宅での口腔ケアは、更に注力すべき内容です。

今後も取り組みを充実させるとともに、歯科衛生士を中心とした口腔機能向上の取り組みを発信してまいります。

貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。



助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

発表は、デイサービスにおける一専門職の取り組みではなく、まさに多職種連携、チームケアそのものでした。歯科衛生士を中心にしたチームは、介護職員、看護職員との協働により利用者にアプローチし成果を出しています。病気や課題の発見があったことも重要でした。

またＡ事例は、６年間口腔機能のリハビリ・ケアの継続で、機能維持が図られています。いつまでもおいしく食べられることは、基本的な欲求で人生の楽しみです。

今後も高齢者の口腔機能維持のためにチームで成果を上げられるように期待しています。

子どもの“声”が聴こえる

－異年齢保育の実践を通じて私たちができること－

社会福祉法人福音寮　小さなおうち保育園

鈴木 夏美

（子どもの主体性　子どもの意見表明　異年齢保育）

目的

保育現場では、子どもの権利条約に規定される「参加する権利」の尊重の模索が続いている。当園は、子どもの“声”（言葉だけでなく、表現するすべての手段）を聴くために、子どもが安心して自分の気持ちを表現できる環境・配慮を重視した保育を目指している。事例をもとに、子どもたちの意見表明を具体化する保育実践について検討する。

発表を終えて　　鈴木　夏美（社会福祉法人福音寮　小さなおうち保育園）

子どもと保育士が関わっている様子は、客観的にみると、“ただ遊んでいる”ように見えるかもしれない。そこにある保育士の意図と配慮、子どもの“個”と“集団”の発達的変化については見えにくい。それらを「子どもの意見表明」をキーワードとし、いくつかのエピソードをもとに発信する機会となった。



質疑応答では、コロナ禍が子どもたちに与えた影響、乳幼児の言い表せない感情の受容の難しさ、保育士の表情や反応が与える影響に関する意見・感想をいただいた。

いただいた意見を共有し、今後も子どもを中心とした保育実践を重ねていきたい。

助言者コメント　　森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

保育園で幼い子どもたちが生き生きと過ごしている様子がよく伝わる発表でした。「洗濯ばさみ」を繋いで、大好きな遊び道具作りに魅了されて「全部使いたい」お子さんと、そのお子さんの楽しそうな様子に引かれて「私もやってみたい」という複数のお子さんとの間で生じたエピソードを中心に、保育で大切にしている姿勢が報告されました。

保育士の方々が、双方の子どもの気持ちを想像し、尊重して寄り添う努力をされました。幼い子どもの感情は未分化で熱さがあり発達途上ですが、どんな感情も大切な役割があります。子どもは大人の言葉かけや態度を模倣して学ぶので、温かく見守る保育士の方々の姿勢が子どもたちの成長発達を促しました。

「眉間のしわを消したくて」

－BPSD の理解と個別ケアの課題－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　地域密着型特別養護老人ホーム寿満ホームかみきたざわ

吉島 大輔、竹田 美規子

（BPSD　個別ケア　認知症ケア）

目的

特別養護老人ホームにおける対応の難しいケースに対し、介護職員がとる基本的な対応と問題解決のための様々なアプローチについて、実際の事例をもとにして、困難な事例のどこに「困難」があったのか、どのようにして認知症の周辺症状が緩和していったのかを概観していく。

発表を終えて

吉島　大輔（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
地域密着型特別養護老人ホーム寿満ホームかみきたざわ）

認知症ケアの現場において、行動・心理症状が本人と介護従事者との間に大きな「壁」としてそびえ立ち、互いに困難を抱えてしまうという場面によく出会います。わたし自身も日々その難しさに思い悩み、答えのない課題を前に混乱し、思わず眉間にしわを寄せています。しかし、同じ不安と混乱を目の前の A 氏がより強く感じているという、そのあたりまえの事実に気がついて、コミュニケーションの方法を考え直すこと、想像力を働かせて相手の立場に立つことがこの事例の課題でもあり、最も大きな「壁」でした。

特にそれは、職員の間で同じ問題意識を持つときに強く感じられ、今回はできるだけシンプルな方法で、誰でも取り組める形にすることで、乗り越えることができました。

この「壁」を速やかに乗り越えていくことが、この次の課題だと思います。



助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

ユニットケアは、家庭的な雰囲気の中で生活し、職員ともなじみの関係ができやすく、認知症ケアにも良いとされています。A さんは、自らの状況を理解できず混乱期にありますが、取り組みでは、まずは関係作りからはじめています。職員が、A さんへの理解を深め変化し、A さんの BPSD も減少するという成果を出しています。

コミュニケーション力は、介護技術の根本として専門性が求められていると思います。

今後も粘り強く取り組まれることで眉間のシワが減ることを期待します。

個への理解

－個別療育と集団療育を通して学んだこと－

社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園

清水 菜摘

（自己主張　自信　達成感）

目的

今回、事例に出すＡ君は、集団療育(週２回)、個別療育(月１回)に通っている。Ａ君は集団の中では、緊張感や不安感が大きく、自己主張もあまりみられない。また、特定の安心できる支援者がいないと、心細くて過ごすことができない様子があった。その一方で個別療育では、緊張感や不安感はあまりみられず、「やりたい」「嫌だ」等の自己主張をする姿や、自ら課題に積極的に取り組む姿がみられている。このような状態のＡ君に対し、集団療育の中でも緊張感や不安感を軽減し、安心して過ごせるようになることを目的として支援を行った。

発表を終えて

清水　菜摘（社会福祉法人嬉泉
子どもの生活研究所　めばえ学園）

スライド等作成せず、口頭のみの発表であったため分かりづらい部分があったのではないかと反省している。発表では、緊張もあったが、落ち着いて発表することができた。質疑応答では、「個別療育のフィードバックの際に気を付けていることは」などの質問をいただき、発表の内容を踏まえつつ自身の考えを伝えることができた。



今回の発表を行うことで、改めて自身の支援について客観的に考えることができ、良い機会となった。また、他の皆さんの発表を聞き、学ぶことも多かったため、今後の支援にもいかしていきたい。

助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

小さいお子さんの中には、敏感で用心深くて人見知りや場所見知りが強かったりして家庭の外で力を発揮するのが難しい方がいます。発表者は、個別対応ならば安心して自分らしく振る舞うＡ君が、小集団の中で力を発揮して、もっと楽しめるようにと方策を考えました。そして、Ａ君の得意な課題を支援して自信を高めるという案を、とても自然に実施されたのが素敵です。家庭と協力して課題目標の焦点を絞った取り組み方も効果的でした。支援の成果を急がずに、敏感なお子さんの特性を大事にして、ゆっくり時間をかけて支援を進めたことがＡ君の気持ちの成長を促したと考えます。

これからも用心深く環境に敏感なお子さんが、特性を大事にされながら発達支援を得られるれように願います。

ヤングケアラー支援策の提言

－誰もが住み慣れた地域で　安心して暮らし続けるために－

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団（アクションプラン10　プロジェクトチーム）
瓜生 律子、笹部 昭博、大中 吉宏

（ヤングケアラー　地域で暮らす　支援策）

背景と目的



福祉ニーズが多様化する中、介護保険制度や障害者福祉制度などのサービスが充実する一方、ヤングケアラーや引きこもりによる 8050 問題など、制度の狭間で支援につながらず、事態の悪化を招くなどの課題が社会問題化している。それらの課題解決のため、世田谷区社会福祉事業団では、令和 4 年度に中長期経営計画の一環として、入所・訪問・通所・地域包括支援センターの職員参加により、プロジェクトチーム（以下「PT」という）を立ち上げ、ヤングケアラーや 8050 問題について検討を進めてきた。今回はヤングケアラーの支援策について報告する。

発表を終えて

瓜生　律子（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
（アクションプラン 10　プロジェクトチーム））

PT で高齢・障害の福祉事業者の視点から、子ども・若者が安心して住み慣れた地域で暮らし続けられるようヤングケアラー支援の検討を進めてきた。PT でまとめた「ヤングケアラー支援の手引き（概要版）」を作成する中で、ヤングケアラーの支援ではまだまだ課題があることを痛感した。

世田谷区では本年 7 月には「ヤングケアラーさぽーとるーむ」がオープンするなど、区内のヤングケアラーの支援体制も整いつつあるが、関係者の「気づき」を大切にして支えあえる地域づくりに取組む必要がある。



終了後、参加していた事業者から「自分達は、ヤングケアラーの視点が欠けていた」との声をいただいた。

今後、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせる地域づくりに向け、「手引き」の周知に努めていきたい。

PT では、引続き課題解決に取り組むとともに、「引きこもり（8050）」課題の検討を進めていく。

助言者コメント

森田　規子（教育相談課教育相談専門指導員）
橋本　睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局参与）

昨今は家族形態の変化が著しく、構成メンバーの少人数化も目立つ。多様化している子どもの生活状況に応じた教育的、福祉的支援のますます必要な現状に気づかされる。区教委は「ヤングケアラー」については研修会などを含めて 4～5 年前からスクールカウンセラー、学校教育相談担当教員などへの啓蒙に取り組み始めたが未だ日は浅い。家族の困難は一時的なのか、長期化する課題なのかなどの判断が難しいケースに気づくこともある。学校と地域で力を合わせて地道に取り組んでいくことが大切だと思う。気づいた大人は子どもと家族の関係性を大事に見守りながら、子どもが孤立しないように心理的支援や家庭全体の福祉支援を活用して支えていきたい。


発表者




発表者



口頭発表　第８分科会

【本館３階　３０５教室】

進行役・助言者

神田　裕子　（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

宮川　善章　（障害福祉部障害施策推進課長）

	発表者	所属	タイトル
1	大久保　結菜 岡村　美海 小谷　麻央 鈴木　愛果	東京都市大学 人間科学部児童学科 3年	大学生の結婚観と結婚願望の関係
2	白石　哲也 和仁　智子 竹内　洋子	リハトレスタジオ世田谷 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋 社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課	オンラインの可能性を模索する！パーキンソン病患者向けフレイル予防活動の取り組み －オンライン包括的リハビリテーション プログラムの経過報告－
3	上原　明子 竪山　順子 玉木　美和子	一般社団法人 つながりラボ世田谷	継続した実践は「きずな」を作る －必要と思われる人たちへ必要な支援を 届ける・・・地域の支援を受けながら－
4	木畑　実麻 手塚　由美 稲森　健太	一般社団法人　輝水会 社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会 世田谷地域社会福祉協議会 事務所 池尻地区事務局	児童館の子どもも一緒にボッチャ交流体験会 －スポーツを通した多世代交流の居場所 づくりに向けて－
5	寺嶋　拓哉 北村　果央 井上　絵里子	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム弦巻の家	新たな福祉の形 －多職種で繋ぐ持続可能な Rehabilitation－
6	木田　裕芳	経営相談室知恵の和	体験型スポーツイベント「松陰神社参道 商店街フェス」の実施 －LET'S DO SPORTS!－
7	藤本　祥多	社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋	在宅にある物品が治療道具になる －新聞紙編－

進行役・助言者



神田　裕子

（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）



宮川　善章

（障害福祉部障害施策推進課長）

大学生の結婚観と結婚願望の関係

東京都市大学人間科学部児童学科　３年
大久保 結菜、岡村 美海、小谷 麻央、鈴木 愛果

（結婚観　若者　未婚化）

はじめに

近年、日本における少子化の進行は、若者の未婚化や晩婚化が一因であると指摘されている。

厚生労働白書(2020)年の婚姻年齢の推移に関する調査結果によると、初婚年齢は 1989 年では男性が 28.5 歳、女性が 25.8 歳であったのに対し、2019 年には男性が 31.2 歳、女性が 29.6 歳へと上昇している。また、25～29 歳の未婚率も、1990 年の男性 65.1%、女性 40.4%から 2020 年には男性 76.4%、女性 65.8%へと増加している。これらの背景には、社会経済的要因や人々のライフスタイルの変化が影響していると考えられる。白石（2015）は、現代社会では経済的安定やキャリア形成が優先されるため、結婚のタイミングが後ろ倒しになる傾向があると指摘している。

そこで本研究では、現代の大学生が結婚に対してどのような意識をもっているのかを明らかにすることを目的とする。

発表を終えて

小谷　麻央（東京都市大学人間科学部児童学科　3 年）

大学生の結婚観について調査してみて、男女共に結婚願望が 90%あることに驚きました。世間では、結婚離れが進んでいると言われていますが、今の大学生は結婚について前向きに考えている人が多いことを知り、なぜ結婚離れが進んでいるのかを大学生の括りだけでなく、20 代、30 代と幅を広げて調べてみたいと思いました。



質疑応答の時間では、「アンケート調査をした人たちの大学学部に偏りがあるのか」という質問をいただき、学部ごとに意見の違いがある可能性に気付かされました。

今後の調査では、そういったことも意識して、多様な意見を取り入れられるように取り組みたいと思いました。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

大学生が同世代の結婚観を明らかにする試みとして、とても興味深く発表をお聞きしました。

社会経済的要因やライフスタイルの変化等があり、未婚率上昇や晩婚化が進んでいる状況で、個人の価値観は自由や自己実現を優先するようになっていますが、本調査では、大学生の 9 割が結婚を希望していることが明らかになっています。

このような調査が後輩に引き継がれ、継続的に実施されると更に研究内容が深まっていくと思います。

オンラインの可能性を模索する！パーキンソン病患者向けフレイル予防活動の取り組み

－オンライン包括的リハビリテーションプログラムの経過報告－

リハトレスタジオ世田谷
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
白石 哲也
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
和仁 智子
社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護課
竹内 洋子

（パーキンソン病　フレイル　オンラインリハビリ）

目的

パーキンソン病は高齢者に多く見られる神経変性疾患であり、進行に伴う運動機能の低下やフレイル（虚弱）が深刻な問題となる。また、新型コロナウイルスの影響で外出が長期にわたり制限され、リアルな場でのフレイル予防活動が困難な現状が続いている。そこで本研究では、オンラインを活用したフレイル予防活動の有効性を検証し、パーキンソン病患者に適したリハビリテーションの提供方法を模索することを目的とする。

発表を終えて

白石　哲也（リハトレスタジオ世田谷、社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

このたび、オンライン包括的リハビリテーションプログラムの経過報告を発表する機会をいただき、深く感謝申し上げます。当日は「ロコモ 25 の具体的内容」や「パーキンソン病のオン・オフに対する対策」、さらには「大学生ボランティアの活用可能性」など多様な質問をいただき、大変意義深い議論ができました。特に、パーキンソン病のオン・オフ状態への対応についてはプログラムの課題点を再認識するとともに、今後の改善に向けた具体的なヒントを得ることができました。



また、ボランティア活用のご提案には新たな可能性を感じ、学生の教育的観点からも魅力的な取り組みになると考えています。今後も、患者支援に寄与するプログラムの充実を図りたいと思います。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

シニア層には、慎重にコロナ対策を実施している施設も多い。その中でパーキンソン病に伴う運動機能低下とフレイル予防のために、オンラインによる包括的なリハビリテーションの提供は大変重要な意義があります。「リハビリ方法を忘れてしまう」「モチベーションが維持できない」といった声も聴く中、IT 活用によるリハビリの充実は、リハビリの質を上げることにも繋がります。

今後は、通信整備やハイブリッド型プログラム開発等が課題とのことだが、利用者が繰り返し見られる、オンデマンド配信も検討してみてはどうでしょう。是非、地域連携の強化と、皆様の専門性を活かし、充実したプログラムが継続的に提供されることを大いに期待しております。

継続した実践は「きずな」を作る

－必要と思われる人たちへ必要な支援を届ける・・・地域の支援を受けながら－

一般社団法人　つながりラボ世田谷

上原 明子、竪山 順子、玉木 美和子

（制度の狭間　親なき後に備える　地域の見守り）

目的

つながりラボ世田谷は、世田谷区手をつなぐ親の会（主に知的障害のある子を持つ親の団体）で取り組むことができなかった親子の高齢化に焦点を合わせ、親が子どもを支えられなくなった時に、あれば良いと願う「本人の地域生活を支える仕組み」を考えることを目的としている。

現在は福祉制度が充実してきているが、それでも知的障害の特性上、ライフサイクルに応じて出てくる課題に直面するとき、我が子の将来について親の悩みは尽きることはない。親に代わって、単独ではなくチームで知的障害のある人の生活をいつも見守り、必要があれば相談・支援機関にスムーズにつなぐ、そのような支援体制が身近にあれば、親の不安は大きく軽減されるのではないだろうか。

発表を終えて　　竪山　順子（一般社団法人　つながりラボ世田谷）

知的障害者の親なき後の地域での生活を支えるための仕組みづくりを目的とした、親や家族向けの親なき後に備えるための勉強会、本人を対象としたスポーツ教室での身体活動の実践を紹介しました。また、法人の最も大切にしている活動の MAPS CAFE・・知的障害者とそれを見守る地域の人との交流の場・・では、近況報告や準備したプログラムで本人達、家族、区内在住弁護士、福祉施設関係の協力者等の参加者全員で共に楽しむ様子の実践活動を PPT で紹介しました。



私達の活動は障害者を対象としているので、なかなか一般の方には関心を持ってもらいにくい活動ではありますが、会場では画面を見ながら、頷いてくださる方もいて、少しでもこの活動を区民の方に理解してもらうことができたのではないかと思っています。発表を終えてみて、継続して活動を実践していくことの意義を感じています。

発表後に一般の方からの質問はありませんでしたが、助言者の活動の key point についてのご質問は有難かったです。

助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

以前より障害者本人と家族の「親なき後」をどうするかが課題となっており、発表者からは、親子の高齢化に焦点を合わせた活動を行っていることが報告されました。

障害者本人の権利擁護や意思決定支援、死後事務委任契約に関する勉強会、障害者本人が参加する運動活動など、様々な関係者との結びつきを元に、活動の幅を広げており、知的障害のある方が安心して暮らし続けていくための支援体制の構築に向けて、継続して活動していることは素晴らしいと感じます。

児童館の子どもも一緒にボッチャ交流体験会

-スポーツを通した多世代交流の居場所づくりに向けて-

一般社団法人　輝水会
木畑 実麻、手塚 由美
社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会　世田谷地域社会福祉協議会事務所
池尻地区事務局
稲森 健太

（四者連携　多世代交流　スポーツ）

はじめに

私たち輝水会は、2016 年より区内において「リハ・スポーツ教室」の取り組みを始めた。各地区の社会福祉協議会の協力のもと、集会所や会議室などのスペースを利用して、年齢や障害を問わず気軽に楽しめるスポーツ活動拠点の展開を進めている。2023 年 5 月より、池尻地区では、社会福祉協議会が池尻 2 丁目団地住民の買い物困難の解決を目指し、移動販売誘致の支援を開始した。同時に、団地集会所の空き時間を活用した住民同士の交流機会・居場所づくりのニーズも挙げられたため、社協職員が団地自治会に働きかけ、輝水会と連携し「ボッチャ交流体験会」を毎月 1 回、主に高齢者や障害のある方を対象に実施してきた。

2023 年 12 月からは、集会所の近隣にある児童館から、毎回子ども達が参加して、地域の高齢者と一緒に楽しむ時間を過ごしている。ボッチャを通して、世田谷区がめざす「まちづくりセンター」を中心とした地区における地域包括ケアシステムの連携に、児童館を加えて強化した「四者連携」の実践成果を報告する。

発表を終えて

木畑　実麻（一般社団法人　輝水会）

今回、池尻地区における取り組みを私達輝水会と社会福祉協議会が協同で発表することで、課題や今後の展開を共有することができ、さらなる発展を考えていくことができた。



また、会場の参加者の皆さんから、活動回数を増やしていく（活動の日常化）ために、より多くの支援者（大学生ボランティアなど）を増やしていくことも必要であるとのご意見いただき、今後、より幅広い世代の参加や関わりを増やしていけるようにしたいと思いを新たにした。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

御会独自に工夫したボッチャを通して、誰もが楽しく参加してみたい気持ちになる交流会なのだろうと思いました。スポーツをツールとしているため、障害のある方、高齢者、子ども、多世代が一緒に楽しむ仲間になれるという機会で、障害のある方にとっても社会参加への一歩になることでしょう。支援する側、受ける側という一方向の関係ではなく、一緒にスポーツを楽しむ場面を通じ、主体的な地域活動の展開が進められています。

まちづくりセンターを中心とした地区における連携、児童館を加えた 4 者連携での継続した活動と、他地域にもこの活動が広がっていかれることを大いに期待しております。

新たな福祉の形

－多職種で繋ぐ持続可能なRehabilitation－

社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家

寺嶋 拓哉、北村 果央、井上 絵里子

（多職種連携　リハビリテーション）

目的

2023年８月に新規オープンした特別養護老人ホーム弦巻の家で、特別養護老人ホームにおける新たなリハビリテーションの形を目指し、プロジェクションマッピングを導入。『楽しみながら身体を動かす、自ら身体を動かしたくなるようなリハビリ』をテーマに、多職種で連携し３ヵ月で得られた効果や結果を追うことを目的とした。

発表を終えて　　寺嶋　拓哉（社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家）

今回、このような機会をいただき、他施設や他法人、他業種の取り組みを学ぶことができ、また、弦巻の家での取り組みを多くの方に知っていただくことができ、大変嬉しく思います。

今後もプロジェクションマッピングを活用し、多くの事例を生み出し、福祉の発展に貢献できればと思います。



助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

特別養護老人ホームにおけるプロジェクションマッピングを使ったリハビリの効果について、映像を使いながら分かりやすく報告いただきました。リハビリの効果を科学的に分析しており、リハビリ職以外の職員によるリハビリ実施の可能性を広げている点で素晴らしいと感じます。

プロジェクションマッピングという新しい技術による手軽で効果的なリハビリが、特別養護老人ホームでのお年寄りの暮らしを、これまで以上に豊かにすることを期待します。

体験型スポーツイベント「松陰神社参道商店街フェス」の実施

－LET'S DO SPORTS!－

経営相談室知恵の和

木田 裕芳

（スポーツ　体験　交流）

目的

コロナ禍期間中、多くの商店街はイベントの中止を余儀なくされ、その間、地域の絆の重要性が再認識されていました。そして、コロナ禍明けに、松陰神社通り松栄会商店街振興組合は、その問題意識を踏まえ、必ずしも営利を目的とせず、地域の誰もが楽しく参加できる企画として、体験型スポーツイベントを実施しました。

発表を終えて　　木田　裕芳（経営相談室知恵の和）

できるだけ写真等も使いながら当日の模様を伝えることに留意しました。お子さんの参加をきっかけに、参加者同士のつながりが広がることなどをもっとうまく伝えられればと思いました。

私達は福祉のプレーヤーではありませんが、地域貢献には多様な形があり、誰でもが参加可能であることが少しでも伝われればと思いました。



助言者コメント　　神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

コロナ禍では、世田谷区内でも多くの商店街でイベントの中止を余儀なくされました。このことがきっかけとなり、地域での新たな「絆づくり」の重要性に目を向けた、意義あるご発表でした。

フェスの醍醐味のひとつは、みんなで和気あいあいと楽しむ、様々な人との出会いの場でもあります。体験型のイベントは、ただ見るだけのイベントとは異なり、実際の行動を伴うため参加者の記憶に残りやすい。

そして、行動と対になった感情は心にも残る。是非、今後も参加者同士の交流、商店街皆様の交流、地域の皆さんが楽しみながら交流できる機会となるような、体験型イベントの企画開催を期待しております。

在宅にある物品が治療道具になる

―新聞紙編―

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋

藤本 祥多

（視知覚　Activity　環境適応）

目的

近年、診療報酬改定に伴い、病院からの早期退院が進められており、回復期病棟においても同様で、これまでよりも病院で受けられるリハビリの回数が少なくなっている。

訪問（地域）リハビリ＝維持期・生活期のリハビリと言われているが、早期退院となる影響で、病院でのリハビリ（回復期リハビリの要素）の役割が、これまで以上に訪問リハビリに求められていると思う。そこで、訪問と回復期の要素を同時に取り入れ、在宅によくある馴染みの物品（今回は新聞紙）を使用して利用者様の機能改善に取り組んだ。介入前後で麻痺側の動きに変化が見られたことを以下に報告する。

発表を終えて

藤本　祥多（社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
訪問看護ステーション三軒茶屋）

この度は、貴重な発表の機会を与えていただきありがとうございました。昨年に続き 2 年連続での発表となりました。昨年よりも聴講者は少なかったですが、長谷川幹先生が来てくださり、大変貴重なフィードバックをしていただけました。お褒めの言葉やエールもいただき、次回も挑戦したいという気持ちになりました。



また、他の皆様からも激励のメッセージがいただけて、大変有意義な時間となりました。

今後も、リハビリの必要性や効果などについて知っていただけるように尽力していきます。

助言者コメント

神田　裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）
宮川　善章（障害福祉部障害施策推進課長）

脳卒中等の患者の早期退院が進む中で、訪問リハビリにおいて回復期リハビリの要素を取り入れるようになっており、日常生活で身近な物品「新聞紙」を使ったリハビリの効果についての実践報告がありました。発表後の会場から、発症後 10 年以上経過してから機能回復した事例の話もあり、回復期リハ、維持期リハとともに、長い経過をみながら生活を支えていくことを考えさせられる機会となりました。

利用者個々の状況等に応じた長期的な取組みの更なる展開を期待します。

ワークショップ

「笑顔の輪を広げる みんなのスポーツ」



ワークショップまとめ



進行・小澤：皆さま、こんにちは。ワークショップの進行を務めます、日本大学文理学部社会福祉学科 4 年 小澤 保菜美でございます。よろしくお願いいたします。

本日のワークショップは、学生理事 3 名、ワークショップ実行委員として日本女子体育大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、日本体育大学、東京農業大学より 13 名が、参加されている皆さまと楽しく活発な意見交換が行われるようにグループワークを進めて参ります。

それでは、本日の全体会Ⅰで行われました、日本女子体育大学体育学部名誉教授 雨宮 由紀枝先生の基調講演「運動・スポーツでつながる 地域の輪っはっは！」をふまえグループセッションを行わせていただきます。

グループセッションについてご説明いたします。グループセッションの司会・進行・まとめは、学生実行委員、学生理事が担当します。基調講演をふまえ「笑顔の輪を広げる みんなのスポーツ」について「日ごろ考えていること、取り組んでいること」「自分はどうありたいか」「地域の中で取り組みたいこと」などを各グループに分かれて楽しく話しあいたいと思います。

それでは、14 時 35 分まで 30 分間グループセッションを始めます。

～グループセッション～





小澤：皆さま、30 分間のグループセッションありがとうございました。それでは、グループセッションのまとめに入らせていただきます。各グループ、2 分ほどでご報告をお願いいたします。

小澤：1 グループ 日本女子体育大学体育学部スポーツ学科 3 年 麻生 有倖さんお願いします。



麻生：私たち 1 グループでは、運動のイベントや地域で行っている活動など、どのようにして知ってもらうのか、もともとあまり知られていないのではないか、また、自分たちから情報を知ろうとしないと知る機会がないのではないかという意見がありました。

私たちがどうしていきたいか考えたとき、心理的ハードルが高くスポーツに取り組めない、自分からやろうという気にならない、また、競技とかになるととてもハードルが高くなり、楽しいというような気持ちにならないなどの意見がでました。

誰でもが楽しめるような工夫や、成功体験を得てもらったり、参加している人が、一人ひとり不得意な人にフォローをしてあげられるような言葉がけが必要ではないかと思いました。

小澤：麻生さんありがとうございました。

小澤：2 グループ 駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻 3 年 小林 明日香さんお願いします。



小林：私たちのグループでは、それぞれ福祉、スポーツの取り組みについて意見を出し合いました。小学生や高校生との関わり、福祉作業所で行われるスポーツ教室、放課後等デイサービスなど様々な場所で行われている取り組みについて話し合いました。

その中で、取り組みがなかなか根付かないということが、課題ではないかという話がありました。理由として、ボランティアを行ったということで終わってしまい、あまり継続ができていないのではないか、楽しさを持ってボランティアをすると良いのではないか、という話になりました。

ボランティアと聞くと、ちょっと堅苦しい雰囲気だったり、やりづらい、始めにくいということが少しあると思います。楽しくいろいろな人と関われますよ、この様な取り組みを行っていますよなど、もっと外に向けて発信をすると良いと思います。また、一人ひとりの取り組みや他の大学がどのような取り組みを行っているか、知られていないと思うので、もっと気軽にボランティアを募ったり、企画作りなど発信できるサイトなどがあると良いと思います。

まずは、自分自身ができる身近なところから動いたり、自分の引き出しを増やしていけると良いのではないかと思いました。

小澤：小林さんありがとうございました。

小澤：3 グループ 昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科 4 年 神﨑 野恵さんお願いします。



神﨑：私たちのグループでは、それぞれの部活動などの経験を軸に意見交換を行いました。運動が苦手だという人が多かったのですが、それでも学生時代は熱中してスポーツに取り組んだ経験があり、そのようなきっかけとして、仲のいい人や、身近な人からの影響ということが多かったです。そこで、いろいろな人たちがスポーツを始めたり、好きなことを知るきっかけとして、仲のいい人や身近な人からの発信が重要になると思いました。

運動の経験でいうと、積み重ねることで、できていくところもあるので、苦手であっても、先輩に憧れてだったり、友人と楽しく過ごしていく、音楽に関連づけて行うということで、自分の好きに繋げて、運動が苦手であっても楽しめるという要素もあり、スポーツの可能性を感じました。

小澤：神﨑さんありがとうございました。

小澤：4 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 2 年 雷 霆さんお願いします。



雷：私たちのグループでは、高齢者と接する経験をとおして、高齢者のスポーツについて話し合いました。現代社会の孤立高齢者の課題に着目し、スポーツをとおしてみんながもっと交流できるようにする。高齢者にとって、心の健康と身体の健康はどちらも欠かせないと思います。

とくに、孤立を防ぐためには、スポーツをとおした交流の場を増やすことが重要ではないかと意見がでました。例えば、ポイント制度のような仕組みを作り、高齢者が積極的にスポーツに参加し、楽しみながら健康を維持し、地域社会との繋がりも深められるのではないかと思います。この仕組みは、一人ひとりの健康促進だけではなく、地域全体の活性化にもつながるのではないかと思いました。

小澤：雷さんありがとうございました。

小澤：5 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 3 年　藤田 優翔さんお願いします。



藤田：5 グループでは、メンバー全員が今まで行ってきたスポーツについて話し合いました。話の中で、共通していたことが、スポーツをとおしたコミュニケーションで笑顔になったり、元気づけられるというところでした。例えば、ランニングしている時、〇〇さん頑張って！の応援などのコミュニケーションで、笑顔になったり元気づけられるのでないかという意見がありました。

運動を始めようという強い意志がないと、新しいことを始めることが難しいと思うので、きっかけがあると、運動も始めやすいのではないかと思います。また、18 歳以上からなどの年齢制限を設けず、勝ち負けといった勝敗がないイベントを地域で行ったら良いのではないかと意見が出ました。

小澤：藤田さんありがとうございました。

小澤：6 グループ 日本大学文理学部社会福祉学科 3 年 三沢 勝斗さんお願いします。



三沢：自分たちのグループでは、農大の方、スポーツをやってる方、福祉に携わっている方がいたので、日頃の活動やどのようなことをしているかを交えながら話を進めました。

いろいろな活動をされ、いろいろな社会資源があるということは分かったのですが、結びつかない方が多いのではないかと言う話がありました。他のグループでも言われていましたが、どのようにしたら情報を伝えることができるのかという意見もありました。また、その情報をどうやって伝えるか、ということについて話し合ったのですが、地域の方、障がいのある方、高齢者の方がどのような、ニーズを持っているのかということを、聞いていく必要があると思います。自分たちが憶測で考えるのではなく、利用者の方や障がいがある方が本当に思っていることについて、聞いていくことがとても大事ではないかという意見が出ました。

また、呼びかけを行っていく人たちは、相手のことや気持ちを考えながら、どうしたらその方たちが、自分たちが持っている資源を楽しくやってもらうことができるか、これからも継続してやっていけるのか、やってもらうことができるのか、考えていく事が大事なのではないかという意見になりました。

小澤：三沢さんありがとうございました。

小澤：いずれのグループも、大変活発な交流が行われた様子が伝わってきました。ありがとうございました。

ワークショップの振り返りとして、日本女子体育大学体育学部名誉教授 雨宮先生お願いいたします。



雨宮：皆さん、ワークショップ本当にご苦労様でした。それから、発表された方々、本当に上手ですね。いろいろな話題が出たと思うのですけれども、それをちゃんとまとめて、皆さんに伝える力を持った学生さんが本当に多いんだなということで感銘を受けました。

また、スポーツや運動ということで話しにくかったこともあるかと思いますけども、それに基づいていろいろな意見を出してくださり、やっぱり若者の力っていうのは、これからすごく期待できると思いました。3 グループに関して言うならば、放課後等デイサービスでバイトをされたり、重度訪問介護をやっています、などの話もあり、世田谷区は安泰だなと思いました。

いろいろご自身で、大学生活以外のことも豊かに行えていて、学生さんだからこそなのかもしれませんが、いろいろな活動をされていることを知ることができ、私も本当に嬉しくまたエネルギーになりました。

ありがとうございました。

小澤：雨宮先生、ありがとうございました。

ワークショップの締めくくりとして、第 16 回大会実行委員長 佐伯先生より、一言お願いいたします。



佐伯：皆さん、お疲れ様でした。雨宮先生がおっしゃったことがすべてかなと思っています。

私も、本学の学生以外の皆さんと話す機会があり、やっぱり若者の力というのは素晴らしいですね。よく考えているし、良い行動をしている。学生時代のその考え方や行動を卒業すると忙しくなったりして、色々と追われたりしてしまうと思うんですけれども、皆さんにはせっかく若者の特権、是非いろいろな可能性がいっぱいあるんだ、自分たちはやれるんだということを思って、自信を持って欲しいと思います。社会に出たら色々と厳しいことも言われたり、思われたり、あっやっぱり無理かもと思うことがあるかもしれないけども、いろい

ろな人の力を頼りにすれば、皆さんが今、考えていることややっていることは絶対に、世の中の役に立つことだと強く思いました。

本当に、日本のこれからは安泰だと思いました。是非ますますご活躍ください。今日はお疲れ様でした。

小澤：佐伯先生、ありがとうございました。

本日のワークショップでは、ご参加の皆さまに協力をいただき楽しく交流することができました。ありがとうございました。

おかげをもちまして、ワークショップを無事、実施できました。心から感謝申し上げます。




発表者





全体会Ⅱ



大会総括

進行　日本女子体育大学　佐伯　徹郎



佐伯：ただいまから、「せたがや福祉区民学会 第16回大会」全体会Ⅱを開催いたします。本日は、ご参加いただき、ありがとうございます。全体会Ⅱの進行も務めさせていただきます、日本女子体育大学 佐伯です。どうぞよろしくお願いいたします。

ご参加いただきました皆様、発表者、進行役･助言者の皆様、また、学生実行委員、学生ボランティア、スタッフの皆様、お疲れさまでした。

本日はおよそ440人の方にご参加いただきました。本日の大会には、学生ボランティアをはじめ、多くの方に協力をいただきました。皆様、本当にありがとうございました。おかげさまをもちまして、この大会を無事に開催することができました。心から感謝申し上げます。

全体会Ⅱにおきましても、引き続き記録及び広報に使用するため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、不都合のある方は、恐れ入りますが、黄色い腕章をつけたスタッフにお申し出ください。

本日は基調講演に続き、介護の魅力PR事業の動画上映、56本の口頭発表、11本のポスター発表、ワークショップ、また、区内障害者施設の販売、KAiGO PRiDE写真展が行われました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの様々な会場の様子について、皆様からのご報告･ご感想をお聞きしたいと思います。

まず、口頭発表の方、発表をされてのご感想をお聞かせいただきます。第4分科会の竹内 洋子様、お願いします。



竹内：世田谷区社会福祉事業団 訪問看護課管理栄養士の竹内です。

本日発表させていただき、事業団の訪問看護課の医療チーム、専門職が集まって、「最期まで口から食べることを支援していきたい」というグループの会があり、こちらでの活動報告をしました。

回数も少ない活動の中で専門職のいろいろな職種が集まり、そして課を越えてシームレスな関係でチームを組んでいます。

こういう場で区民の方、ほかの方に聞いていただくのも発信として大事だと思っています。私たちのやってきたことをまとめていくといった１つの形ができたこと、すごく私たちの勉強になったと思っています。今後、こういったことを他の職種や他の方に知ってもらう、管理栄養士がどういうことができるかとか、職種同士、多職種がそれぞれ理解し、また、ここにも事業団の上司や仲間が来ています。そういう他の方々に、私たちの活動や、やっていることを職場の人にも理解してもらうことができましたので、非常に有意義な発表をさせていただき、ありがたく思っています。ありがとうございます。

佐伯：竹内様、ありがとうございます。次にポスター発表の方、ご感想を聞かせてください。松下 昌平様、お願いします。

松下：社会福祉法人大三島育徳会 居宅介護支援事業所博水の郷でケアマネジャーの松下です。



自分以外のポスター発表を見させていただき、地域課題の発表とか、デイサービスでの利用者さんに喜んでもらうための取り組みとか、多種多様の発表がありました。

中には映画仕立てで、映像を駆使した、ポスターの枠組みには収まらないものもあり、刺激を受けました。

自分自身が発表をしての感想ですが、今回、初めての発表でしたが、ポスター発表の醍醐味、見に来ていただいた方から直接、質問や意見をいただくということがあり、そういう方と対話できた点で、非常に有意義な時間を過ごすことができたと思います。ありがとうございました。

佐伯：ありがとうございました。口頭発表、ポスター発表には進行役･助言者が 20 名いらっしゃいました。その方からもぜひ、ご感想をいただきたくお願いします。

分科会･口頭発表の助言者から第 2 分科会、駒澤大学の荒井 浩道先生、お願いします。



荒井：駒澤大学の荒井です。第 2 分科会の口頭発表を担当しました。

地域をつなぐネットワークをテーマにする分科会で、7 つの演題、すべて、大変、素晴らしくて魅力的でした。

まとめると、世田谷という 1 つの地域の特性を踏まえた取り組みがありました。

その取り組み自体が地域の特性･強みを資源、リソースとして活用する、ダイナミックな取り組みが行われている、実践研究の発表でした。また、世田谷区の特徴では、認知症ケアの先駆的な取り組み都市で、希望条例を持つ世田谷の特徴を生かした取り組み。学生さんの発表も複数ありましたが、所属大学の特徴を生かした取り組みもありました。例えば、開催校の日本女子体育大学ではウォーキングマップづくりがあり、それぞれの特徴が出た、すごく魅力的な発表でした。

全体を見渡して、世田谷区の地域の魅力を改めて再認識する分科会だったと思います。以上です。ありがとうございます。

佐伯：ありがとうございました。続いて、ポスター発表の進行役･助言者から、社会福祉協議会の長岡光春様、お願いします。

長岡：皆様、世田谷区社会福祉協議会 事務局長の長岡です。本日はお疲れさまでした。昨年に続き、ポスター発表の担当をしました。

今年は 2 つの会場で、合計 11 の発表があり、私の担当は第 2 会場で、5 つの発表がありました。先ほどの発表された方と別の会場です。



第 2 会場では移動支援の法人、2 つの障害者施設、デイホーム、認知症デイサービスの発表がありました。

新たな取り組みや日々の仕事の中で、研究されている点などについて、深いところまで研究されていて、大変熱心な発表をしてくださいました。

お客さん、聞いていただける方も予想より多く来ていただき、

いい感じの発表の場となったと思います。

また、私自身、発表の方々から、熱量、パワーを受け取ることができたとともに、知らない新たな情報を知ることもでき、自分の法人でもすぐに活用できそうな話もありました。大変刺激を受け、勉強させていただき、ありがとうございました。

ただ、1つ。ポスター発表は、発表3分で質問が2分、応答が1分。全部で6分。去年は感じなかったのですが、今年は発表の方々が、5組だったんですが、皆さん3分では足りなくて、途中で終わってしまった状況でした。資料を拝見すると、大変すばらしい内容なので、もったいなかったなという思いがあります。もしも可能なら、来年は1〜2分でも発表の時間を延ばしていただく方向で、検討いただければと思いました。どうも、ありがとうございました。



佐伯：長岡様、ありがとうございました。続きまして、ワークショップの報告に移ります。

ワークショップ「笑顔の輪を広げる みんなのスポーツ」には、32名が参加し、活発な意見交換が行われました。進行の学生理事、学生実行委員の皆様、教壇にお上がりください。

それでは、学生理事、学生実行委員の各大学代表の方、ワークショップの報告と感想を一言、お願いします。

小澤：学生理事の日本大学文理学部社会福祉学科4年の小澤といいます。

私自身スポーツ･運動に苦手意識があり、今日も、ワークショップどうしようと思っていたのですが、雨宮先生の話やグループワークを通して、どうして苦手意識を持ってしまうのか。社会的に苦手意識のある方がどうしたらハードルを低くできるのかを、話し合えたことがすごく印象的でした。

運動･スポーツももちろんそうですし、他のことでもハードルが高くなってしまい、苦手意識を持たれる方、様々な要因で参加できない方がいらっしゃるのかなと思うので、今後生活していく中でどうしたら環境を整えることができるか、考えていけたらいいなと思いました。貴重な経験をさせてくださり、ありがとうございました。

神﨑：学生理事をやらせていただきました、昭和女子大学人間社会学部4年 神﨑 野恵です。

今回のワークショップではスポーツを題材に話したのですが、やはり学生の方々は部活動や体育の授業でスポーツが最近まで身近にあったので、話も自分を中心に話せることで盛り上がりましたし、自分の好きなものを話せるのを楽しんでもらえ、自分で楽しめるようにしていくということで、雨宮先生の話を踏まえて、誰もがやりたいことを苦手意識もなく好きにできたらいいなと考えながらお話できました。本日は、どうもありがとうございました。

定方：昭和女子大学の学生理事を務めた、定方です。

私もスポーツは苦手意識があって、自分にとって身近なものではなかったのですが、雨宮先生の話を聞いて、ワークショップで意見交換させていただいたことで、スポーツって、私自身障がいのある

方と一緒に活動することが多く、そういう方でも身近にとらえてもらうことができるツールだし、そういう引き出しを自分の中に持っておきたいと強く感じました。貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

藤田：学生実行委員を務めた、日本大学文理学部の藤田です。
本日ワークショップがスポーツに関するテーマでしたが、自分自身、苦手意識を持っていて、話すことがないと思っていたのですが、他の方が社交ダンスサークルを一から作ったり、障がいに関するイベントのボランティアをされていた方の話を聞いて、参加する前より自分の視点を広くすることができたと思いました。それで、私が所属した班では、スポーツをやる前に些細なきっかけが大事なんじゃないかという結論になりました。自分自身もきっかけがあればスポーツに関する苦手意識もちょっとなくなるのかと思い、本日は勉強になりました。ありがとうございました。

藤澤：学生実行委員を務めた、東京都市大学人間科学部児童学科 4 年の藤澤 日菜です。
本日は基調講演とワークショップで、スポーツと地域ということを考えました。
私は保育について学んでいるので、福祉を親子や保護者、子どもの視点以外で、あまり考えたことがなかったので、様々な学部の方と話していろんな視点をもって、福祉と地域を考えられたことがすごく楽しかったです。ありがとうございました。

中村：本日、実行委員を務めさせていただいた、日本体育大学体育学部の中村 紗彩と申します。
今日は、貴重な時間をありがとうございます。私は今回のワークショップを通して、他学の人と関わることができてよかったです。コミュニケーションがなかなか取れない方もいると思いますが、コミュニケーションは大切だと感じました。本日はありがとうございます。

平本：駒澤大学文学部社会福祉学専攻 3 年の平本です。
本日は貴重なお時間、ありがとうございます。私は大学で福祉を勉強していて、人とのつながりを考えることは、授業内でもけっこうあります。
今日のワークショップに参加して、スポーツで人がつながる可能性をすごく感じて、やはり人とのつながりとか、つながっていくことでいろいろな可能性が大きくなるんだと、すごく実感しました。本日は、ありがとうございました。

遠藤：実行委員の東京農業大学 3 年の遠藤です。
福祉学会に農大は疑問かもしれませんが、自分の研究室では、農水省が進める農福連携の事例を取り上げていて、私自身も兄が知的障害で、別分野にいるのですが、全く無縁ではなかったので、同じ年の社会福祉士を目指す方と交流ができて、知見が広がりました。別分野の学生、今回の題材であるスポーツを専攻している学生、普段は違う志を持っている人が集まって意見を交換する大切さを、グループワークを通して実感できました。とても貴重な経験でした。ありがとうございました。

麻生：日本女子体育大学健康スポーツ学科 3 年の麻生 有倖です。
今回ワークショップでは、福祉とスポーツを融合というか、一緒の視点から考えて、障がいのある方とか高齢の方と一緒にスポーツに取り組むにはどうしたらいいだろうか、みんなが楽しくスポーツに関わるにはどうしたらいいか、というのを題材に話し合いました。
日本女子体育大学では、スポーツを得意とする方が多いので、苦手な方を含め、いろんな方々とワ

ークショップで話すことができ、いろんな視点から意見をもらえて、とても新鮮な気持ちになりました。今回は貴重な時間をありがとうございました。



佐伯：ありがとうございました。拍手をお願いします。

ここでワークショップの助言者の雨宮先生からも一言、いただきたいと思います。お願いします。



雨宮：雨宮です。私のつたない講演に本当にたくさんの学生さんが、いろいろな発想でディスカッションをしてくださり、また、今、発表してくださり、感激しております。ワークショップの１つのグループに参加しました。個人的にはその中で重度訪問介護、放課後等デイサービスというサービスとか、保育士の実習で児童養護施設、自立援助ホームに関わり、若い学生さんが、こうやって福祉に関わっていることを知ることができただけでも、ここに来て良かったなと思いました。たくさんのご意見をいただきました。自分の意見をしっかり持って発表できる若者たちがこんなにいるんだと、日本は安泰だなと安心いたしました。本当に若い方々に触れることができて幸せでした。

あとは、KAiGO PRiDE の写真展も素晴らしいと思いました。また、東京都のビデオで、DJ やトレーダーと介護職を両立させている若者や、子育てを終えた方が保育に関わるとか、いろんなアイデアをここでいただき、福祉に関わるたくさんの人たちが一堂に会して情報交換できる、この会の素晴らしさを感じました。ありがとうございます。

佐伯：ありがとうございました。

本日は、運営に会員大学の学生ボランティアに協力いただいております。ご起立願います。

学生ボランティアを代表して、開催校の日本女子体育大学および次期開催校の東京都市大学から、お一人ずつ教壇までお願いします。そして、一言、感想をいただきたいと思います。自己紹介とどんな役割をしたかについてお願いします。





相馬：日本女子体育大学健康スポーツ学科３年の相馬 帆花と申します。

本日は分科会で質疑、講評のメモ取りを行いました。初めて区民学会でボランティア活動に参加したのですが、これだけたくさんの方々が関わって、開催できていることを知ることができましたので、今後も積極的に参加させていただきたいと思います。本日はありがとうございました。

福田：東京都市大学人間科学部 3 年の福田です。



今回は受付担当と皆様の発表を聞かせていただきました。

この度は、素晴らしい学会に参加させていただき、ありがとうございました。

皆様の様々な発表を聞いて、改めて福祉の幅の広さを感じ、私自身も様々な学びを得ることができました。改めて、ありがとうございました。

佐伯：2 人とも、ありがとうございました。お座りください。

感想などをいただいた皆様、どうもありがとうございました。いずれの会場も大変活発な交流が行われた様子が伝わりました。

今回の大会の報告集･動画は 3 月を目処に、皆様にお届けできるように取り組んでまいります。この大会の成果を、明日からの実践活動にご活用ください。

次回大会につなげてまいりましょう。次回の大会は東京都市大学にて、令和 7 年 11 月 8 日に開催予定です。東京都市大学 園田先生、次期開催校のご挨拶をお願いします。



園田：園田です。

本日、このようなすてきな会を開催していただいた日本女子体育大学の皆様方、事務局の皆様方、感謝を申し上げます。ありがとうございました。この会は、地域の方が集まって全国的に珍しい、私は出会ったことがない学会です。

私事で恐縮ですが、私の大学の当番校が、コロナがあってオンラインになった関係で、年数が定かではないのですが、10 年近く前に当番校でした。2 巡目、3 巡目に入ってきていると思います。こういう貴重な会が継続している、ますます発展しているのを見ると、地域の中に根ざして大切な会だからこそ、継続されているのだと思います。その火を消さないように、来年、頑張って運営させていただきます。

最寄り駅は大井町線の尾山台駅です。多摩川の近くの大学ですが、ぜひお越しください。学生の皆様方は先輩･後輩に声をかけていただき、教員の皆様、他大学にも声をかけて、職場･地域の方々には近所に声をかけていただいて、ぜひお誘い合わせのうえ、本学にお越しください。開催は来年のちょうど今頃です。よろしくお願いします。

それでは皆様方のお元気な顔を拝見できると信じて、挨拶とします。どうもありがとうございました。

佐伯：ありがとうございました。次回、せたがや福祉区民学会の詳細が決まりしだい、ホームページなどでお知らせします。ぜひお誘い合わせのうえ、ご参加いただきますようお願いします。

無事に第 16 回大会が開催できましたこと、御礼申し上げます。

以上をもって、せたがや福祉区民学会 第 16 回大会を終了します。懇親会は本教室を出て、正面玄関を出て左手に行き、学生会館 2 階で開催します。

本日はありがとうございました。お忘れ物のないようにご注意ください。お帰りの際には、アンケートの提出をお願いします。出口に回収箱を設置してあります。ご協力をお願いします。

本日は、ありがとうございました。お気をつけて、お帰りください。

第１６回大会実績

参加者数　４３６人

内訳）来場者　２９８人

当日スタッフ、理事等役員　１３８人（うち学生ボランティア　５７人）

・分科会（各発表終了時人数：単位 人）

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
第１分科会	30	32	27	―	34	29	27
第２分科会	20	15	22	19	31	28	17
第３分科会	9	7	12	11	20	20	7
第４分科会	11	27	21	15	10	19	25
第５分科会	21	24	23	25	17	19	12
第６分科会	36	21	33	28	26	13	15
第７分科会	36	14	22	16	27	5	32
第８分科会	22	25	16	23	15	9	7

・ポスター発表（コアタイム時人数：単位 人）

発表番号	1	2	3	4	5	6
第１会場	17	16	15	14	18	18
第２会場	10	15	13	11	19	

・ワークショップ　３２人

その他

＊手話通訳及びパソコン文字通訳をお願いしました。

＊会員大学（昭和女子大学、日本大学文理学部、駒澤大学、東京都市大学、東京医療保健大学、日本体育大学、東京農業大学、日本女子体育大学）の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影等の大会運営にご協力いただきました。

大会プラス

- KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展
- 区内障害者施設手作り品販売
- 介護の魅力 PR 事業

KAiGO PRiDE@SETAGAYA 写真展

せたがや福祉区民学会会場ロビーで、「KAiGO PRiDE@SETAGAYA」の写真を展示しました。
22 人 17 枚の写真とメッセージから介護の仕事の“誇り・やりがい”を発信しました。









区内障害者施設手作り品販売

区内 5 ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。



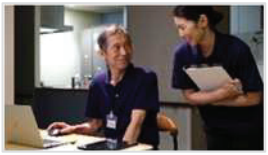

介護の魅力 PR 事業

渋谷をジャック！

11 月 11 日「介護の日」を中心に、渋谷を拠点に、「福祉の仕事イメージアップキャンペーン～介護の魅力 PR 事業～」が行われました。
主催：東京都、映像等制作：（一社）KAiGO PRiDE
5 つのストーリー動画をとおし、福祉・介護の魅力を、発信するイベントとなりました。








大型街頭ビジョンや駅構内サイネージなどで放映される動画を、せたがや福祉区民学会でご覧いただきました。
本館 1 階 102 教室　15：15～16：30

学会名簿

- せたがや福祉区民学会役員名簿
- 第１６回大会実行委員名簿
- 会員名簿

せたがや福祉区民学会役員名簿

【順不同】

役職	氏　　名	所　属／職　名
会長	諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
副会長	園田　巌	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
理事	神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
理事	奥貫　妃文	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授　※
理事	荒井　浩道	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授　※
理事	横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
理事	佐伯　徹郎	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
理事	後藤　悠里	成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授 ※
理事	大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	長谷川　幹	世田谷公園前クリニック名誉院長
理事	田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
理事	神﨑　野恵	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	定方　美穏	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
理事	小澤　保菜美	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
理事	手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
理事	樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
理事	徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	加賀　里実	世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会
理事	田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
理事	山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
理事	長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	瓜生　律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	大澤　正文	世田谷区会計管理者　※
監事	牧野　まゆみ	ＮＨＫ学園高等学校教諭

第７期（令和５年４月１日～令和７年３月31日）

※令和５年４月１日～令和７年３月31日

第１６回大会実行委員名簿

【順不同】

			氏　　名	所　属／職　名
◆	◎	委員長	佐伯　徹郎	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科長教授
◆		副委員長	助友　裕子	日本女子体育大学体育学部健康スポーツ学科教授
	◎		諏訪　徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
	◎		園田　巌	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
	◎		神田　裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
	◎		奥貫　妃文	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科教授　（令和6年4月1日～ ）
	◎		荒井　浩道	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授　（令和6年4月1日～ ）
	◎		横山　順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
	◎		杉原　たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
	◎		後藤　悠里	成城大学社会イノベーション学部心理社会学科准教授　（令和6年4月1日～ ）
	◎		大熊　由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
	◎		長谷川　幹	世田谷公園前クリニック名誉院長
	◎		田口　信彦	世田谷区生涯大学ＯＢ
	◎		神﨑　野恵	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
	◎		定方　美穏	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科（学部生）
	◎		小澤　保菜美	日本大学文理学部社会福祉学科（学部生）
	◎		手塚　由美	地域コミュニティスポーツ コーディネーター
	◎		樋口　美津子	子どもの生活研究所こぐま学園長
	◎		徳永　宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
	◎		加賀　里実	世田谷区内特別養護老人ホーム施設長会
	◎		田中　耕太	世田谷区保健福祉政策部長
	◎		山戸　茂子	世田谷区高齢福祉部長
	◎		長岡　光春	世田谷区社会福祉協議会常務理事
	◎		板谷　雅光	世田谷区社会福祉事業団理事長
	◎		瓜生　律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
			下村　義和	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係

◆印＝開催校委員　　◎印＝学会理事

事務局	世田谷区福祉人材育成・研修センター

会員名簿

	団体名
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部児童学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	東京農業大学
8	日本女子体育大学
9	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
10	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立駒沢生活実習所
11	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立世田谷福祉作業所
12	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立九品仏生活実習所
13	社会福祉法人武蔵野会　世田谷区立烏山福祉作業所
14	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　福祉事業部
15	社会福祉法人世田谷ボランティア協会　市民活動推進部
16	社会福祉法人せたがや樫の木会　下馬福祉工房
17	社会福祉法人せたがや樫の木会　まもりやま工房
18	社会福祉法人せたがや樫の木会　世田谷区立千歳台福祉園
19	社会福祉法人康和会　久我山園
20	社会福祉法人大三島育徳会　世田谷区立玉川福祉作業所
21	社会福祉法人大三島育徳会　博水の郷
22	社会福祉法人大三島育徳会　ホームいろえんぴつ
23	社会福祉法人大三島育徳会　二子玉川地域包括支援センター
24	社会福祉法人友愛十字会　砧ホーム
25	医療法人社団慈泉会　介護老人保健施設　うなね杏霞苑
26	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　おおらか学園
27	社会福祉法人嬉泉　子どもの生活研究所　めばえ学園
28	社会福祉法人嬉泉　宇奈根なごやか園
29	社会福祉法人嬉泉　鎌田のびやか園
30	砧地域ご近所フォーラム2025実行委員会
31	世田谷区
32	社会福祉法人　世田谷区社会福祉協議会
33	社会福祉法人　福音寮
34	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（特養）
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（特養）
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花ホーム（短期入所）
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢ホーム（短期入所）
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　寿満ホームかみきたざわ
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム弦巻
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム松原
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム太子堂
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム世田谷
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム芦花
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　デイ・ホーム上北沢
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷一丁目介護保険サービス
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢介護保険サービス
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　芦花介護保険サービス
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂介護保険サービス
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上町地域包括支援センター
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　太子堂地域包括支援センター

	団体名
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　北沢地域包括支援センター
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上北沢地域包括支援センター
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　上祖師谷地域包括支援センター
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　松原地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷ホームヘルプサービス
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　烏山ホームヘルプサービス
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションけやき
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション北沢
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション芦花
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーションさぎそう
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　訪問看護ステーション三軒茶屋
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　法人統括管理室
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団　世田谷区福祉人材育成・研修センター
64	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
65	社会福祉法人正吉福祉会　きたざわ苑
66	世田谷区老人問題研究会
67	世田谷区介護サービスネットワーク
68	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム等々力の家
69	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム弦巻の家
70	社会福祉法人奉優会　特別養護老人ホーム下馬の家
71	社会福祉法人奉優会　優っくり村下馬
72	社会福祉法人奉優会　喜多見居宅介護支援事業所
73	社会福祉法人奉優会　奥沢居宅介護支援事業所
74	社会福祉法人奉優会　等々力の家居宅介護支援事業所
75	社会福祉法人奉優会　奥沢地域包括支援センター
76	社会福祉法人奉優会　代沢地域包括支援センター
77	社会福祉法人奉優会　深沢地域包括支援センター
78	社会福祉法人奉優会　奉優デイサービス池尻
79	社会福祉法人奉優会　等々力の家デイホーム
80	社会福祉法人奉優会　デイホーム奥沢
81	社会福祉法人奉優会　優っくりデイサービス喜多見
82	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム鎌田
83	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム喜多見
84	社会福祉法人奉優会　優っくりグループホーム池尻
85	社会福祉法人奉優会　優っくり看護小規模多機能介護喜多見
86	社会福祉法人奉優会　優っくり小規模多機能介護奥沢
87	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　特別養護老人ホームフレンズホーム
88	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団　デイ・ホーム上馬
89	社会福祉法人古木会　特別養護老人ホーム成城アルテンハイム
90	社会福祉法人敬心福祉会　特別養護老人ホーム千歳敬心苑
91	社会福祉法人敬心福祉会　烏山地域包括支援センター
92	有限会社　ケアステーションたね
93	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム池尻
94	社会福祉法人こうれいきょう　デイホーム三宿
95	社会福祉法人こうれいきょう　小規模多機能ホーム三宿
96	老人給食協力会ふきのとう
97	セントケアりまいん世田谷
98	グループホーム成城さくらそう
99	東京リハビリテーションセンター世田谷
100	社会福祉法人なごみ福祉会　ここから

会員名簿

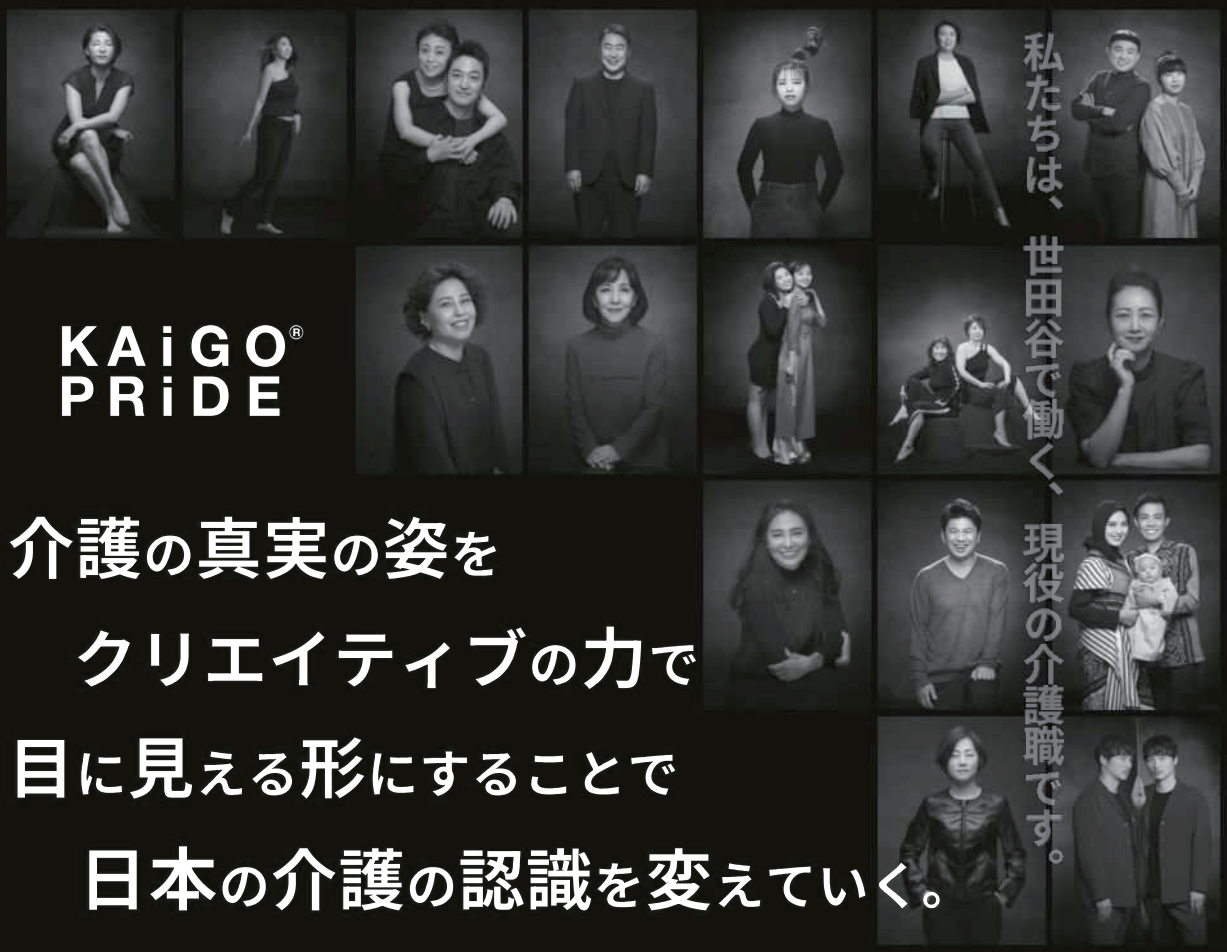
	団体名
101	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム深沢共愛ホームズ
102	社会福祉法人老後を幸せにする会　特別養護老人ホーム等々力共愛ホームズ
103	社会福祉法人青藍会　ハートハウス成城
104	認定特定非営利活動法人　語らいの家
105	株式会社　世田谷サービス公社
106	医療法人財団青葉会　介護老人保健施設 ホスピア玉川
107	NPO法人　せたがや子育てネット
108	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム　なかまっち
109	公益社団法人　東京都世田谷区歯科医師会
110	公益財団法人　世田谷区保健センター
111	社会福祉法人敬寿会　東京敬寿園
112	東京ロイヤル株式会社
113	社会福祉法人南山会　特別養護老人ホーム喜多見ホーム
114	社会福祉法人東京有隣会　第2有隣ホーム
115	社会福祉法人東京有隣会　有隣ホーム
116	社会福祉法人緑風会　特別養護老人ホームエリザベート成城
117	社会福祉法人楽晴会　世田谷希望丘ホーム
118	社会福祉法人寿心会　特別養護老人ホームフォーライフ桃郷
119	社会福祉法人七日会　せたがや給田乃杜
120	社会福祉法人常盤会　ときわぎ世田谷
121	社会福祉法人聖救主福祉会　砧愛の園
122	社会福祉法人ノテ福祉会　ノテ地域ケアセンター深沢
123	一般社団法人　玉川砧薬剤師会
124	一般社団法人　輝水会
125	医療法人社団プラタナス ナースケア・リビング世田谷中町
126	シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
127	一般社団法人　つながりラボ世田谷
128	公益財団法人　世田谷区産業振興公社
129	特定非営利活動法人　視力障害者福祉協会
130	NPO法人　都民シルバーサポートセンター
131	一般社団法人　KAiGO PRiDE
132	社会福祉法人たちばな福祉会　RISSHO KID'Sきらり代沢
133	LPC学園グループ　一般社団法人　日中人材育成協会東京支部　介護事業部
134	株式会社　HABING
135	医療法人社団青泉会下北沢病院
136	あても敦子社会福祉士事務所
137	社会福祉法人サン・ビジョン
138	株式会社イーエス文理
139	社会福祉法人　はる

個人会員
４８名

協賛企業等広告

一般社団法人　KAiGO PRiDE
シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社
東京ロイヤル株式会社
株式会社　メディアチャンネル
あらかわ総合保険
森永乳業株式会社
株式会社　世田谷サービス公社
世田谷区福祉移動支援センター　そとでる
NPO法人　せたがや移動ケア「おでかけサポーターズ」
東京リハビリテーションセンター世田谷
富士エレベーター工業株式会社
有限会社　みやざき印刷
医療法人社団　輝生会　在宅総合ケアセンター成城
世田谷区介護サービスネットワーク
社会福祉法人　世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター

（掲載順）



KAiGO® PRiDE

介護の真実の姿を クリエイティブの力で 目に見える形にすることで 日本の介護の認識を変えていく。

KAiGO × Creative



マンジョット・ベディ
(一社)KAiGO PRiDE 代表理事
クリエイティブディレクター
カメラマン

「私もあなたも、最期まで自分らしく生きるために。」

世界的クリエイター”マンジョット・ベディ”が日本の介護をリデザイン。世界で最も高齢化が進む日本における介護の課題に対し、介護職の self-respect（自己尊敬）を形にすることで、社会からのリスペクトに繋げます。誰もが自分らしく安心して最期まで生きられる社会のために、現役介護職の声を届けるプラットフォームとして都道府県を跨いで日本全国で活動を行っています。

KAiGO PRiDE が企画・主催する介護の魅力発信に特化した複合イベント

開催予告

International KAiGO Festival

世田谷も毎年参加してきた「KAiGO PRiDE WEEK」がパワーアップ！令和 7 年 2 月後半開催予定の「International KAiGO Festival」は、日本の介護の未来を形成し、国内から国際的に展開することを目指すイベントです。このフェスティバルでは、介護分野のイノベーションと実践を紹介し、日本の KAiGO が国際的な CARE の未来にどう貢献できるのかを探求します。このフェスティバルを通じて国内外の介護の課題解決に貢献し「みんなで支え合える日本」になるための第一歩にしていきます。詳細は公式 SNS をフォローして今後の発信に注目してください。

最新情報をキャッチ！
KAiGO PRiDE 公式 SNS

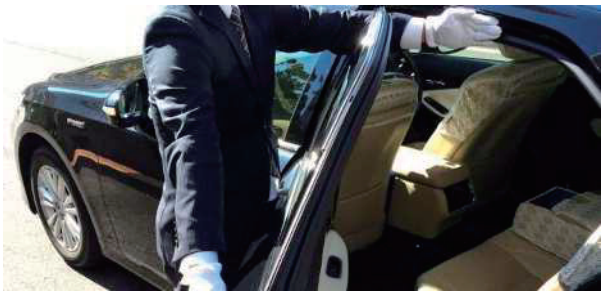
世田谷の介護職も出演！
KAiGO PRiDE WEEK2024
note 記事

介護の魅力発信コンテンツが充実！
KAiGO PRiDE YouTube チャンネル

一般社団法人 KAiGO PRiDE は「せたがや福祉区民学会」の団体会員です

安心・安全・笑顔の日々をつくる











「フードサービス事業」







「車両運行サービス事業」

シダックスグループは
3つのサービスを中心に、
暮らしを支えるサービスを
提供しています。





「社会サービス事業」

SHIDAX

未来の子供たちのために

シダックス大新東ヒューマンサービス株式会社

〒150-0041　東京都渋谷区神南1-12-10　シダックス・カルチャービレッジ　電話：03-6731-9111（代表）

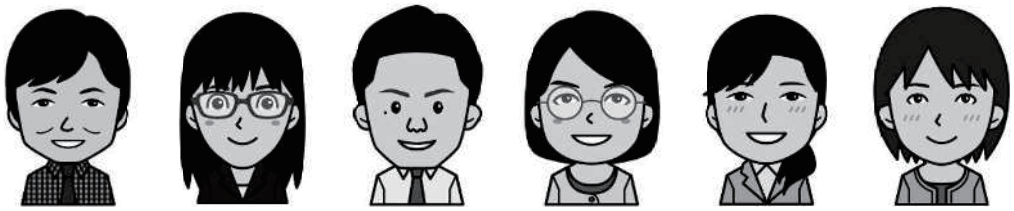
https://www.shidax.co.jp

ご相談・ご紹介0円・年中無休（年末・年始除く）

介護相談

老人ホーム 紹介

見守り付き シニア住宅 紹介



介護職やケアマネージャー職など
経験豊富な相談員がお応えします。

ご相談 0円

相談方法がお選びいただけます。

電話

来店

ロイヤル介護

自宅訪問

老人ホーム紹介センター
ロイヤル介護 入居相談室

東京ロイヤル株式会社

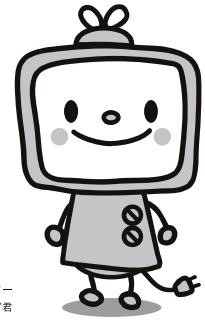
世田谷二子玉川ライズ店

東京都世田谷区玉川1-15-6
二子玉川ライズプラザモール202



二子玉川ライズ タワー&レジデンス向い

0120-03-6186 営業時間/9:00～19:00



弊社キャラクター
メディア君

メディアチャンネルは、
「見るホームページ」から
「使えるホームページ」へ！
を、プロデュースするホームページ制作会社です。

株式会社メディアチャンネル ♦ https://www.media-ch.com/ ♦ 03-5738-7662

安心と安全のコンサルタント
保険のことなら何でもご相談ください

特別区職員互助組合指定代理店

◆火災保険
◆自動車保険
◆旅行保険
◆自治会保険
◆イベント保険
◆その他各種損害保険

三井住友海上火災保険(株)代理店
日本損害保険協会認定　特級(一般)資格

あ ら か わ 総 合 保 険

〒157-0067　東京都世田谷区喜多見 6-6-18
TEL:03-3415-8513　FAX:03-3415-8516
E-mail:kazusige@msh.biglobe.ne.jp

morinaga

かがやく“笑顔”のために

森永乳業

世田谷区の地方公社として、
地域社会の発展と区民福祉の向上に寄与する経営を基本とします。
だれもが輝く働き方で、地域社会とともに歩み、持続可能な共生社会の実現に貢献する企業を目指します。
私たちは、つながる　広がる　心づかいで、区民の笑顔を増やします。

玉川区民会館1F
せせらぎホール併設

Café STREAM
カフェストリーム

香り高いトラジャ・コーヒー、
区内唯一の
ディッピンドッツ・アイスクリームは
いかがですか？



03-3702-4536

障害者雇用を
積極的に進めています



区民センターなど公共施設で、知的・精神・身体障害のある従業員87名が、清掃、受付案内、事務補助として働いています。

エフエム世田谷



83.4MHz

災害時にも、皆様に必要な情報を提供します。

ー FM放送エリア ー
世田谷区 他

＜インターネットラジオ＞

FM 世田谷
ホームページ

Listen Radio

ひとと　街と　明日の　まん中に

株式会社 世田谷サービス公社
SETAGAYA GENERAL SERVICES CO.,LTD.

そとでる

誰もが自由に外出できる世田谷にするために

世田谷区福祉移動支援センター

お一人では外出が困難な方を対象に、車いす、ストレッチャーで乗車できる介護タクシーや移送 NPO の配車・相談をいたします。加盟事業者 135、登録車両 252 台程の「そとでる」をご利用ください。



※原則として世田谷区民が対象ですが、移動に関するご相談は、区外のかたでもお受けいたします。

＜受付時間＞
祝日を除く月～金　9：00 ～ 17：00
TEL：03-5316-6621
FAX：03-3329-8311
http://www.setagaya-ido.or.jp/htdocs/

「そとでる」は、世田谷区から補助金交付を受け NPO 法人せたがや移動ケアが運営しています。

ボランティアグループ
おでかけサポーターズ
おでかけ支援ボランティア募集



誰もが自由に「おでかけ」できる世田谷を創るために一緒に活動しませんか

- **おでかけイベントの企画と実施**
  - おでかけの運転や付き添い
- **区内の交通不便地域を考える**
  - おでかけに関する調査や提言
- **活動を通じての仲間づくり**
  - おでかけサポートの担い手育成

＜事務局は「そとでる」です。気軽にお電話ください。＞
TEL：03-5316-6621



社会福祉法人 南東北福祉事業団／一般財団法人 脳神経疾患研究所

東京リハビリテーション センター世田谷

〒156-0043　東京都世田谷区松原六丁目 37 番 1 号
TEL：03-6379-0427(代表)　FAX：03-6379-0428
Mail：setagaya.info@mt.strins.or.jp



【公式サイト】
http://www.tokyo-rehabili.jp/
東京リハ　世田谷　検索

*小田急小田原線　「梅ヶ丘駅」北口　徒歩５分
*京王井の頭線　「東松原駅」下車　徒歩14分
*東急世田谷線　「山下駅」　下車　徒歩９分
*小田急バス（渋54）渋谷駅～梅ヶ丘駅～経堂駅
光明学校・松原下車　徒歩１分

「安全」「安心」「快適」を乗せて75年。

エレベーターの一生に、
責任を持ちます。

Fuji Elevator
冨士エレベーター工業株式会社
fuji-elevator.co.jp



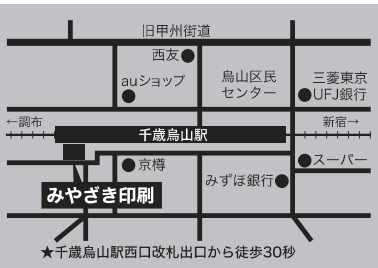
〒101-0047 東京都千代田区内神田3-4-6 TEL:03-3252-8961

世田谷区の印刷は「みやざき印刷」へ

主要品目／名刺・ハガキ・封筒・伝票・冊子・チラシ・ポスター・パンフレット・カタログ

創造する喜び
有限会社みやざき印刷

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山5-33-2
TEL(03)5384-1331・FAX(03)3305-2528
E-mail : info@miyazaki-p.co.jp
URL: http://www.miyazaki-p.co.jp/ みやざき印刷 検索





在宅総合ケアセンター成城
成城リハビリテーション病院

診療科目 リハビリテーション科・整形外科・内科
受付時間 8:30～17:00 診療時間 8:50～17:15
●祝祭日も診療しています ●休診日／日曜日・年末年始
病床数 30床(個室3室・2人床2室・3人床1室・4人床5室)

〒157-0072 東京都世田谷区祖師谷 3-8-7 TEL.03-5429-2292

通所リハビリテーション／訪問リハビリテーション／居宅介護支援事業所 成城リハケア／訪問看護ステーション 成城リハケア

世田谷区介護サービスネットワーク

世田谷区介護サービスネットワークは、世田谷区内で
介護保険サービスを提供する事業者の団体です。

介護サービス
の質向上

独自の研修・
勉強会を開催

世田谷区介護サービスネットワーク

加盟事業所
250以上

地域包括ケア
の推進







安心して暮らし続けることができる地域づくりを目指しています。

事務局：世田谷区福祉人材育成・研修センター　TEL:03-6379-4280
〒156-0043　世田谷区松原6-37-10-1F　FAX:03-6379-4281
https://setagayakaigo.com/

人をつなぎ　地域をつなぐ　共に笑顔のパートナー

社会福祉法人
世田谷区社会福祉事業団



ショートステイ
デイ・ホーム
特養ホーム
ホームヘルプ
訪問看護
居宅介護支援
あんしんすこやかセンター

私たち、事業団が展開する



7つのサービス

世田谷区内全 28 事業所の総合力

【法人本部】
〒156-0057　東京都世田谷区上北沢1-28-17
TEL 03-5450-8223

世田谷区社会福祉事業団　検索

事業団のホームページ
事業団の採用サイト
事業団の公式X
事業団の公式Instagram



世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒156-0043　世田谷区松原 6-37-10　世田谷区立保健医療福祉総合プラザ 1 階

TEL ： 03-6379-4280　FAX ： 03-6379-4281

ホームページ

https://www.setagaya-jinzai.jp

フォローしてね。

X（公式ｴｯｸｽ）

@SetagayaKenshuC



資料

- 「せたがや福祉区民学会」規約
- せたがや福祉区民学会設立趣旨

「せたがや福祉区民学会」規約

平成２１年１２月１２日
改正 平成２６年　３月１０日
改正　令和元年１２月　７日

第１　総　則

１　名称

本会は、せたがや福祉区民学会（以下「学会」という。）という。

２　事務局

学会の事務局は、社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団世田谷区福祉人材育成・研修センター（以下「研修センター」という。）に置く。

第２　目的及び事業

３　目的

学会は、世田谷区民（以下「区民」という。）の福祉の向上をめざして、世田谷区内（以下「区内」という。）において福祉の事業所で働く人、福祉について学ぶ人、教育・研究する人、行政に携わる人及び区民が、互いに対等な立場で福祉実践活動の工夫や抱える課題について、研究成果を発表し、相互に学びあうために、世田谷区を区域として設置する。

①　区内の優れた福祉事業や実践活動について発表する機会をつくり、福祉に携わる人の仕事への意欲を増進させ、専門性の向上を目指す。
②　区民が学会への参加活動を通じて、福祉活動への関心を高め、地域福祉に対して理解を深める。
③　会員が自由に議論し、共に学び、交流を深める。
④　実践事例を発表することにより、時代に即した新しい試みを推進する。

４　事業

学会は、次の事業を行う。

①　大会の開催
②　報告集、学会通信などの発行
③　会員同士の情報交換と交流
④　区民および全国に向けた学会の周知
⑤　その他、学会の目的を達成するために必要な事業

第３　会員

５　会員の要件

学会の会員は、世田谷区に在住、在勤、在学者で次のいずれかに該当する者（個人または団体）とする。

①　福祉サービスを提供している者、福祉サービスを利用している者
②　福祉に関するボランティア活動や地域福祉活動を行っている者
③　高齢者、障害者または子どもの福祉に関わる者
④　福祉について学び、研究する者
⑤　福祉活動について関心のある者
⑥　福祉行政に携わる者

６　会員の権利

学会の会員は次の権利を持つ。

（１）総会における議決権を行使する。
（２）大会において研究発表を行う。
（３）学会通信への投稿及び配付を受ける。
（４）会員の交流

７　賛助会員の要件及び権利

賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の目的に賛同する者（個人または団体）とし、６の会員の権利のうち、総会における議決権は持たない。

８　入会

学会に入会しようとする者は、所定の申込書を事務局に提出し、登録する。

９　会費

（１）会員、賛助会員は、別に定めるところにより会費を納めなければならない。
（２）既納の会費は返納しない。

１０　退会等

（１）会員、賛助会員は、事務局に所定の退会届を提出し、退会することができる。
（２）会費を納期から１年以上滞納した場合は、退会したとみなすことができる。
（３）学会の名誉を傷つけ、または本会の目的に反する行為をし、あるいはこの規約に反する行為のあったときは、理事会の議決を経て除名することができる。

第４　組織

１１　役員

学会に理事及び監事を置く。

（１）理事　２０名程度
（２）監事　２名

１２　役員の選任

理事及び監事は、会員の互選により選任する。

（１）理事のうち１名は理事の互選により会長となる。
（２）会長は必要と認めるときは、理事の中から副会長を指名する。

１３　役員の任期
（１）役員の任期は２年とし、再任を妨げない。
（２）役員は、辞任又は任期満了後においても、後任者が就任するまでは、その職務を行うものとする。
（３）補欠により就任した役員の任期は、前任者の残任期間とする。
１４　会長の職務
会長は、学会を代表し、会務を統括する。
１５　会長の職務代行
会長に事故あるときは、会長があらかじめ指名する他の理事が、その職務を代行する。
１６　理事会
（１）学会の運営に関する審議は、理事をもって組織する理事会において行う。
（２）理事会は、会長の招集により随時開催する。
（３）理事会に議長を置き、議長は会長がつとめる。
（４）理事会は、理事総数の過半数の出席がなければ開会することができない。
１７　理事会の審議
（１）理事会の議事は、出席者の過半数で決し、審議事項は次のとおりとする。
①　予算、決算、事業計画及び事業報告
②　学会の規約の制定及び改廃
③　その他、会務運営のために必要な一切の事項
（２）会議の議事については、議事録を作成するものとする。
１８　監事
監事は、学会の会計及び会務執行状況を監査する。
１９　運営委員
（１）理事の互選により運営委員を置き、適宜、運営委員会を開催する。
（２）運営委員は、学会の運営に関わる実務を行う。
２０　総会
（１）会長は、毎年１回会員の総会を招集する。
（２）会長は、必要と認めるとき又は会員総数の３分１以上から総会招集を求められた場合には、臨時総会を開くことができる。
２１　総会の議決
総会の議事は、出席会員の過半数をもって決する。議決事項は次のとおりとする。
①　１７の①及び②に掲げる事項
②　その他理事会が必要と認めた事項

第５　会計

２２　経費
学会の経費は、会費、寄付金その他の収入をもって充てる。
２３　予算
学会の予算は、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２４　決算
決算は、監事の監査の後、理事会の審議を経て、総会において議決する。
２５　会計年度
会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６　解散

２６　解散
学会は、会員総数の３分の１又は理事総数の過半数から発議された場合には、総会において出席会員の３分の２以上の承認により解散する。

附　則
（施行期日）
１　この規約は平成２１年１２月１２日から施行する。
ただし、第５の２２から２４までの規定については、平成２２年４月１日から施行する。
（学会設立時の措置）
２　設立総会の議事は設立発起人会が提起し、総会出席者の半数以上の賛同により、学会は設立する。
３　設立発起人会の事務局は、研修センターに置く。
４　学会設立前に、設立発起人会の事務局に入会の申込書を提出してある場合は、設立の日からこの学会の会員となるものとする。
５　この学会の設立当初の役員は、設立総会で選任する。この役員の任期は、第１１条の定めに関わらず、平成２３年３月３１日までとする。
６　平成２１年度の会計については、世田谷区から研修センターに交付される委託料により研修センターで行い、理事会及び世田谷区に報告する。

附　則（令和元年１２月７日）
（施行期日）
１　この規約は令和元年１２月７日から施行する。

せたがや福祉区民学会設立趣旨

福祉活動は何よりも実践を基本とし、その質を高め、内容が広く地域の方々に共有されることが望まれ、地域の中で行われている取り組みについて互いに発表し、共有することによって、さらに高まります。また、自分たちの取り組みが、地域全体の中でどのように位置づけられるのか、再発見することも大切です。

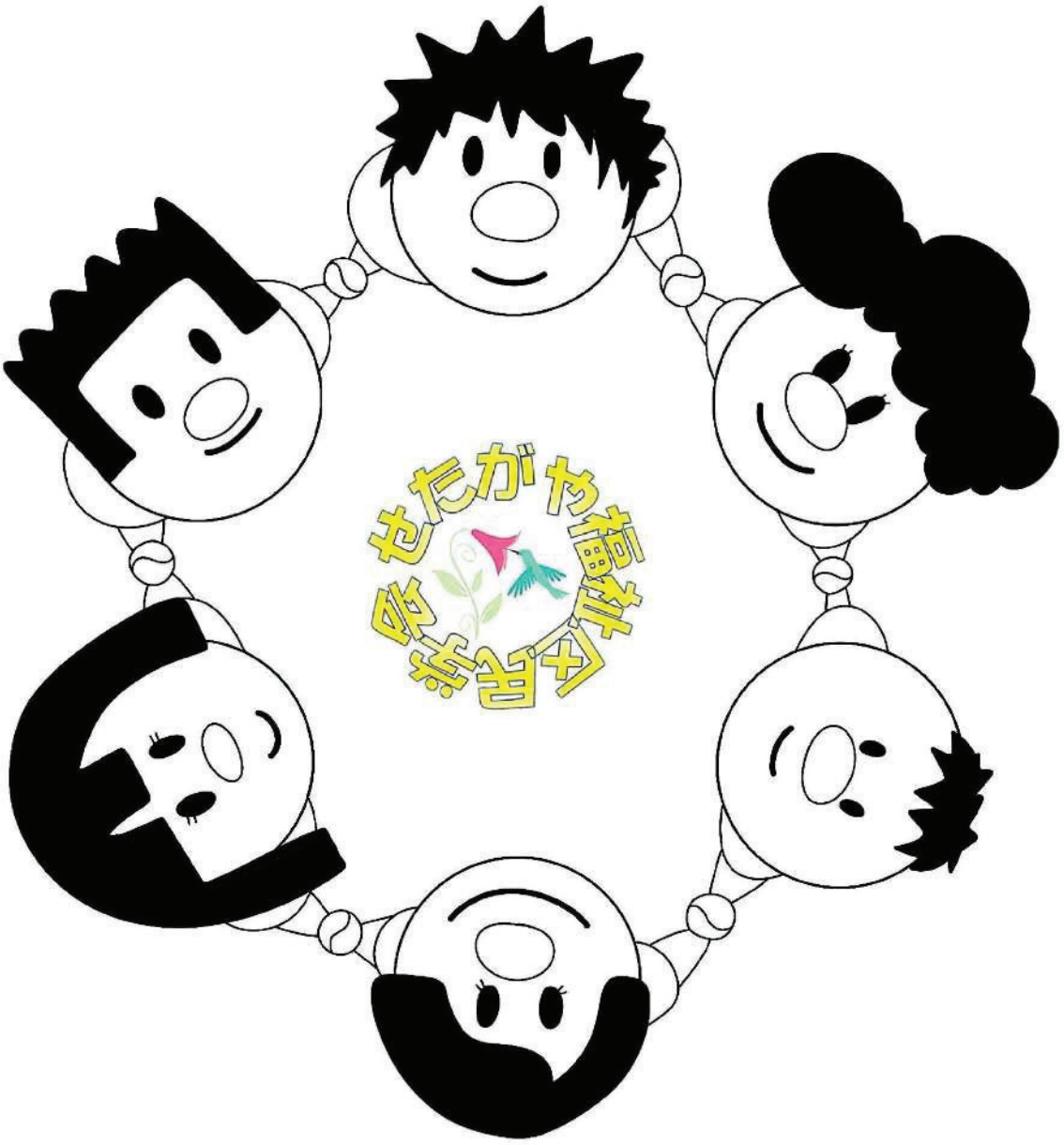
せたがや福祉区民学会は、世田谷区内の大学、福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に、福祉活動や研究成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成２１年１２月に設立されました。

本学会は身近な地域で日頃の実践を発表し、情報交換を通してお互いの交流を深めあい、区民福祉を向上することを目的としています。

せたがや福祉区民学会第１６回大会
報告集

発　　行：せたがや福祉区民学会第１６回大会実行委員会
発 行 日：令和７年３月
開 催 校：日本女子体育大学

〈事 務 局〉
社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団
世田谷区福祉人材育成・研修センター
〒１５６－００４３
世田谷区松原６－３７－１０
世田谷区立保健医療福祉総合プラザ１階
ＴＥＬ：６３７９－４２８０　ＦＡＸ：６３７９－４２８１
E-mail：fukushijinzai@setagaya-jinzai.jp
ＵＲＬ：https://www.setagaya-jinzai.jp/society



主催　せたがや福祉区民学会
協力　日本女子体育大学
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団
後援　世田谷区
　　社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会